

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

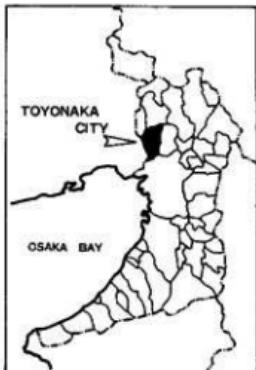
1987年度

1988年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1987年度



1988年3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、千里丘陵と猪名川・千里川の河川によって形成された平野と接する位置にあるため、その歴史は変化に富んだ様子がしのばれます。この地に去來した人々にとっては、千里丘陵の豊かな自然は動物や果実を、猪名川・千里川は稲作、魚と豊かな収穫をもたらしました。

この報告書は昭和62年度事業として豊中市教育委員会が、国並びに大阪府の補助を受け実施いたしました新免遺跡、小石塚古墳、椎堂ノ前遺跡の調査に関するものであります。それぞれの遺跡の調査結果については、以下に報告しているとおりであり、様々な形で古代豊中の姿が明らかにされました。現代に生きる私達は、これら先人たちの足跡に思いを寄せるとともに、文化遺産を後世に伝える責務の大切さを、あらためて考えものであります。

なお、調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導を賜り、また土地所有者・近隣住民の皆様には文化財の重要性をご理解いただきなど、多大なご協力を賜りました。又、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。こうした各方面の方々のご支援により、豊中市の文化財保護行政がより一層推進できることに対し、皆様方に厚くお礼申しあげます。

昭和63年3月31日

豊中市教育委員会
教育長 湯元 英世

例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が昭和62年度国庫補助事業（総額 4,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、小石塚古墳（隣接地）、新免遺跡、椎堂の前遺跡について実施した。昭和62年4月24日～昭和63年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行った。
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施した。詳細は下表のごとくであるが、小石塚古墳（隣接地）においては、松木武彦、岡村勝行に調査現場を担当していただいた。記して謝意を表わす。
4. 本書の執筆は、小石塚古墳（隣接地）を服部聰志（I）、松木（IIIのSX-02）、岡村（IV・V）、平田洋司（II）、杉井健（IIIのSX-01）が行い、岡村が編集し、他の調査ではそれぞれ担当者が執筆、編集した。なお遺物写真は服部が、全体の編集は柳本照男が行った。また遺物実測、整図は、酒井泰子を中心下記の人々の協力を得た。記して感謝する。岡林孝作、平田洋司、杉井健、清家章、大庭重信、佐々木聖子、今井直美、潮平ゆうこ、内藤万里栄、奥野農子
5. 小石塚古墳（隣接地）、新免22次調査出土の埴輪、および壺に塗布された赤色顔料の化学分析は、安田博幸氏（武庫川女子大学薬学部）にお願いし、本書に掲載させていただいた。急な依頼にもかかわらず、快諾していただいた事に対し、深く感謝いたします。
6. 調査、および整理作業にあたって、豊中市文化財審議委員藤沢一夫氏、都出比呂志氏より指導・助言をいただいた事に対し、深く感謝いたします。
7. 各調査地の土地所有者、施工業者、ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護に対して深く御理解いただいた事について、深く感謝いたします。

遺　　跡　名	調　　査　　地	調査面積	担当者	調　　査　　期　　間
小石塚古墳	2次　岡町北1丁目53-1	245m ²	服部聰志	昭和62年8月3日～9月14日
新免遺跡	19次　玉井町2丁目2	450m ²	山元 建	昭和62年4月24日～7月21日
	21次　玉井町3丁目3-27	150m ²	森 幸三	昭和62年8月5日～8月31日
	22次　玉井町2丁目14	228m ²	柳本照男	昭和62年8月17日～10月5日
椎堂の前遺跡	2次　利倉西1丁目10	102m ²	山元 建	昭和62年10月29日～12月21日

目 次

位置と環境 1

小石塚古墳（隣接地）第2次調査

I 調査の経緯	4
II 桜塚古墳群の概要	4
III 遺構の概要	5
IV 出土遺物	9
V まとめ	14
VI 赤色顔料物質の化学分析	15

新免遺跡第19・21・22次調査

I 第19次調査地点

1 調査の概要	19
2 遺構と遺物	19
3 まとめ	34

II 第21次調査地点

1 調査の概要	35
2 遺構と遺物	35

III 第22次調査地点

1 調査の概要	39
2 遺構と遺物	39
3 まとめ	60
4 赤色顔料物質の化学分析	63

椎堂の前遺跡第2次調査

1 調査の概要	66
2 遺構と遺物	66

図 版

- | | |
|-------------------|--|
| 図版 1 小石塚古墳第2次調査地点 | (1)調査区全景（北東から）
(2)調査区全景（東から） |
| 図版 2 小石塚古墳第2次調査地点 | (1)S X - 01検出状況（南から）
(2)S X - 02検出状況（北から） |
| 図版 3 小石塚古墳第2次調査地点 | (1)S X - 02検出状況（西から）
(2)S X - 01出土遺物 |
| 図版 4 小石塚古墳第2次調査地点 | (1)S X - 01出土遺物
(2)S X - 02出土遺物 |
| 図版 5 新免遺跡第19次調査地点 | 調査区全景（北から） |
| 図版 6 新免遺跡第19次調査地点 | (1)S H - 1・2 検出状況（北から）
(2)S B - 1 検出状況（南から） |
| 図版 7 新免遺跡第19次調査地点 | (1)S D - 1 全景
(2)S D - 1 遺物出土状態 |
| 図版 8 新免遺跡第19次調査地点 | (1)S D - 2 遺物出土状態
(2)S D - 2 完掘後状態
(3)S D - 2 遺物出土状態 |
| 図版 9 新免遺跡第19次調査地点 | (1)S D - 4、S K - 1・2 検出状況
(2)S D - 4 遺物出土状態 |
| 図版10 新免遺跡第19次調査地点 | (1)S D - 4 遺物出土状態
(2)S K - 5 検出状況 |
| 図版11 新免遺跡第19次調査地点 | 出土遺物 |
| 図版12 新免遺跡第19次調査地点 | 出土遺物 |
| 図版13 新免遺跡第21次調査地点 | (1)調査区全景（南から）
(2)S K - 3 遺物出土状態（北から） |
| 図版14 新免遺跡第21次調査地点 | |
| 図版15 新免遺跡第22次調査地点 | 調査区全景 |
| 図版16 新免遺跡第22次調査地点 | (1)遺構確認状況（西から）
(2)須恵器出土状態（南から） |

図版17	新免遺跡第22次調査地点	(1) S H - 2 遺物出土状態 (2) S H - 6 + 7 検出状況
図版18	新免遺跡第22次調査地点	(1) S H - 8 遺物出土状態（西から） (2) S H - 8 遺物出土状態（南から）
図版19	新免遺跡第22次調査地点	(1) S H - 10 遺物出土状態（西から） (2) S H - 10 検出状況（南から）
図版20	新免遺跡第22次調査地点	(1) S K - 5 + 9 遺物出土状態（南から） (2) S K - 7 遺物出土状態（北から）
図版21	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版22	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版23	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版24	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版25	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版26	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版27	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版28	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版29	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版30	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版31	新免遺跡第22次調査地点	出土遺物
図版32	椎堂の前遺跡第2次調査地点	(1) 中央地区遺構検出状況（東から） (2) S E - 1 検出状況
図版33	椎堂の前遺跡第2次調査地点	(1) S K - 2 遺物出土状態 (2) 出土遺物

挿 図 目 次

※：折込み

第1図	周辺遺跡分布図（1：30,000）	2
小石塚古墳（隣接地）第2次調査地点		
第2図	調査地点位置図	4
第3図	調査区平面図	6
第4図	S X - 01平面図・立面図	7
第5図	S X - 02平面図・立面図	8
第6図	S X - 01出土埴輪実測図	10
第7図	S X - 02出土埴輪実測図	12
新免遺跡第19・21・22次調査地点		
第8図	調査地点位置図	18
第9図	新免遺跡	18
(第19次調査地点)		
第10図	調査前風景	19
第11図	調査範囲図	19
第12図	S H - 1・2 平面図・断面図	20
第13図	S H - 2 出土遺物実測図	21
第14図	S H - 3 周溝検出状況	22
第15図	S B - 1 平面図・断面図	22
第16図	S B - 2 平面図・断面図	23
第17図	S D - 1 平面図・断面図	25
第18図	S D - 1 出土遺物実測図	25
第19図	S D - 2 平面図・立面図	26
第20図	S D - 2 出土遺物実測図（1）	26
第21図	S D - 2 出土遺物実測図（2）	27
第22図	S D - 2 出土遺物実測図（3）	29
第23図	S D - 4 遺物出土状態	30
第24図	S D - 4、S K - 1・2 出土遺物実測図	31
第25図	S K - 5・S P - 160 平面図・断面図	32
第26図	S K - 3～5・S P - 160・落込み出土遺物実測図	33

第27図	石製品実測図	34
第28図	遺構全体図	※
(第21次調査地点)		
第29図	調査範囲図	35
第30図	S K - 1 平面図・断面図	36
第31図	S K - 3 平面図・断面図	36
第32図	出土遺物実測図	37
第33図	遺構全体図	38
(第22次調査地点)		
第34図	調査範囲図	39
第35図	S H - 1 平面図	39
第36図	S H - 2 平面図	39
第37図	S H - 3 平面図・断面図	40
第38図	S H - 4・5 平面図・断面図	41
第39図	S H - 2・4・5 出土遺物実測図	41
第40図	S H - 6 平面図・断面図	42
第41図	S H - 6 出土遺物実測図	43
第42図	S H - 7 出土遺物実測図	44
第43図	S H - 7 平面図・断面図	45
第44図	S H - 8 平面図	46
第45図	S H - 8 出土遺物実測図 (1)	47
第46図	S H - 8 出土遺物実測図 (2)	48
第47図	S H - 9 出土遺物実測図	48
第48図	S H - 10 平面図・断面図	49
第49図	S H - 10 出土遺物実測図 (1)	50
第50図	S H - 10 出土遺物実測図 (2)	51
第51図	S H - 10 出土遺物実測図 (3)	52
第52図	流水文拓影図 (1 : 2)	53
第53図	S H - 10 出土遺物実測図 (4)	53

第54図	S K - 2 平面図・断面図.....	54
第55図	S K - 3 平面図・断面図.....	54
第56図	土坑出土遺物実測図.....	55
第57図	S K - 5 平面図・断面図.....	56
第58図	S K - 7 平面図・断面図.....	56
第59図	S K - 7 出土遺物実測図.....	57
第60図	紡錘車実測図.....	57
第61図	須恵器実測図.....	58
第62図	石鏡・石剣実測図.....	59
第63図	砥石実測図.....	60
第64図	遺構全体図.....	※
(推定の前遺跡第2次調査地点)		
第65図	調査地点位置図 (1 : 8,000)	66
第66図	基本層序.....	66
第67図	S E - 1 平面図・断面図および出土遺物.....	67
第68図	出土遺物実測図	68
第69図	4層上面遺構全体図.....	※

位置と環境

位置 豊中市は大阪の北部に位置し、地理的には大阪北部を二分する千里丘陵の西側、西摂地域の東端にあたる。豊中市は北部に大阪層群からなる待兼山丘陵、刀根山丘陵があり、中央部に中位～低位段丘層の豊中台地、西部・南部に沖積低地の西摂平野が広がっているなど、比較的变化に富む地勢を有しており、各地に数多くの遺跡が分布している。これらの遺跡の中で今回発掘調査の行なわれた小石塚古墳、新免遺跡はそれぞれ、豊中台地の南西部と北西部に位置し、椎堂の前遺跡は西摂平野に位置している。

歴史的環境 豊中市の遺跡は螢池西遺跡、箕輪遺跡、柴原遺跡などから國府型のナイフ型石器が出土しており、旧石器時代にまでさかのぼる。縄文時代には、有舌尖頭器を出土した野畠春日町遺跡や野畠遺跡、柴原遺跡などが千里川流域に点在している。しかし晚期には平野部にも遺跡の分布がひろがっている。

弥生時代になると、水稻耕作の進展に伴い、猪名川流域や豊中台地の縁辺部を中心に遺跡が急増する。勝部遺跡や尼崎市田能遺跡は前期の代表的な集落であり、螢池北（宮ノ前）遺跡や新免遺跡は台地縁辺部に存在した中期の大規模な集落と思われる。また、利倉西遺跡、上津島遺跡、穂積遺跡、庄内遺跡など後期の著名的な遺跡が平野部に多数分布している。

古墳時代は、弥生時代から継続する集落がほとんどであり、千里川沿いに分布する柴原遺跡、本町遺跡、新免遺跡などは、桜井谷の支谷を利用した須恵器生産に伴う桜井谷窯跡群と密接な関係を持っていた事がうかがえる。一方、古墳は待兼山古墳、御神山古墳が前期古墳として千里丘陵の縁辺部を利用して築造されている。中期には小石塚古墳を含む桜塚古墳群が台地上に形成されている。桜塚古墳群は明治の絵図によると総数36基を数えるが、現存するのは東部の大塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳、西部の大石塚古墳、小石塚古墳の5基を数えるにすぎない。後期古墳としては、太鼓塚古墳群、新免宮山古墳群が知られている。また最近の調査で、新免遺跡、利倉南遺跡、穂積遺跡からも古墳の周濠が検出されており、古墳の分布の再検討がなされている。

7世紀以後には、古代寺院として飛鳥時代末の建立と考えられる金寺山廃寺が存在する。奈良時代には豊中市域も攝津国豊島郡として律令制下に入り、柴原遺跡、上津島南遺跡、島田遺跡などから掘立柱建物跡が検出されている。平安時代の後半になると、上津島南遺跡で掘立柱建物跡や墓が検出されており、律令制崩壊時の有力農民の屋敷地と見られている。中世の集落遺跡は当時の櫻坂郷に存在する小曾根遺跡、穂積遺跡などが確認されており、また、山ノ上遺跡では文献に残らない寺院が室町時代頃まで存在していた事が調査により確認されている。



1 深田市古ノ前遺跡	10 箕輪遺跡	19 小石塚古墳	28 原田城跡	37 寺内遺跡	46 須佐西遺跡
2 室生北遺跡	11 相野町遺跡	20 大石塚古墳	29 原田遺跡	38 桜堂の前遺跡	47 西原ポンプ場遺跡
3 待波山遺跡	12 金寺山廃寺	21 大塚古墳	30 曾根西遺跡	39 利倉西遺跡	48 球横溝跡
4 内田遺跡	13 新免富山古墳群	22 朝瀬子塙古墳	31 原田元町遺跡	40 利倉北遺跡	49 小曾根遺跡
5 桑原遺跡	14 本町遺跡	23 南天平塚古墳	32 曽根南遺跡	41 利倉遺跡	50 北条遺跡
6 桜井谷宮跡群	15 新免遺跡	24 長野寺遺跡	33 豊島北遺跡	42 利倉南遺跡	51 今西氏里敷
7 上野遺跡	16 山ノ上遺跡	25 稲部遺跡	34 清山城跡	43 上津島川床遺跡	
8 室池西遺跡	17 下原富山群	26 稲部東遺跡	35 服部遺跡	44 上津島島遺跡	
9 鹰巣山古墳	18 桜塚古墳群	27 原田中町遺跡	36 若竹町遺跡	45 上津島島南遺跡	

第1図 周辺遺跡分布図 (1:30,000)

**小石塚古墳（隣接地）
第2次調査**

I. 調査の経緯

調査地点は、岡町北1丁目53-1に所在し、国史跡小石塚古墳の北側隣接地に相当する。今回、共同住宅建設に先立つ事前調査として、小石塚古墳北側周溝の範囲確認を主目的として実施したものである。

調査は、当初敷地南端に幅1.5mの第1トレンチ（東西）を、西端に第2トレンチ（南北）を設定し、厚さ20～60cmの表土及び盛土を重機掘削により排除した。その後、地山上面を精査し遺構の検出に努めたが、周溝とみられる明確な輪郭は検出されず、意外にも第1トレンチ東西において、2基の円筒埴輪棺を検出するところとなった。

以上の経過を踏まえ、第1トレンチ北側にもさらに別の埴輪棺の存在も予測されたので、施工側と協議を行ない、敷地内約245m²を対象に本調査を実施する運びとなった。

なお調査経費については、試掘部分を補助金の対象とし、残り建物相当部分については、施工側の負担によるものとした。

II. 桜塚古墳群の概要

豊中市・吹田市にまたがる千里山丘陵は島熊山（標高112.3m）を頂点とし、八方に緩傾斜しながら多くの入り込んだ丘陵、及び支丘陵を形づくっている。そのうち南西方向に張りだした一支丘陵は、西方を北西に流れる千里川、東方を南北に流れる天竺川によって挟まれ、通称豊中台地と呼ばれている。小石塚古墳はこの台地の南西端標高20mに立地する。小石塚古墳は



第2図 調査地点位置図

1956年に南方の大石塚古墳とともに国の史跡指定を受け、1979年には保存整備事業の一環として考古学上の基礎資料を得るために発掘調査が行なわれた。その結果、小石塚古墳は粘土構を埋葬施設とする、全長49mの南面する前方後円墳であり、出土した埴輪、壺形土器からその築造期は古墳時代前期末に遡ることが明らかになっている。

小石塚古墳は古墳時代中期に盛行する桜塚古墳群に属する。桜塚古墳群は、現在残念ながら大石塚古墳、小石塚古墳、大塚古墳、御獅子塚古墳、南天平塚古墳の5基を残すのみとなっているが、明治時代の古図、記録によれば総数36基を有していたことがわかる。墳形は前方後円墳、円墳、方墳で半数以上が周濠を有し、大石塚古墳、小石塚古墳を盟主墳とする西群と大塚古墳、御獅子塚古墳を盟主墳とする東群に二大別することができる。西群では大石塚、小石塚古墳を中心に前方後円墳3基と円墳20基が密に存在している。円墳群の一部は小石塚古墳北側の緩斜面に、他はそれを下った平坦面に位置する。東群は前方後円墳2基、方墳1基、他は円墳で構成され、平坦な台地上に立地している。

以上の古墳のうちでこれまでに調査が実施され埋葬施設が明らかになっているものは、竪穴式石室の存在が推定される大石塚古墳を除けば、すべて割竹形木棺か組合式木棺を納めた粘土構である。副葬品の特色は、1983年に調査された大塚古墳、1985年に調査された御獅子塚古墳に示されるように、当時の最新の武器、武具類を豊富に有していたことが挙げられる。

なお、周辺の前期古墳としては、北から猪名川右岸長尾山系に位置する万籠山古墳、左岸にある鷦三堂古墳、池田茶臼山古墳、待兼山古墳、御神山古墳、新免上佃古墳がそれぞれ単独で丘陵上に位置し、西摂平野を望んでいる。

III. 遺構の概要

1. 基本層序

調査区の層序は大きく3層に区分される。第1層は住宅に伴なう盛土、第2層が遺物包含層、第3層が地山である。このうち第2層が面的に存在するのは地山面の低い調査区南壁沿いのみであり、との部分は地山まで削平が及んでいた。第2層は黄褐色粘質土で、直下の地山土に起源すると考えられる。遺物の密度は低く、調査区南西コーナー付近を中心に、若干の埴輪片と6世紀代の須恵器片を得た程度である。第3層の地山は、黄褐色の粘質土で、大阪層群の一部と考えられる。

2. 検出遺構

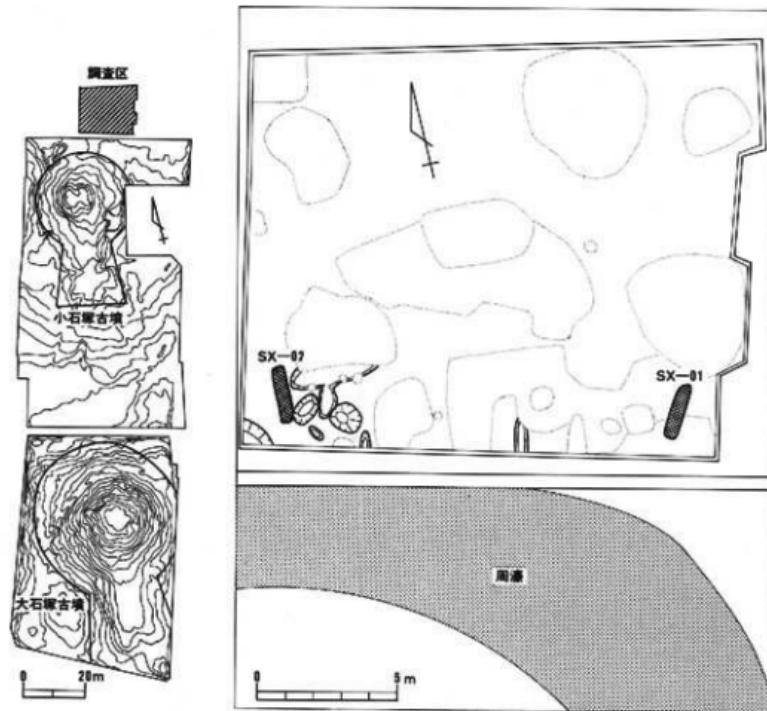
遺構は、3図に示すように、当初設定した第1トレンチの範囲内、すなわち調査区の南壁沿いのみで検出された。第1トレンチの北側に拡張した部分は、削平を受けた上に最近のごみ穴による攪乱が著しく、遺構は発見されなかった。

なお、当初検出が想定された小石塚古墳の周濠は全く見られなかった。以前、小石塚古墳の周濠の調査の際、今回の調査区に近接するトレンチでは周濠の幅が徐々に小さくなる傾向が認められた。このことと墳丘西側、前方部には周濠がないことを考えあわせると、小石塚古墳の周濠は地山レベルの高い墳丘東側だけを画する溝状のもので、墳丘北側で徐々に幅を減じて消滅するものと思われる。

以下に詳述する2基の円筒埴輪棺以外にもいくつかの遺構が発見されたが、皿状や舟底状の不整形な窪みなどが多く、また遺物もほとんど含まないので、性格を明確にできるものはない。

SX-01(第4図) 調査区の南東隅で検出した。棺はほぼ南北に横たわり、握方の全長197cm、幅50~55cm、棺本体の全長は170cmを測る。

棺は墓域の北にほぼ一個体分の円筒埴輪(北個体、埴輪2)を、南に口縁部を含む2段分(南個体、埴輪1)を用いている。この際、互いの口縁部が向かいあうように据えている。しかし、その両方に挟まれた中央部では、棺底に相当する部分の埴輪が検出されず、またその部分に落



第3図 調査区平面図

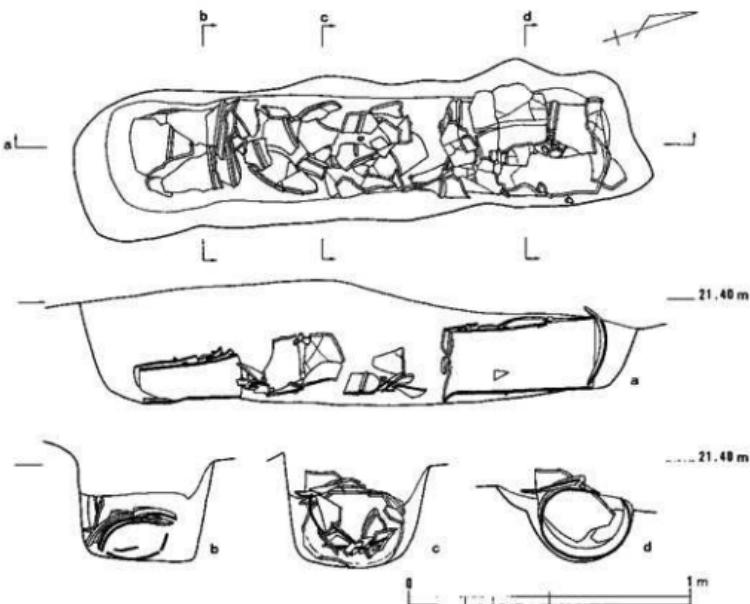
ち込んでいた埴輪片は、みな外面を上に向けた状態であった。このことから遺体の頭部と足部を円筒に納め、胸部を円筒埴輪、朝顔形埴輪片を用いて被覆した埋葬状態を想定できる。

小口の閉塞は北側のみで、壺形埴輪の口縁部（埴輪4）を約3分の1用いている。また北個体の透孔は円筒埴輪片で塞がれていた。

棺を構成していた個体数は、北個体（埴輪2）、南個体（埴輪1）、透孔の閉塞と胸部の被覆のため用いられた円筒埴輪片（埴輪3）、北側小口の閉塞用の壺形埴輪の口縁部片（埴輪4）、胸部を被覆していた朝顔形埴輪片（埴輪5）の計5個体であった。

北個体の下に地山とよく似た少し黒味を帯びた土が見られたが、これは棺を安定させるための置き土と考えられる。

北個体の埴輪の中に入り込んでいた土のうち底部付近に純褐色の土が見られた。遺体を納める際に使用された赤色顔料を示すものかと思われる。レベルが北側が高いこと、小口の閉塞が北側のみであることも合わせ、頭位方向は北の可能性が高い。なお、棺内、棺外に副葬品は検出されなかった。

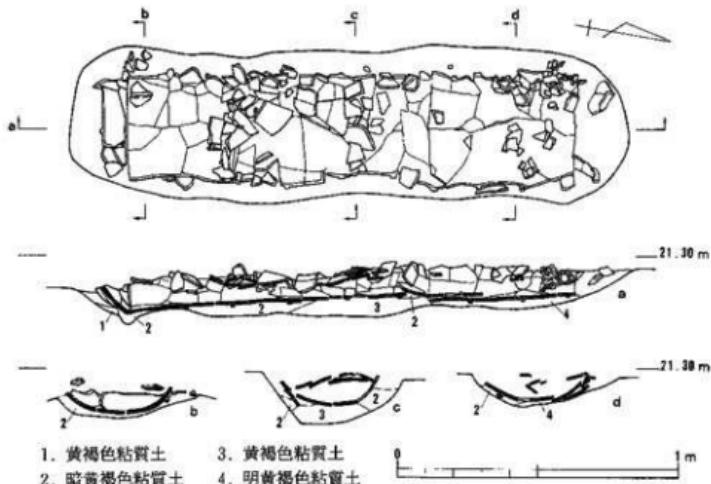


第4図 SX-01 平面図・立面図

S X - 02 (第5図) 調査区の南西隅で検出した。主軸方向はほぼ南北で、現存面での掘方の長さ198cm、幅55cm、棺体の長さ155cm、現存幅40cmを計る。大きく削平され、深い所で20cm程度しか残存していないが、幸いにも棺底付近は現位置を保っており、だいたいの構造を知ることができる。

棺体は2個体の円筒埴輪を、互いの口縁部どうしが接するように組み合わせて構成している。そのうち南側の個体(埴輪6)は長さ105cmの円筒埴輪であるが、北側の個体(埴輪7)は口縁部より数えて4条目の突帯の直下で打ち欠き、長さを50cmほどにして使用している。棺体の南端には、小口の押さえとして使用されたと思われる別個体の円筒埴輪の底部の破片(埴輪8)が、外側に倒れかけた状態で検出された。北側の小口の押さえと断定できる破片は検出されなかった。また、棺体中央部から壺形埴輪の肩部の破片(埴輪10)が、北小口付近から同じく頭部の破片(埴輪9)が、それぞれ原位置から動いた状態で発見された。これらは棺の透孔や縫目すき間、あるいは小口などを塞いでいた破片が、崩落もしくは削平の際に、現在の位置に動いてきたものと推測される。

棺体の取り上げ後、断ち割りを試みて棺下の土層の観察をおこない、棺の設置状況を検討した。まず南側の個体が直接地山に接しているのは小口から少し北寄りの棺底のみである。したがって、5図の土層2、3のいずれかまたは両方を、設置前に置かれていた土と考えざるを得ないが、堆積状況と土質からみて3を置き土と考えた。北側の個体は小口付近の棺底、それも



第5図 S X - 02 平面図・立面図

少し西に片寄った部分で地山に接する以外は、土層4の上に載っていた。したがって4は設置以前の置き土と考えられる。土層2は3、4と比べると汚れており、しかもしまりが悪く、明らかに異なる性格の土であると思われる。また、2は随所で3、4にかぶさるように堆積していた。さらに2層中にはわずかであるが棺上部から流れ込んできたと思われる埴輪の細片が含まれていた。以上の諸状況を勘案した結果、2を流入土と判断した。すなわち、現在2が堆積している部分は棺底または棺底近くの棺側であり、棺埋設の際の人工的な埋土が及ばず、当初は空間をなしていたらしい。そこへ時間がたつにつれて、土や崩れ始めた棺体の破片などが流入したのが2であると理解している。

なお、棺内、棺外ともに副葬遺物は検出されなかった。

IV. 出 土 遺 物

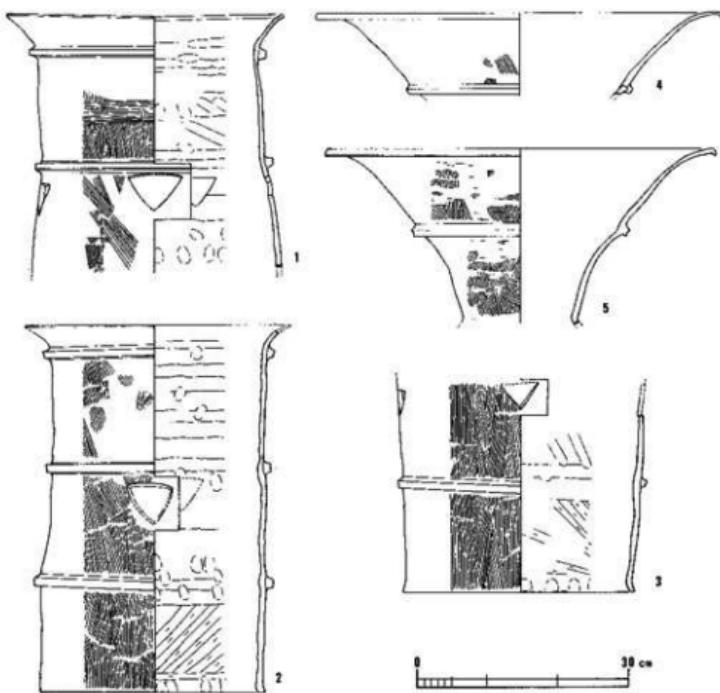
今回の調査で出土した遺物は盛土中から検出した須恵器の杯身を除けば、全て円筒埴輪を構成していた埴輪である。そのほとんどが円筒埴輪、朝顔形埴輪であるが、少量ながら森形埴輪も存在する。以下、各個体の特徴を中心に述べていくことにしよう。

円筒埴輪（第6図-1,2,3 7図-6,7,8）

今回出土した円筒埴輪は、口縁端から口縁直下の突帯の間隔が著しく短かい点、三角形の透孔を採用する点を共通の特徴とするが、主にその口頭部の形態から三分類することが可能である。それぞれをA類、B類、C類と呼ぶことにする。

A類（第6図-1,2,3） SX-01を構成していた円筒埴輪が該当する。器壁の厚みが平均0.7cmと薄いこと、口縁が突帯直上から短く開くこと、突帯が断面台形を呈することを形態上の特徴とする。製作・調整面では幅2.0cm強の粘土紐を積み上げ、外面にタテハケ、ヨコハケを主体的に用い、内面にはヘラケズリを最下段に施す他は、ユビナデで全体を仕上げている。また、突帯貼り付けの前に、一辺0.4cmの方形刺突孔を4.0cm～5.0cm間隔に配している。

埴輪1はSX-01の南個体として使用されていたものであり、口縁部を含む上部二段分がほぼ完存している。口径39.2cm、残存高36.2cmを測り、断面台形の幅平均1.1cm、突出平均1.1cmの突帯を貼り付けている。透孔はほぼ対向する位置に四方に穿たれる。破損部はほぼ一定の高さを保ち、外から意識的に打ち欠いたことが窺える。外面調整はタテハケ、ナナメハケを主体とし、部分的にヨコハケを施している。埴輪2はSX-01の北個体として用いられていたもので、円周にして縦一列約7分の1と口縁端部を欠いている。3段3突帯と口縁部からなり、復元高51.5cm、復元口径37.4cm、底径31.6cmを測る。透孔は倒立三角形のものが2段目に、4分の1円周の位置に3つ配され、一方が省略されている。このことは、透孔が省略された位置に対向する側がこの埴輪の正面であることを示しているのだろう。外面は風化が著しいが、ヨコ



第6図 SX-01 出土埴輪実測図

ハケは見られず、タテハケ、ナナメハケ、内面は1段目をヘラケズリする他は、ユビナデで調整している。埴輪3はSX-01の北個体、南個体の間で遺体に覆いかぶせるように検出された埴輪片と北棺の透孔を塞ぐのに用いられていた埴輪片の接合の結果、底部2段分に復元できた埴輪である。底径32.8cm、残存高30.0cmを測る。倒立三角形の透孔は、4分の1円周ごとに四方に配されていたものと思われる。径、黒斑の位置、方形刺突孔間の幅、色調等の点で埴輪1と類似し、同一個体の可能性がある。

B類（7図-6,8） SX-02を構成していた南個体（埴輪6）とその南小口の底部埴輪片（埴輪8）がこの類に属する。その特徴として、器壁が厚く、平均2.0cm幅の断面台形のおおぶりな空帶を有する。また、ハケメ条線も1.0cm当たり7、8本と粗い。色調は褐色を帯び、胎土に緻密さを欠き全体に軟質的印象を与えるものである。

埴輪6は円筒を縦割りにした約半分が残存している。器高105.0cm、口径40.5cm、底径32.6cmを測る。透孔を3段目に倒立三角形、5段目に正立三角形を対向する位置に二対、四方に配

する。口縁形態は通常の円筒埴輪のものと異なり、屈曲して外反する、いわゆる二重口縁状をなす。外面調整は突帯貼り付け前のタテハケ、貼り付け後のヨコハケを基本とするが、段によってハケ調整の有無がみられ、乾燥単位を示唆するものである。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられている。埴輪8はSX-02の南小口として用いられていたもので、円筒埴輪の底部を利用している。円周にして約10分の1残存し、復元底径35.6cm、残存高20.7cmを測る。外面にはタテハケ後、ヨコハケ、ナナメハケが、内面には1段目はナデで2段目よりハケ調整が施されている。

C類（7図-7） SX-02の北個体に用いられていた埴輪7が該当する。約半円周分残存し、口径48.0cm、残存高51.8cmを測る。口縁直下の突帯と次の突帯の間隔が狭いこと、胎土が緻密で堅密な焼成であること、器壁の厚みが平均0.7cmと薄手であること、突帯の断面が各辺内弯し鋸角的であること等が特徴として指摘できる。透孔は上から数えて2、3段目に正立三角形を、5段目に倒立三角形を対向する位置に二対、四方に配する。調整として、外面は最上段がタテハケの他、突帯貼り付け前後にナナメハケを施す。内面は部位によって一様でなく、ナデ、オサエあるいはナナメハケ、ヨコハケである。突帯貼り付け個所に方形刺突孔を施さず、極めて浅い幅0.2cmの凹線をめぐらしている。さて、この円筒埴輪の規模であるが、最上部の突帯が埴輪6の口縁に至る屈曲部に相当すると考えると、埴輪6に見られる5段目の正立三角形、3段目の倒立三角形の透孔が、埴輪7の上から3段目、5段目のものと合致し、7段6突帯に復元できる。また、その際の器高は103cm前後になる。

朝顔形埴輪（6図-5）

今回出土した朝顔形埴輪は口頭部のみであり、壺形埴輪のものと極めて類似する。小石塚古墳での両者の主な判別方法は、朝顔形埴輪の口頭部が壺形埴輪のものに較べやや厚みがあり、特に口縁端部が重厚であることである。

埴輪5はSX-01の北個体、南個体の間で遺体を覆いかぶせるようにして検出されたものである。約5分の3が残存し、口頭部の全形を窺い知ることができる。口径55.0cm、頭部クビレ径16.4cm、高さ24.3cmを測る。頭部の厚みは平均0.9cm、口縁部の厚みは0.5～0.8cmである。外方する口縁部は途中から肥厚し、端部では幅1.0cmの面をつくる。調整は外面はタテハケの後ナデ、内面はナデである。

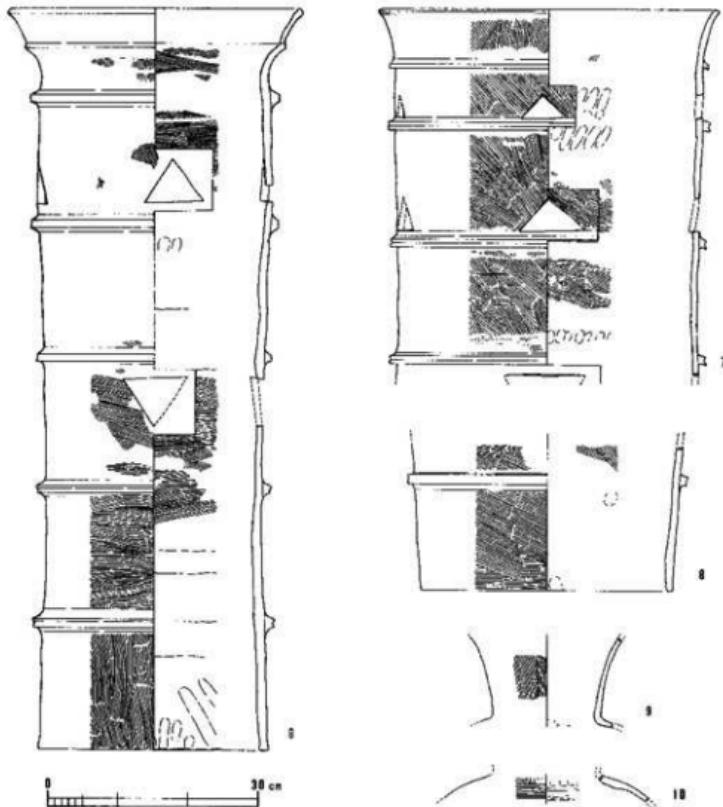
壺形埴輪（6図-4,7図-9,10）

埴輪4はSX-01の北小口に用いられていたもので、円周にして約3分の1が残存する。復原口径57.2cm、残存高11.6cm、口縁部の厚み0.4～0.8cmを測る。弧を描いて外方する口縁は端部を斜め下方に垂下させる。調整は外面がタテハケおよびナデ、内面がナデである。ベンガラを外面は全面に、内面は中央付近に広く確認できる。内面のベンガラは北個体内の底部付近の

上が純褐色を呈していたことと考え合わせると、遺体を納める際に塗布された可能性が考えられる。埴輪9は頭部で、SX-02の北小口付近から検出されたものである。上端は屈曲部にはほど近いと思われ、一様にヨコナデが認められる。埴輪10は肩部で、SX-02の中央部で検出されたものである。調整は外面がタテハケ、ヨコハケ、内面がヘラケズリである。胎上・色調が類似し、同一個体と思われる。埴輪9、10共に外面にベンガラが塗布されている。

顔料塗布について

今回出土した多くの埴輪にベンガラによる赤彩が認められるが²⁾、埴輪1、埴輪7では肉眼で現在黒灰色に見える顔料（以下、便宜的に黒色顔料と呼ぶ。）とベンガラで塗り分けられていた



第7図 SX-02 出土埴輪実測図

可能性がある。埴輪1では、半円周部分にベンガラが塗られ、もう一方の半円周部分には、風化が著しいものの黒色顔料が観察できる。その境界線は直線的であり、特に明瞭に窺える。一方、埴輪7では段ごとに塗り分けられていたようである。³³⁾顔料は全面に残存しているわけではないが、口縁を含む最上段が赤で、その下が黒、赤、黒、赤と分けられていたことが窺える。黒色顔料は器壁に薄く付着しており、器壁内部に及ぶ黒斑とは明確に区別される。埴輪1は赤彩した面を上にして検出されており、これが偶然でないとすれば、棺としての利用時に顔料塗布された可能性も考えられる。以上の顔料の塗り分け、黒色顔料の使用の是非は、黒色顔料の分析いかんに懸っており現在検討中である。

大石塚古墳・小石塚古墳の埴輪との関係

今回出土の埴輪のうち、S X-02から出土したB類の埴輪6・8、C類の埴輪7は大石塚古墳出土のものに、また壺形埴輪の埴輪9・10は小石塚古墳出土のものに類例が求められる。³⁴⁾また、このうち埴輪6では、3段目以上に風化が著しいのに較べ、1段目、2段目の遺存状態の良好なことを確認している。このことは埴輪6が本来大石塚古墳に樹立されていたものであり、棺として転用されたことを示すものである。S X-02の他の埴輪が埴輪6同様、転用であるかは確認できないが、この埴輪6が小石塚古墳で認められる壺形埴輪と共存する事実は、両墳の築造の時期差を考える上で示唆的である。つまり、小石塚古墳の壺形埴輪は、大石塚古墳に樹立されていた埴輪が倒壊するまでに製作されたと考えられ、両古墳が繼起的に築造されたことを示す有力な傍証となるからである。一方、S X-01で出土した円筒埴輪A類は、口縁部を検出していないため確実性を欠くが、小石塚古墳出土の薄手の円筒埴輪に類似する。大石塚古墳には現状では認められない。朝顔形埴輪、壺形埴輪は同様のものが、小石塚古墳に認められる。以上、S X-01は小石塚古墳の埴輪と同じ埴輪を使用している可能性が高い。

遺物のまとめ

今回出土の円筒埴輪はいずれもその口頭部の特徴から通有のものと区別される。口縁部を外反させる資料は古式の円筒埴輪に比較的多く見られるが、このうち今回のA類のように突堤直上から短かく外反させる資料には、大阪府茶臼塚古墳例³⁵⁾、京都府興戸古墳例³⁶⁾、三重県高田2号墳例³⁷⁾等がある。なお、高田2号墳例は3段3突堤と小型で埴輪2と近似する。B類の二重口縁状の口縁を有する資料には、細部で異同があるが、大阪府壺井御旅山古墳例³⁸⁾、奈良県新山西S X-18例³⁹⁾等がある。C類では、最上段の突堤間が狭いという点に限れば、鰐付朝顔形埴輪において奈良県東大寺山古墳例⁴⁰⁾、同マエ塚古墳例⁴¹⁾があるが円筒埴輪では類例を知らない。

以上の三類の円筒埴輪はいずれもその口縁形態が特殊器台形埴輪の退化した形態⁴²⁾のバリエーションの中で捉えられるものである。今回の調査は三様の古式の円筒埴輪の良好な資料を提供したことになる。

V. ま と め

今回の調査の成果の要点を列挙する。

1. 当初、調査区南端で検出が想定された周濠は認められなかった。このことから周濠が墳丘北側で徐々に幅を減じ、消滅する構造であると考えられる。
2. 円筒埴輪棺は桜塚古墳群内では古墳以外の墓制としては初めての資料で、この地域の古墳時代社会の階層的構造を知る上で貴重な資料を提供した。
3. 2つの円筒埴輪棺から得た埴輪は近接する大石塚古墳、小石塚古墳の埴輪の転用である可能性が高い。
4. SX-02で共伴した埴輪の観察から、両古墳が継起的に築造された事実を示す有力な手がかりを得た。
5. 検出した円筒埴輪に顔料の塗り分けられている可能性のあるものが認められた。
6. 特殊器台形埴輪の影響を留めた三様の古式の円筒埴輪の良好な資料を得た。

註1 赤坂次郎「円筒埴輪製作覚書」(『古代学研究』90号 1980)

註2 安田博幸氏の分析による。VI 参照。

註3 布留遺跡の円筒埴輪、朝顔形埴輪には赤と白の彩色が段毎に交互に施されているという。畠山雅昭「初期の朝顔形埴輪」(『考古学雑誌』63-3 1977)

註4 豊中市教育委員会「史跡大石塚・小石塚古墳」 1980 B類は同報告書50頁第38図12に、C類は48頁第36図1、49頁第37図5に、壺形埴輪は22頁第17図壺形土器にそれぞれ該当する。

註5 小石塚古墳の壺形土器、埴輪については、註4文献22、23頁第17、18図参照のこと。

註6 柏原市教育委員会「松岳山古墳群51-1次調査」(『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1985年度』 1986)

註7 梅原末治「田辺町興戸の古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊 1955)

註8 櫻木義讓他「二 松阪市の古墳 神戸地区」(『松阪市史』第2巻史料編考古 松阪市中央編纂委員会 1978)

註9 大阪府教育委員会「羽曳野市藍井御旅山前方後円墳発掘調査概報」 1968

註10 関川尚功「大和における大型古墳の変遷」(『極東考古学研究所紀要 考古学論叢』第11冊 1985)

註11 註3文献に同じ

註12 小島俊次「マエ塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第24冊 1969)

註13 都出比呂志氏のいう「器台円筒」に該当するものと思われる。都出比呂志「四 元和荷古墳前方部墳丘の調査—京都府向日丘陵の前期古墳群の調査」(『史林』第54巻6号 1971)

VI 赤色顔料物質の化学分析

小石塚古墳（隣接地）第2次調査出土埴輪棺S X-01北個体に塗布されていた赤色顔料の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 井村由美

標記の赤色顔料物質について、筆者らの常法¹⁾に従い、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行なった結果、赤色顔料物質の成分を確認したので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

標記の遺物の口縁部より鋼針をもって赤色顔料のみを注意深く0.1mgを剥しとり、分析用試料とする。

実験の部

試料検液の作製

上記採取試料をガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸1滴を加え、加熱し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適当少量の蒸留水を加えて遠心分離器にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No51B(2cm×40cm)を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン(Fe^{3+})と水銀イオン(Hg^{2+})の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として、0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧し、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置(Rf値で表現する)と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出： (Hg^{2+} は紫色、 Fe^{3+} は紫褐色のスポットとして検出される。)

表1 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

	Rf値 (色調)
試料検液	0.12 (紫褐色)
Fe^{3+} 標準液	0.15 (")
Hg^{2+} 標準液	0.90 (紫色)

(2) ジチゾンによる検出：(Hg²⁺は橙色スポットとして検出され、Fe³⁺は反応陰性のため呈色せず。)

表2 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

	Rf値（色調）
試料検液	呈色スポット発現せず
Fe ³⁺ 標準液	〃
Hg ²⁺ 標準液	0.88 (橙色)

判定

以上の結果のとおり、小石塚古墳後円部北側（馬濠隣接地）出土埴輪棺に認められた赤色顔料物質からはFe³⁺のみが検出され、Hg²⁺は検出されなかった。

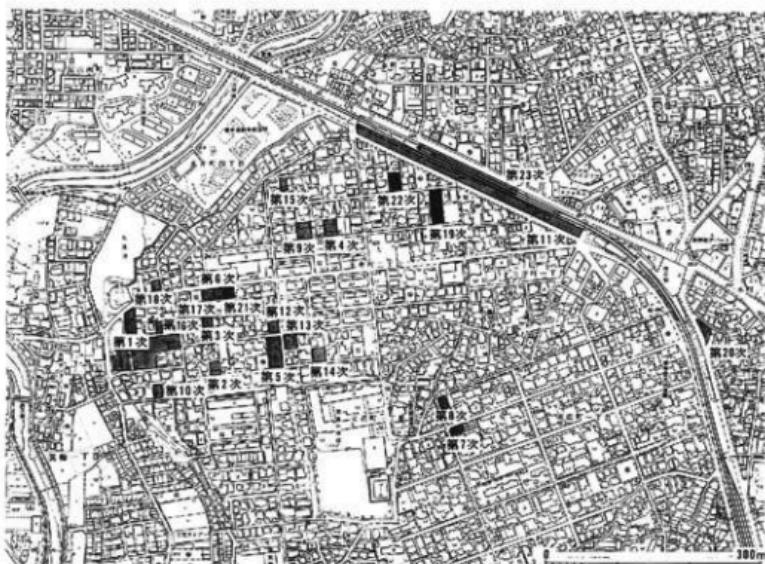
したがって、赤色顔料物質はベンガラ (Fe_2O_3) であったと判定する。

(1988年3月分析)

註1 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」（『日本考古学論集』『考古学の基本的問題』吉川弘文館 1986）

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」（『福原考古学研究所論集』第7 吉川弘文館 1984）

新免遺跡第 19・21・22 次調査



第8図 調査地点位置図



第9図 新免遺跡

I. 第19次調査地点

1. 調査の概要

調査地点は豊中市玉井町2丁目2番地の共同住宅建設予定地で、調査対象面積は450m²を測り、調査範囲を1辺5mに区画し、南北ラインをアルファベット（A～C）、東西ラインをアラビア数字（1～3）で示した。なお、各区画はその東西コーナーの座標を示した（例、A-1区）。遺物包含層はA-1区を中心とする調査区北東隅にのみ厚さ10cm程認められたが、他においては削平を受け全く認められず、近年の盛土を除去すると遺構面（地山面）がすぐ検出される状態であった。

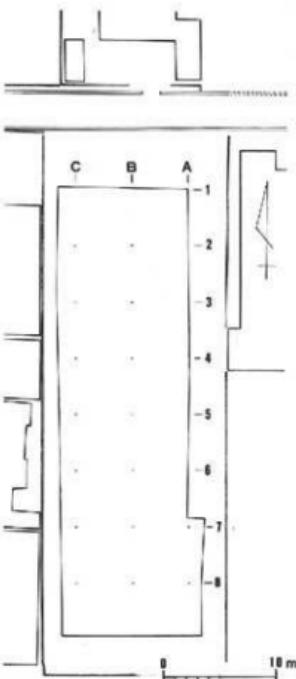
2. 遺構と遺物

SH-1（第12図 図版6）B-1・2区で検出した竪穴式住居で、その大部分をSH-2によって切られているためその規模は明確にし難いが、残存する東辺部から推して、一辺3.5m程の方形になると考えられる。各辺には幅15cm程の周溝が巡り、検出面から床面までの高さは5cmを測るが、包含層除去作業中、既にその輪郭を一部で確認しており、本来は15cm以上はあったと思われる。埋土より畿内第V様式の土器片が出土している。

SH-2（第12図 図版6）B-1・2区で検出した一辺4.3mの方形の竪穴式住居で、各辺に幅15～35cmの周溝が巡り、検出面から床面までの高さは10cmを測る。床面中央よりやや東に寄ったところで直径1.0m、深さ10cmの不整形な炉穴を確認し、堀を中心とする多量の土器が流れこんだ状態で出土した。また北辺西部に付属する形で、1.1×1.9mの方形区画が確認され、その床面が固くしまっていることなどから出入口であったと考えられる。なお、SH-2はSH-1と方向を一にして西に1.4m程ずれた形で建てられており、後者の建て替えと考えられる。ただし、両者とも明確な柱穴を確認するこ



第10図 調査前風景



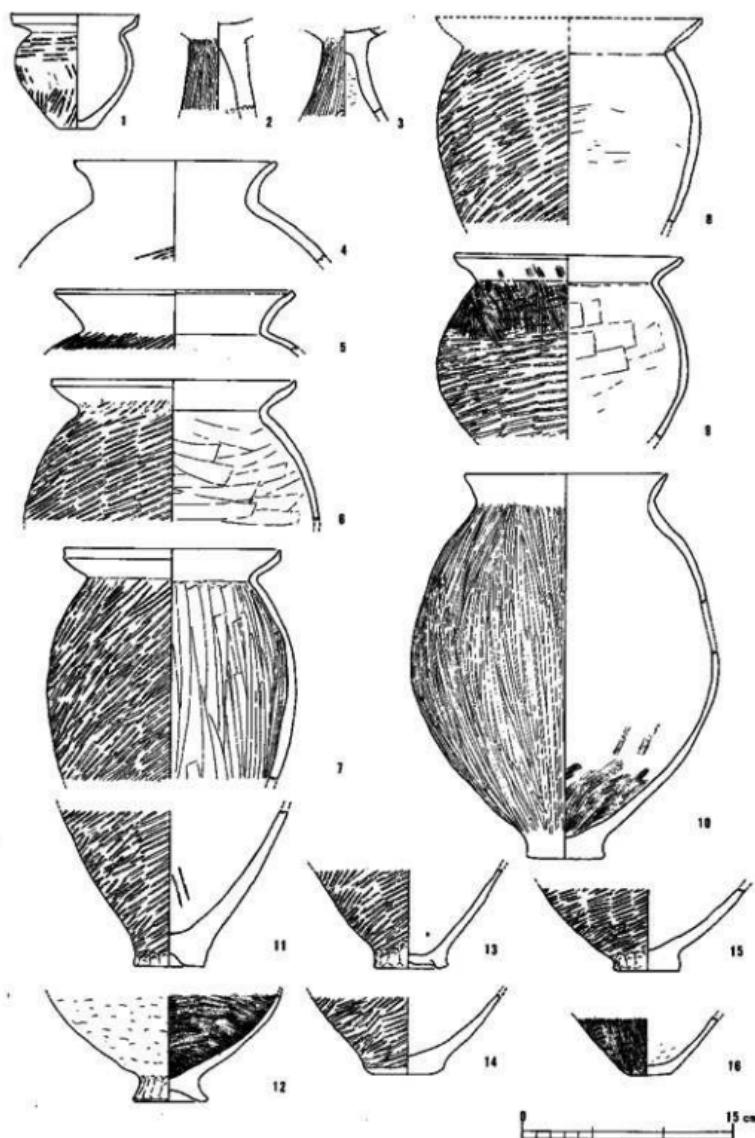
第11図 調査範囲図



第12図 SH-1, 2 平面図・断面図

とはできなかった。

SH-2からは第13図に示す土器が出土した。1・2・10・12・13は各辺の周溝付近から、他は炉付近から一括して出土したものである。1は小形の甕で、復元口径9.1cm、高さ8.2cmを測る。体部はタタキを施した後ナデ調整を行ない、口縁部は受け口状を呈する。2・3は高杯脚

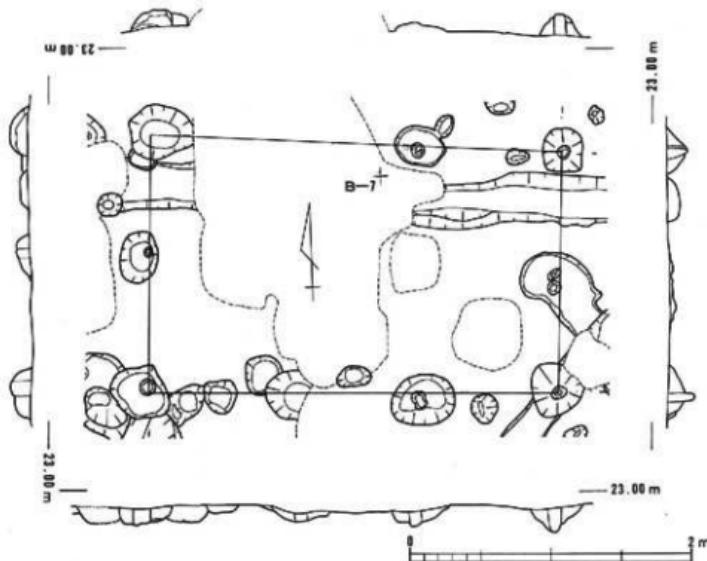


第13図 SH-2出土遺物実測図

部で、いずれも外面に縦方向のヘラ磨きを施す。4・10・12は壺と考えられ、4の外面にはタタキ、10の外面にはタタキ、10の外面には縦方向のヘラミガキが認められる。12は台が付くもので、内面に細かいハケが認められる。5～9・10・11・13～16は大形の壺で、口縁部は受け口状を呈するものが多く、直径は15.5～19.0cmを測る。底部はやや突出気味で、上げ底・平底の両者があるが、16は底面が狭く、丸底化が進んでいる。体部外面にはいずれもタタキが認められ、9・16はその後ハケ調整を施す。内面は板ナデを施すものが多い。また土器の色調はその殆どが橙色～浅黄橙色を呈し、在地の土器と考えられるが、9のみ赤褐色を呈する生駒西麓産の胎土を有している。以上の土器は壺の口縁部にいわゆる口縁叩き出し技法が認められ（5）、台付の壺（12）、丸底化の進んだ壺（16）が存在することなどから畿内第V様式後半と考えて



第14図 SH-3周満検出状況



第15図 SB-1 平面図・断面図

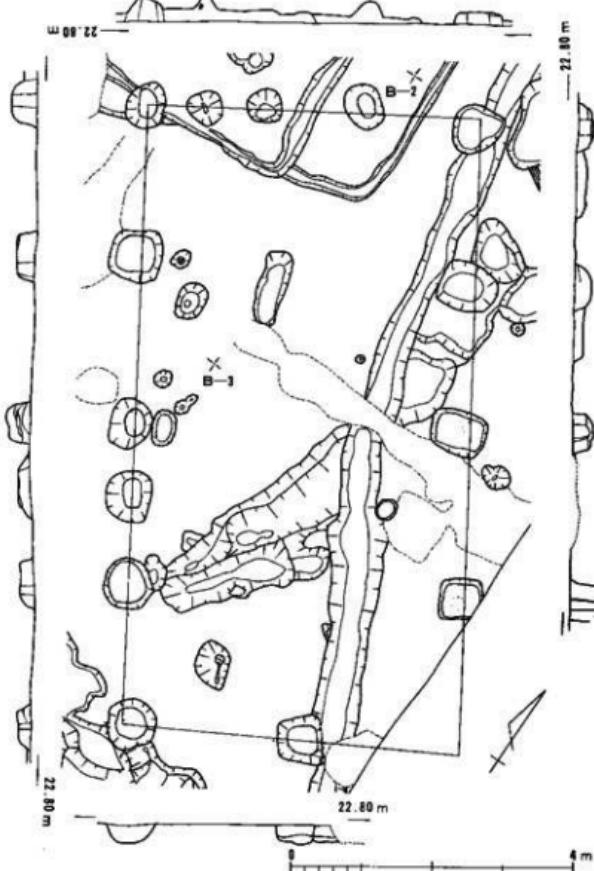
大過ないであろう。

SH-3 A-1区で検出した北東-南西に主軸をとる竪穴式住居で、南東辺と南西辺の一部に幅15cmの周溝があり、その内側に厚さ5cm程の埋土が認められたにとどまるが、一辺5.5m程の方形の竪穴式住居であると考えられる。なお、南東辺では周溝部分の埋土上面で壁材の痕跡と見られる黒色土が帶状に認められた(第14図)。住居跡の時期は埋土から須恵器片が出土していること、あるいは、主軸がSD-1やSD-2と同方向であることから概ね古墳時代中期末～後期前半におさまると考えられる。

S B - 1 (第15図)

図版6) A-6・7区か

らB-6・7区にかけて検出した南北2間(約3.5m)、東西3間(約5.9m)の掘立柱建物で、直径60~80cm、深さ30cm程の不整形な掘り方に、直径20cm程の円形の柱が据えられていた様である。なお、東辺中央のピットは他の柱穴に比べて極端に浅い。柱穴からの出土遺物は須恵器の細片に限られているため時期決定は困難を極めるが、SK-5、SD-2などの古墳時代中期末～後期初頭の遺構を切っており、また後述する落込みの上面から白鳳時代頃の須恵器が出土していることから考えて概ね7世紀頃と見てよいと考えられる。



第16図 SB-2 平面図・断面図

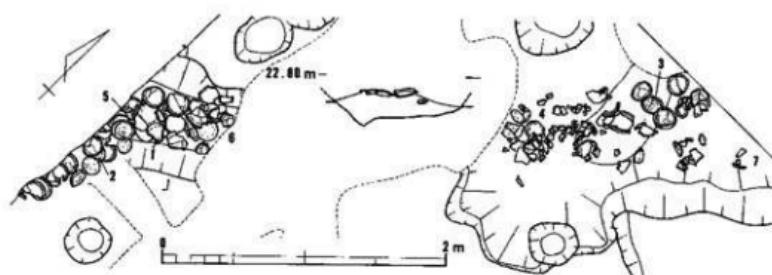
S B - 2 (第16図) A - 2・3区からB - 2・3区にかけて検出した北西-南東に主軸をとる4間(約8.9m)×2間(約4.7m)の掘立柱建物で、柱穴は1辺60~80cmのやや不整形な方形の掘り方に直径25cm程の柱が据えられていた様である。ただし、北西の梁部は3間であったかもしれない。S B - 1同様、S B - 2も古墳時代中期末のS D - 4等を切る以外には時期の決め手に欠ける。

S D - 1 (第17図 図版7) 調査区の北東隅(B・C-1区)で長さ5.6mにわたり検出した溝で、そのほぼ中央は近年の攪乱を受けて失われており、その攪乱を境にして遺構の形状もやや異なっていて、攪乱の西側では幅80cm、深さ30cmの溝状を呈するが、東側では不定形な土坑状に広がる。遺構床面よりやや浮いた状態で多量の杯を中心とする須恵器と若干の土師器が出土した。出土状態を詳細に観察するならば、攪乱の西側で故意に杯身、杯蓋を3列に並べた様に見える部分もあるが、既して雑然とした出土状況を呈しており、特にその傾向は攪乱の東側で顕著である。出土した須恵器は焼成不良のもの、歪みの認められるものの、あるいは焼成時の窓体の付着したものなどが多いが、使用に耐えない程のものではなく、完形に復元できるものが殆どである。

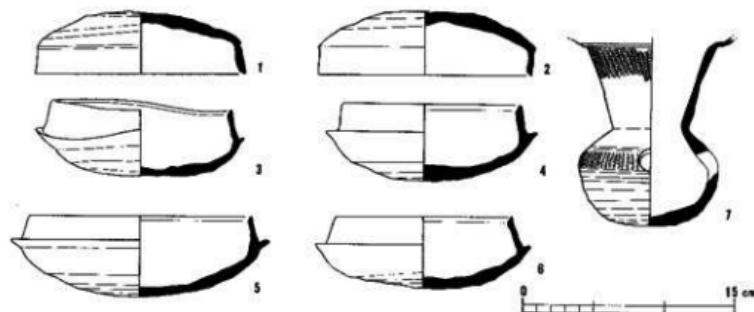
出土した須恵器を数点抽出して第18図に示した。1・2は杯蓋で各々口径14.6cm、15.0cmを測り、天井部と口縁部を区別する稜線は、1ではまだ若干鋭さが残るが2は丸くなっている。1には自然釉と他の須恵器片(?)が一部に付着する。3~6は杯身である。3・4は各々口径12.5cm、11.8cmを測り、受部端部は鋭さが残るが、立上り端部は丸くおわる。なお、3は立上りを中心に大きく歪み、4は立上り部外面の焼成が不良で灰白色を呈する。5は口径15.5cmを測り、受部端部は丸みを帯びるが立上り端部は薄く、鋭さが残る。6は口径12.4cmを測り、受部、立上りともに丸くおわる。灰白色を呈する焼成不良の土器である。7は壺で、現存高13.6cm、体部最大径10.0cmを測る。体部は中位よりやや上に最大径をとり、沈線の内側に櫛状工具で連続刺突文を施す。口頸部は直線的に開き、端部付近でさらに屈曲しておわる。頸部上半に細かい櫛描波状文を施す。これらの土器は桜井谷編年、陶邑編年のII型式1段階にあたると考えられる。

S D - 2 (第19図 図版8) A - 7杭付近から南西方向にやや蛇行しながらのび、南壁付近で一度中断した後やや方向を西寄りに変えて調査区外に続く溝で、検出長12m、幅50~70cmを測り、深さは15~30cm程である。なお、B - 8杭の東方であったかも2本の溝が浅くなりながら繋がった様な状態を呈する部分が認められ、先述した中断部分も上部の削平を考えるならば同様の状態が考えられる。この様に、S D - 2はいくつかの単位に分割できるようであり、それは最低2回以上行われた溝の延長あるいは掘削時の作業単位を示すものと考えられる。

溝のほぼ全体にわたって数箇所に集中する形で多くの須恵器が出土した(第20~22図)。第

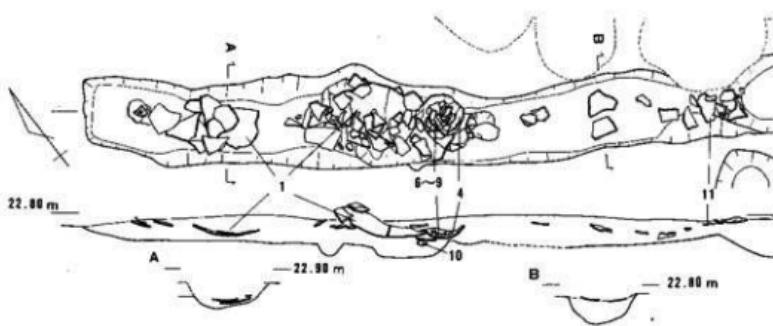


第17図 SD-1 平面図・断面図

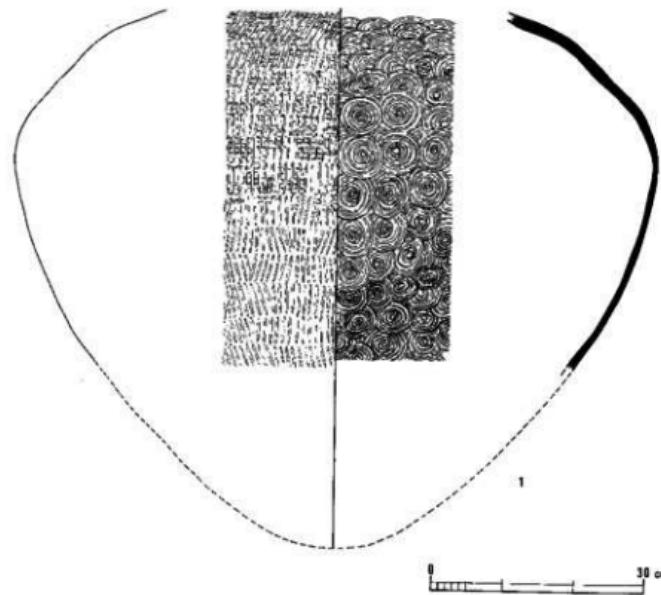


第18図 SD-1 出土遺物実測図

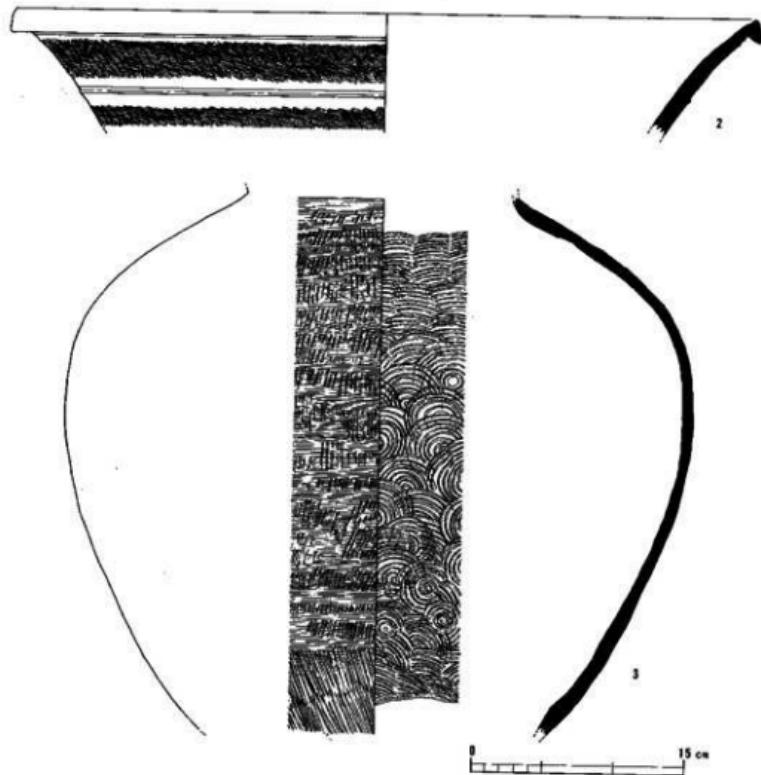
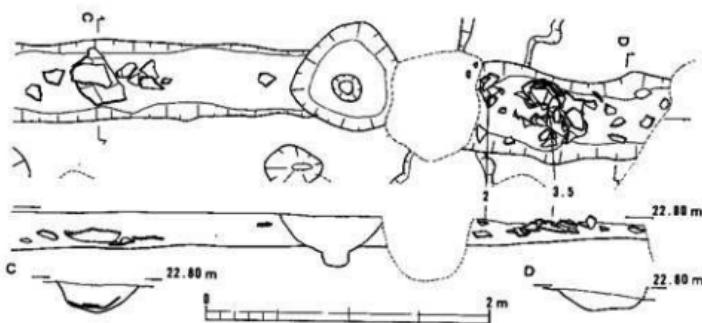
20図1は肩の張るやや偏平な体部を持つ大形壺で、底部と口頸部を欠く。復元最大径90cmと測り、外面に縦方向のタタキ、内面に同心円文が認められる。2も外反してひらく大形壺の口縁部で、外面に凹線と櫛描波状文が各々2帯ずつ交互に施され、端部は垂下し、面をなして終わる。3は大形壺の体部で、ほぼ球形を呈し、復元最大径44cmを測る。外面は縦方向のタタキの後カキメが施され、内面には同心円文が認められる。第22図4は口縁部を南西に向けて第20図1の大形壺の上に置かれた小形の壺で、最大径31.2cmを測る球形の体部に短かい口頸部の続くもので、端部は丸みを帯びた面をなして終わる。外面は縦方向のタタキの後、体部～口縁部にカキメを施し、内面には同心円文が認められる。全体に灰白色を呈する焼成不良の土器である。6～9は4の体部を打ち欠いてその内側に納められていた杯身・杯蓋である。6・7は杯蓋でともに口径15cmを測り、天井部と口縁部をわける稜線は丸く、口縁端部も内側に沈線を巡らす面をもつが、鋭さに欠ける。また、両者とも亞みが認められる。8・9は杯身で、ともに口径13.6cmを測り、立上り端部は丸く、内側に1条の沈線を巡らす面を持つ。受部は8ではまだ鋭さが残るが9は太く既に丸みを帯びる。なお、8は立上り部を中心に亞みが大きく、9は底部に別



第19図 SD-2 平面図・断面図



第20図 SD-2 出土遺物実測図 (1)



第21図 SD-2出土遺物実測図(2)

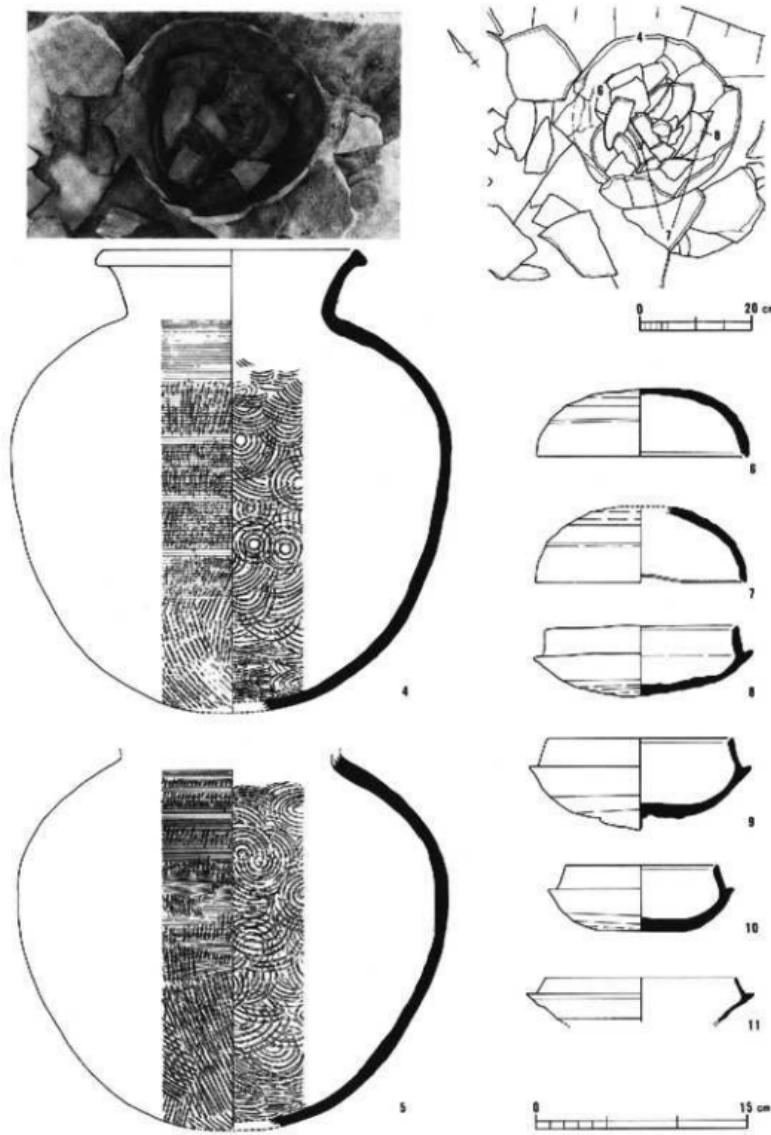
個体の須恵器（杯身）が付着し、自然釉も一部に認められる。10は第20図1の大形壺の下部から出土した杯身で、口径10.8cm、高さ4.8cmを測り、全体に器壁は厚い。立上り端部は丸く終わり、内側に面を持つ。受部も厚いが若干鋭さが残る。内部より白玉が1点出土した。5は小形の壺で体部はほぼ球形を呈し、最大径30.5cmを測る。外面は縦方向のタタキの後カキメで調整する。内面には同心円文が認められる。11は杯身で、口径13.6cmを測り、器壁は全体に薄い。受部端部は若干鋭さが残るが、立上り端部は丸く終わり、内側に面は認められない。これらの土器の年代は10が桜井谷編年のI型式3段階、6～9はII型式1段階、そして11はII型式3段階頃と考えられ、他の壺類もI型式末からII型式2段階頃までの時期が考えられる。

SD-2の性格は、故意に割ったと考えられる大形の壺を並べていることから単なる土器の廃棄遺構とは思えない。また、第20図1の北東端付近では、白玉を1点納めた杯身（第22図10）の上に大形の壺（第20図1）を置き、さらにその上に杯身・杯蓋（第22図6～9）を破片で内蔵した小形の壺（第22図4）を置くという特異な出土状態が観察された点、あるいは後述する同時期のSK-5も祭祀遺構と見られる点から何らかの祭祀に関わる遺構と見てよいであろう。祭祀の内容はよくわからないが、壺に内蔵された杯（第22図6～9）の全てに亘るあるいは別個体の付着が認められ、焼成時の不良品に何らかの意味を持たせたと考えられる事から、須恵器の生産あるいは搬出入に関する祭祀であった可能性が想定されよう。ただ、出土した須恵器のいずれもが溝が若干埋まつた段階で置かれており、掘削当初から祭祀に供されていたか否かは今回の調査では明らかにし得なかった。

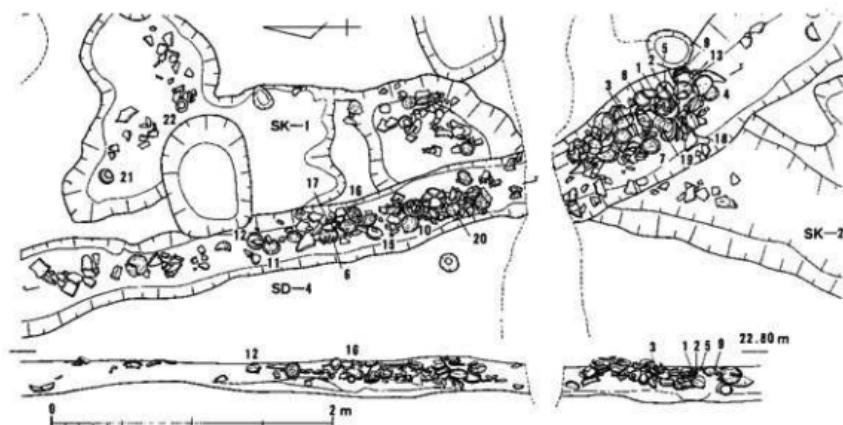
SD-3 A-8杭付近から南西方向にSD-2と平行して走る形で検出した溝で、長さ4.8m、幅約50cmを測る。深さは15cm前後であるが、途中10cm程の浅い部分も認められる。埋土から若干の須恵器が出土したにとどまるが、SD-2同様古墳時代中期末～後期前半の時期が考えられる。

SD-4（第23図 図版9・10） 調査区の北東部（A-1～3区）をゆるやかなカーブを描くように走る溝で、検出長約15m、幅40～60cm、深さ20～30cmを測る。埋土は茶褐色粘質土の上層と地山の流出土と見られる黄褐色粘質土の下層に大別され、上層から多量の須恵器が出土し、特に検出部分の中央あたりに完形品が集中して認められた。その出土状態をさらに詳しく観察するならば、器種は杯身・杯蓋が圧倒的多数を占め、高杯・甕がそれに続き、甕・器台も少量認められた。大形器種を除くと完形あるいは完形に復元可能なものが多数を占め、それらは溝の東方より故意に重ねて置かれた様である（図版9）。また高杯の集中する部分も3ヶ所認められ、埋土中あるいは杯身内部より白玉が約30個出土した。

出土した土器は膨大な量にのぼるが、そのうち20点を第24図に示した。1～6は杯蓋で、口径11.4～12.2cm、高さ4.4～5.0cmを測るが、6のみ復元口径13cmに及ぶ。天井部と口縁



第22図 SD-2出土遺物実測図(3)

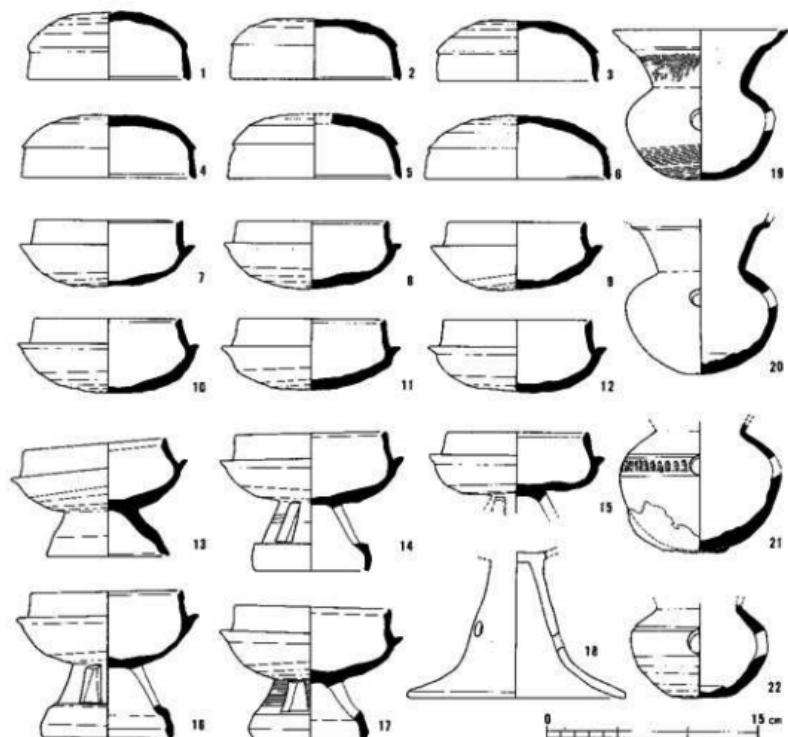


第23図 SD-4 遺物出土状態

部は比較的鋭い稜線で区画され、口縁端部内側に面をもつが、沈線を施すものと施さないものがある。1・3には自然釉が付着し、6はにぶい黄橙色を呈する焼成不良の土器である。7～12は杯身で、口径9.7～10.4cm、高さ4.7～5.2cmを測る。立上りはやや内傾して上方にのび、端部内側には1条の沈線を施す面を有する。受部は太く、端部は鋭さを欠く。部分的にやや歪むものが多く、7・11には自然釉が認められ、9の立上り部には別個体の破片が付着している。13～17是有蓋高杯で、14～17は口径10.7～11.0cm、高さ9.5～10.6cmを測り、脚部に3方透しを施し、脚端部はやや内傾して丸く終わる。13は他に比べて小ぶりで脚部も短かく、透しも認められない。19・20は甌である。体部最大径は中央よりやや上に位置し、各々10.4cm、10.7cmを測る。頸部はほぼ直線的にひらき、一度稜を施してから口縁部に至る。19の頸部には細かい波状文が施され、体部下半にカキメが認められる。これらの須恵器は桜井谷編年のI型式3段階に位置付けることができよう。18は高杯の脚部で、SD-4から出土した数少ない土師器のひとつである。浅黄橙色を呈し、高さ7.7cm、基部径15.4cmを測る。内外面とも磨滅が激しく、調整はよくわからない。脚部中位に3ヶ所の円孔が認められる。

SD-4は先述した様に杯を中心とする須恵器を白玉を混えて故意に重ねて置いた状態を呈しており、祭祀遺構の可能性が高いと思われる。

SK-1(第23図 図版9) A-2区で、SD-4、SB-2に切られる形で検出した不整形の土坑で、埋土より須恵器の杯、器台、甌等が出土した。第24図21・22は甌で、ともに口頸部を欠く。体部最大径は体部中位や上方に位置し、各々11.4cm、9.8cmを測る。21は体部上半に2条の沈線を巡らし、その内側に櫛描列点文を施す。底面～体部下半に窓体が付



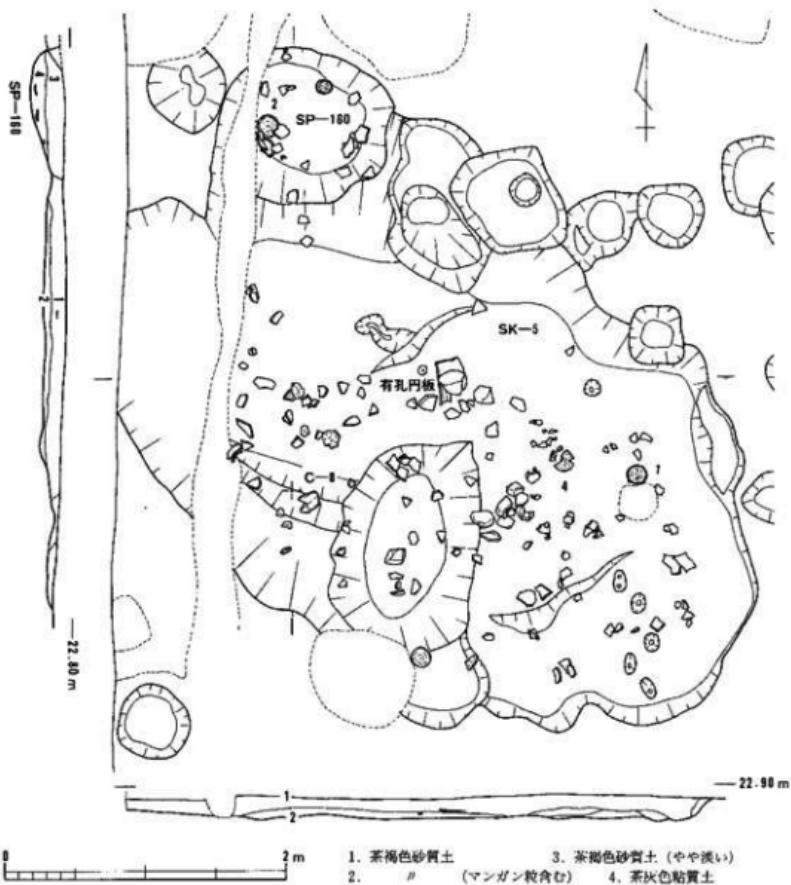
第24図 SD-4, SK-1・2 出土遺物実測図

着し、体部上半外面を中心自然釉が認められる。両者はSD-4出土遺物とはほぼ同時期と考えられる。

SK-2 (図版9) A-3区で検出した北東から南西に長くのびる土坑で、検出長3.6m、最大幅1.4mを測る。深さは35cm程であるが、底部はやや凹凸が認められる。埋土より大形の甕等の須恵器片が若干出土した。

SK-3 B-3区からC-3区にかけて検出した深さ20cm程の浅い落込み状の土坑である。底部からやや浮いた状態で杯身(第26図8・9)が口縁を下にして並んで出土した。ともに灰白色の焼成不良の土器で、桜井谷編年II型式5段階のものと考えられる。

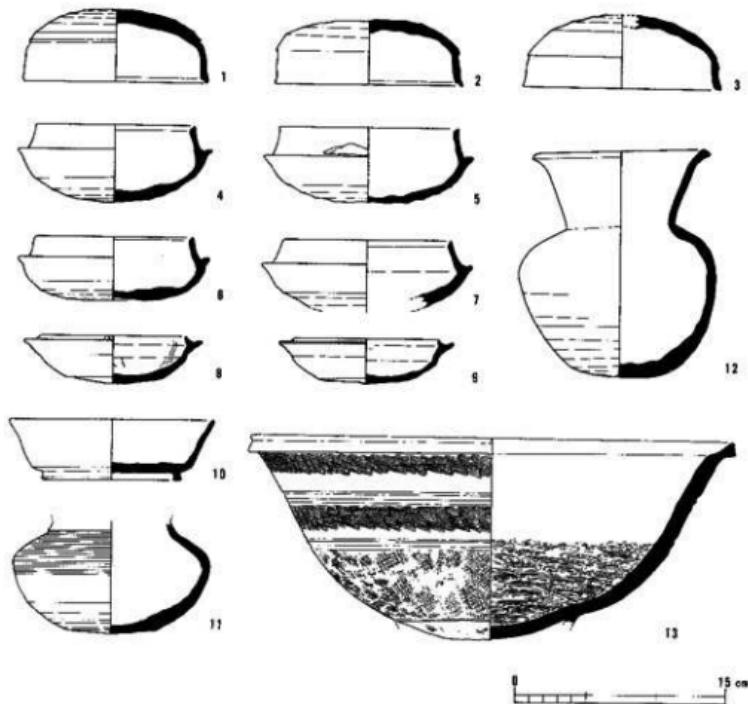
SK-4 落込みに切られる形でB-4枕付近で検出した深さ30cmを測る不定形な土坑で、その西半は擾乱によって破壊されている。



第25図 SK-5, SP-160 平面図・断面図

埋土中より須恵器が出土している（第26図3・5・12・13）。3・5は杯蓋・杯身で、ともに口縁端部に1条の沈線を有する面をなす。12は高さ16.2cmを測る壺で、肩の張る体部に直線的にひらく口縁部が続く。底部は平底気味である。13は器台の体部で口径34.2～34.8cmを測る。外面に格子状のタタキを施した後に沈線と櫛描波状文を交互に2帯ずつ施し、内面には同心円文が認められる。これらの土器は桜井谷編年II型式1段階頃と考えられる。

SK-5（第25図 図版10） C-7・8区で検出した北西-南東に主軸をとる楕円形の土坑で、長さ5.4m、幅3.2m、深さ15cmを測る。埋土中より須恵器片と白玉15点、ガラス玉1点、



第26図 SK-3~5, SP-160 落込み出土遺物実測図

有孔円板 1 点が出土した。須恵器（第26図1・4）は桜井谷編年Ⅰ型式3段階（陶邑編年Ⅰ型式5段階）におさまると見られ、有孔円板（第27図1）は滑石製で、直径2.8cm、厚さ3.5mmを測る。

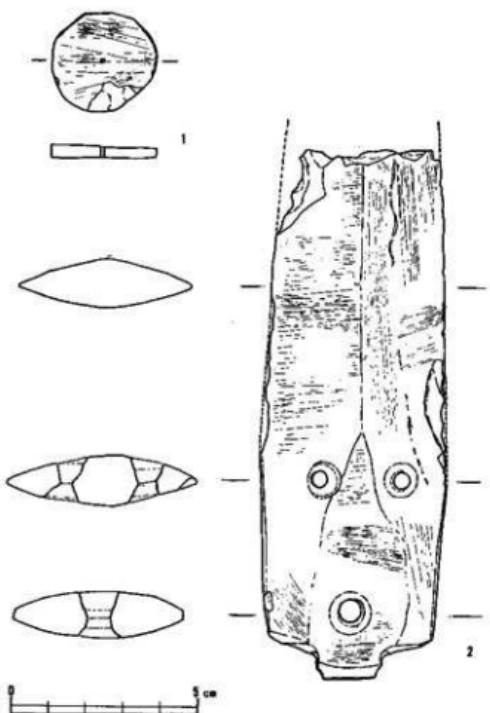
SK-5は須恵器片が散在する状態で出土しており、また玉類や有孔円板の山土を考えあわせるならば祭祀遺構と考えてよいと思われる。

SP-160（第25図） SK-5のすぐ北方でSK-5を切る形で検出した円形の土坑で、直徑1.2m、深さ25cm程である。埋土より若干の須恵器が出土した。第26図2は杯蓋で桜井谷編年Ⅱ型式1段階墳のものであろう。

落込み 調査区のはば中央で検出した落込みで、東西長は調査区外に広がるため不明であるが、南北長約9mを測り、深さは35cm程である。埋土中より多量の須恵器・土師器が出土し（第26図6・7・11）、それらは概ね桜井谷編年Ⅱ型式1段階墳のものと考えられる。なお、10は落込み上面に堆積した砂質土から出土した杯身で、底部に断面台形のしっかりした高台が付く。灰

白色を呈する焼成不良の土器である。

磨製石剣 第27図2はA-1区の包含層中より出土した粘板岩質の磨製石剣である。現存長



14.6cm、幅5.1cmを測り、身部上半は欠損する。身部下半には両面から上方で2孔、下方で1孔の穿孔が認められ、その上方の穿孔付近まで鏽がのびている。身部下半の刃部に面取りが認められ、各面には磨いた際の擦痕が残る。

3.まとめ

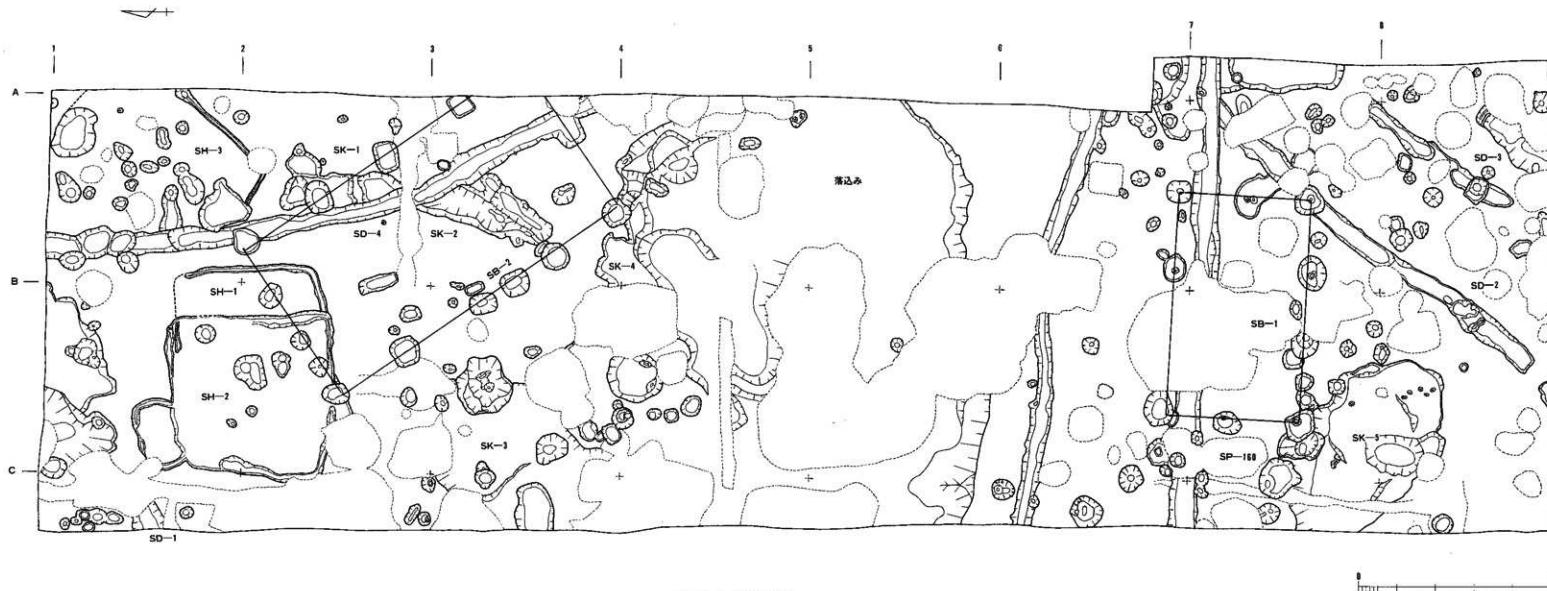
今回の調査では弥生時代後期、古墳時代の竪穴式住居、古墳時代の掘立柱建物・溝・土坑を検出し、それらに伴う多量の土器が出土した。5世紀末～6世紀前半の遺構は落ち込みとSD-4を除くとほぼ北東～南西もしくはそれと直交する方向をとっており、調査区南部に位置するSD-2、SK-5は当時の祭祀遺構と考えられる。

SD-4も祭祀遺構と考えてさ

しつかえないが、杯を中心とする多量の須恵器の完形品を幾重にも重ねている点は、大形盤を敷き並べたSD-2や破片の散乱するSK-5とは趣きを異にしており、祭祀の内容に差のあったことを示唆している。SD-1は焼成不良あるいは歪みの若干認められる須恵器の杯等が並べて置かれていた6世紀前半の溝である。同様の遺構は本町遺跡においても確認されており、桜井谷窯跡群において焼成された土器の選別に関わる遺構であろう。なお、これらの遺構に続くSB-1などの遺構はほぼ東西に主軸をとる。

註1 木下亘「滋賀桜井谷古窯跡群における須恵器編年」(『桜井谷窯跡群2-17窯跡』1982・12)

註2 『陶邑』I (大阪府教育委員会 1976)



第28図 造構全体図

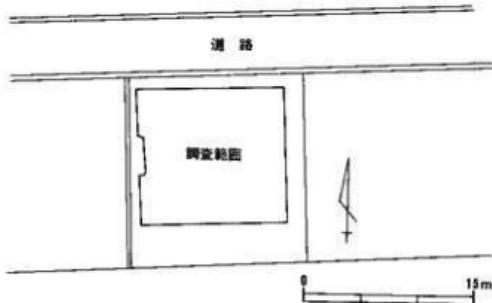
II 第21次調査地点

1. 調査の概要

調査地点は豊中市玉井町3丁目3-27に所在する。調査は共同住宅の建設に伴って行われ、対象面積は150m²であった。

基本層序は5層に大別される。第1層は盛土である。第2層は緑灰色極細砂層、第3層は明褐色極細砂層である。第4層は暗褐色粘質土層の遺物包含層であるが、後世の削平を受けており、部分的に薄く残るのみであった。第5層は暗黄橙色の粘質土と疊混じりの層からなる地山である。遺構はすべて地山上面において検出した。

検出した遺構は、弥生時代中・後期、古墳時代の竪穴式住居跡、土坑数基、ピット群である。以下、主な遺構、遺物について概述する。



第28図 調査範囲図

2. 遺構と遺物

S B - 1 調査区東部で検出した。後世の削平を受け竪穴住居の北側と東南隅の周溝が残存するのみである。周溝は幅15cmをはかる。東西の規模は不明であるが、南北約5mの方形の竪穴式住居と思われる。周溝内より遺物の出土はみられず、時期は不明である。

S K - 1 (第30図) S B - 1の南側周溝の上から掘り込まれた、長さ80cm、幅70cm、深さ5cmをはかる浅い土坑である。埋土は単層で暗灰色粘質土である。遺物は須恵器の杯蓋が出土した(第32図1)。口径13.2cm、器高5.7cmをはかる。口縁部と天井部の境に鋭い稜を有し、天井部の外面2/3に回転ヘラケズリを施し、その他は内面を含めて回転ナデを施している。口縁端部は明瞭な内傾する凹面を有している。天井部には高さ5mm程度のつまみを有する。陶邑編年でI型式4段階に併行するものと考えられる。

SK-2 SB-1の南側周溝の上から掘り込まれた、長さ1.4m、幅80cm、深さ10cmの土坑である。埋土は単層で暗褐色粘質土である。遺物は須恵器・弥生土器の細片が出土したが、図化しえる遺物はない。

SK-3 (第31図) 調査区の北西部で検出した。長さ1m、幅70cm、深さ14cmをはかる土坑である。埋土は単層で小礫混じりの暗灰色粘質土に暗褐色粘質土がブロック状に混入している。遺物は弥生土器が底面から浮いた状態で出土した。壺の口縁は外方へ伸び、端部は肥厚し面をなす。頸部に4条以上の櫛描直線文を施している。調整方法は風化が著しく不明である(第32図2)。

SK-4 調査区の北西隅で検出した。幅1m、深さ20cmの土坑である。さらに北西へつづき、その規模は不明である。遺物は弥生土器の細片が出土したが、図化しうる遺物はない。

ピット群 調査区全域に亘り、200以上のピットを検出した。ピットの深度、埋土の質、出土遺物により分類検討を行なったが、明確な建物跡を識別するには至らなかった。時期は弥生時代中期から古墳時代後期に所属する。

ピット群から出土した遺物は弥生土器・須恵器・土師器・石包丁片・石鏃である(第32図3~16、21~23)。土器はいずれも表面の風化が著しく調整の痕跡をとどめる遺物は少ない。

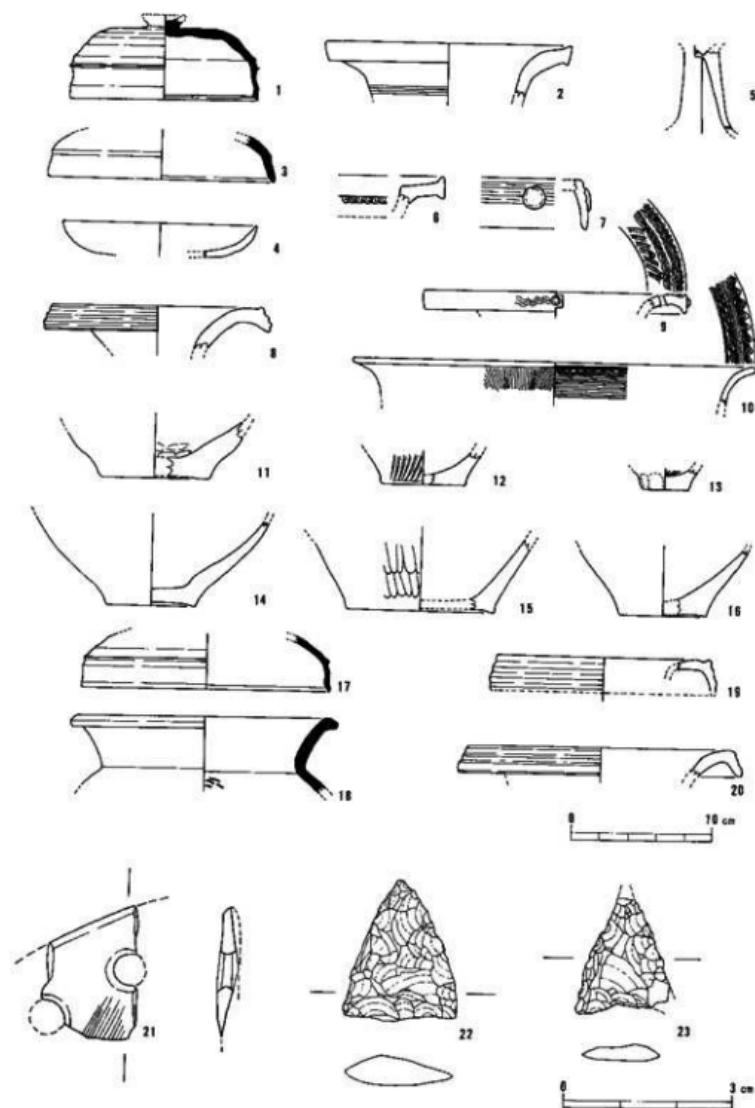
須恵器の杯蓋(3)は鋭い棱を有し、口縁端部は段を有す。土師皿(4)はSP-229から出土した。復元径13.6cmをはかり、口縁は内弯しつつ上方へ伸び、端部をまるくおさめている。高杯脚部(5)は残存高4.5cmをはかる。調整は不明である。弥生土器口縁部(6~10)は下方に引き伸ばされた口縁端面に凹線文を施したもの、円形浮文を施したもの、口縁内面に波状文、刺突文、直線文を施したものがある。弥生時代中期に所属するであろう。弥生土器底部(11~16)は外面調整にヘラミガキを施したもの、



第30図 SK-1 平面図・断面図



第31図 SK-3 平面図・断面図



第32図 出土遺物実測図

タタキを施したものがある。

石包丁片(21)はS P - 193から出土した。紐孔部分が残存し、裏面は大きく剥離している。片刃と思われ、材質は粘板岩である。石鎌は、(22)がS K - 12から出土した。平基無茎式であり、重量 1.9 g をはかる。(23)はS P - 103 から出土した。凹基無茎式であり、重量 1.0 g をはかる。基辺の凹みは浅く、両側縁に細かい鋸歯状剥離を施している。材質は両石鎌とともにサヌカイトである。

調査区精査時に須恵器、弥生土器が採集された(第32図17~20)。杯蓋(17)は鈍い稜を有し、口縁端部に段を有する。甕口縁(18)は体部からくの字に屈曲させた口縁の端部を肥厚させている。内面には同心円文が施されている。弥生土器壺口縁(19・20)は、下方に引き伸ばされた口縁端部に、いずれも凹線が施されている。



第33図 造構全体図

III 第22次調査地点

1. 調査の概要

調査地点は、豊中市玉井町2丁目14番地に所在する。調査は建築予定地内を対象とし、その面積は228m²である。

基本的な層序は4層からなり、第1層は厚さ10~20cmの盛土、第2層は部分的に残存するだけであるが旧耕作土、第3層は厚さ約10~20cmの淡茶褐色砂質土で古墳時代の包含層である。第4層は黄褐色粘土で地山である。

検出した遺構は、軽穴式住居、土坑、溝、多数の柱穴等で、その所属する時期は弥生時代中期、後期、古墳時代後期である。以下、主要な遺構、遺物について概述する。

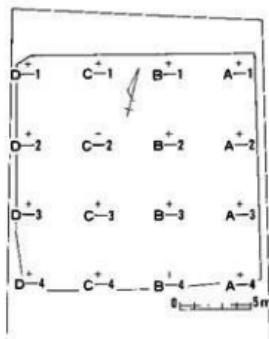
2. 遺構と遺物

SH-1 (第35図) 調査区の北東隅において北西部のみを検出した住居址で、大半は東側の未調査地に入る。残存状態が悪かったため周溝は壁の一部分でしか検出することはできなかったが本来は全局していたものとみられる。その幅は約10cm、深さは5cmである。平面形がやや歪んでいるが、方形を呈していたものとみられる。

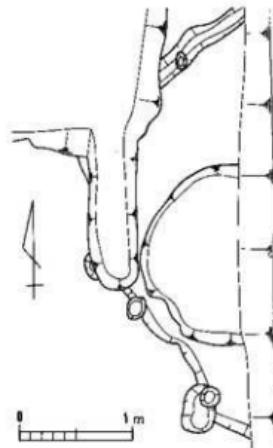
SH-2 (第36図、第39図1) 調査区の南東隅において北西部のみを検出した方形の住居址で、大半は南側の未調査地に入る。

出土遺物は埋土より須恵器が少数出土している。杯蓋を1点図示したが、天井部と口縁部を分ける稜は僅かに残存する。天井部は緩やかなカーブを描いて口縁端部に至る。桜井谷窯跡群編年のII型式2段階に比定される¹⁾ものである。

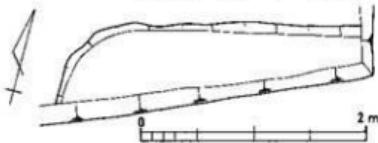
SH-3 (第37図) 調査区の南東部分において検出した方形の住居址で、約半分は南側の未調査地に入る。東辺はSH-10の埋土



第34図 調査範囲図



第35図 SH-1 平面図



第36図 SH-2 平面図

の関係から明確にできなかったが、北東部で幾分曲がることから、東西辺約8mの大形住居になるものとみられる。周溝は北壁中央部と西壁において確認できた。その幅15cm、深さ10cmである。主柱穴は現段階では整理が完了していないので明確にしがたい。

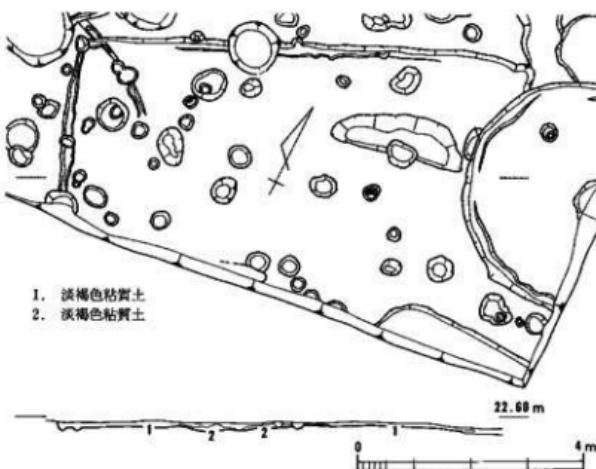
時期は埋土中より布留式最古型の甕の破片が含まれていることからその段階には廃絶していることがうかがわれる。したがって弥生時代後期末か、古墳時代初頭のものであろう。

SH-4（第38図、第39図2・3） 調査区のほぼ中央で検出した一辺約4mの方形の住居址である。周溝は幅15cm、深さ5cmで東半分のみ検出したが南側にも当然あったものと推定される。なおこの住居址は包含層削除途中において検出されたことにより、今回検出のものの中で最も新しい住居址である。

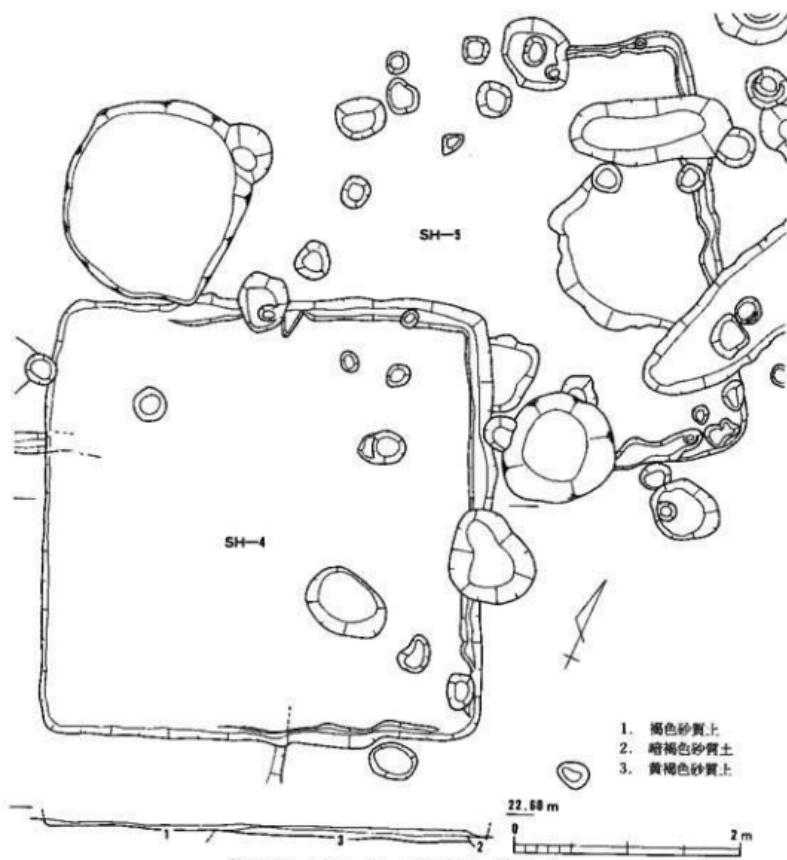
出土遺物は須恵器と土師器が若干出土している。図示したうち須恵器は杯蓋で天井部と口縁部を分ける稜は消失し、天井部から口縁端部に緩やかに移行する。II型式4段階のものであろう。土師器は小形の甕で口縁部は欠損する。底部は丸底で、外面には縱方向のハケ調整であり、内面は指頭痕が残る。

SH-5（第38図、第39図4～8） 調査区の中央北側で検出した方形の住居址である。残存状態が悪く、西側部分は検出することができなかったが、SH-4と同様、一辺約3.8mの正方形の住居址であろう。周溝は幅10cm、深さ5cmである。

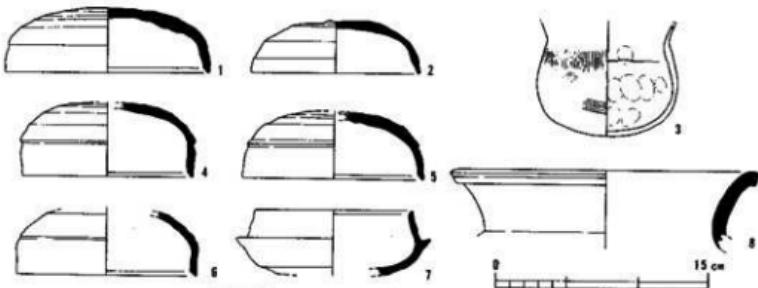
出土遺物は杯蓋、甕等が出土している。杯蓋は天井部と口縁部を分ける稜は鈍いもの存在し、口縁端部は凹面をなす段を有する。口径は12～13cm程で天井部は丸みを有し、高いものである。杯身は口縁部の立ちあがりが幾分内傾し、端部は内傾するものの段を有さない。口径は11cm強である。これらの蓋杯はI型式3段階に比定されよう。



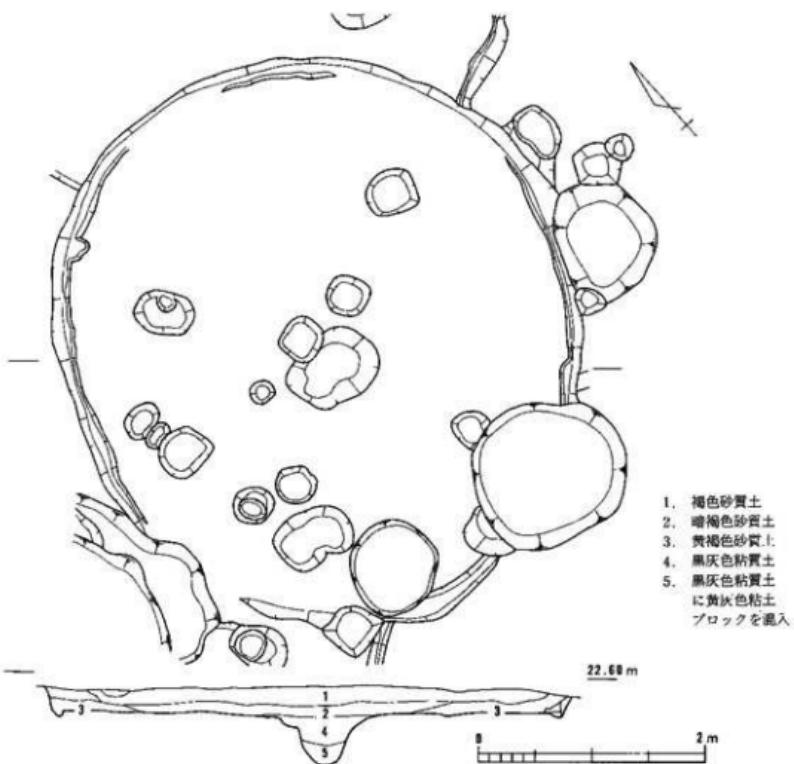
第37図 SH-3 平面図・断面図



第38図 SH-4・5平面図・断面図



第39図 SH-2・4・5出土遺物実測図

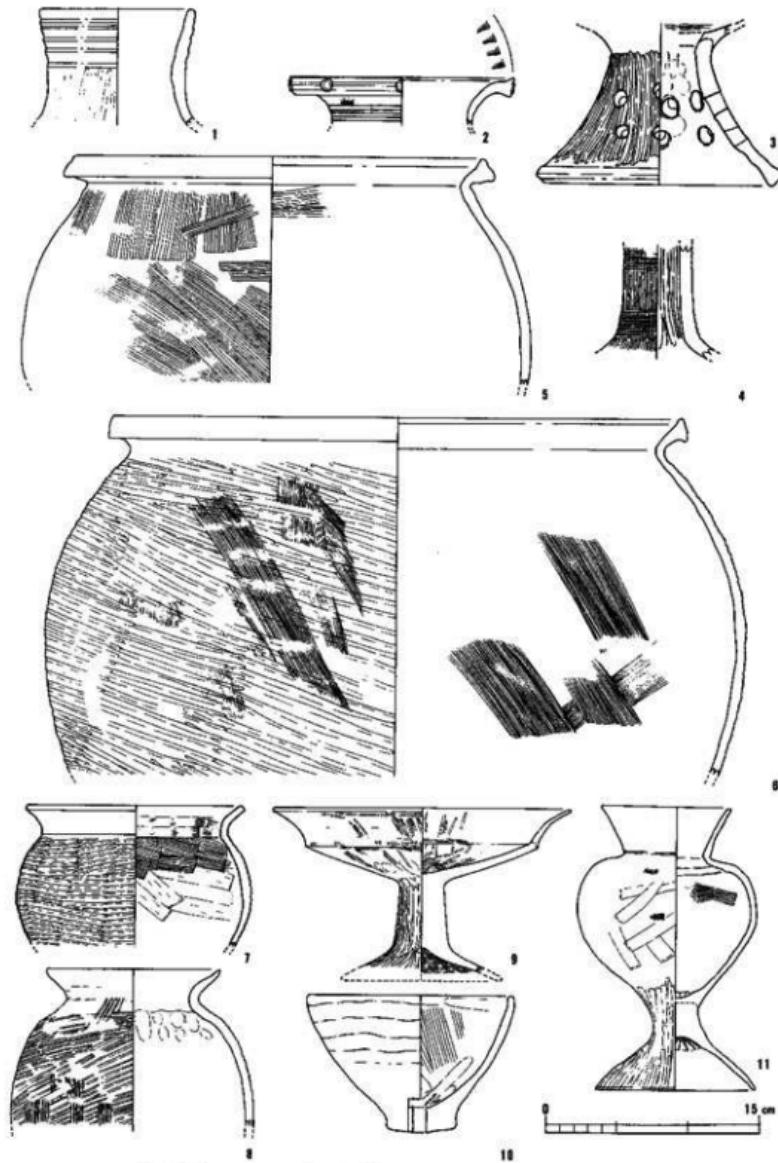


第40図 SH-6 平面図・断面図

SH-6（第40図 第41図） 調査区の南西部分において検出した円形の住居址である。南北径約6.4m、東西径約5.8mを測り、南北にやや長い円である。中央に直径0.8m、深さ0.45mの炉と推定される穴があり、埋土は黒灰色を基色とする土で粘質土である。周溝は幅10cm、深さ5～8cmである。

出土遺物は上層と下層に分離される。下層のもの（第41図1～6）は、床面直上のものが多く、住居廃絶時のものと推定され、上層のもの（第41図7～11）は廃絶後に投棄されたものと考えられる。

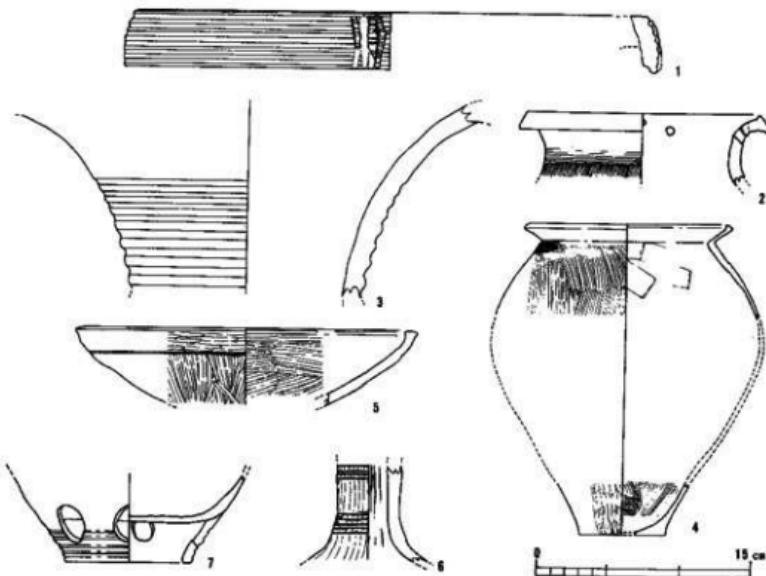
〈下層土器群〉 1は短頸壺の口頭部で、外面に5条の凹線文をめぐらす。凹線文は深く強いものではなく、下端のものが最も深く、上部のものほど浅く、板状ないしハケ状のもので施されている。2は広口壺の口頭部である。頸部には横描直線文を配し、口縁部端面には2条の凹



第41図 SH-6 出土遺物実測図 (1~6: 下層、7~11 上層)

縞文を施した後、5～6cmの間隔で円形浮文を貼り、内面には扇形文をめぐらす。4は高杯の脚柱部である。上方と下方に籠描沈線による文様帶をもつ。上方は4条、下方は6条である。3は脚台である。上下2段に直径1cm内外の円孔を穿つ。上部内面に剥離痕が認められることにもよるが、台付鉢Bになるものと推定される。5と6は大型の甕である。口頸部の形態はほぼ同じであるが、調整にちがいがみられる。5はハケ調整であるが、6は右下がりの粗い叩き整形痕を顕著に残し、部分的にハケを用いる。5も胴が張っているが6はそれよりも強く張る。以上の土器群はIV様式の中でも新しい様相のものであろう。

〈上層土器群〉7・8は甕である。7は胴が張った形態を有し、叩きは右上がりが基本であるが、下方と上方で叩き目方向を若干変え、分割成形されていたことをうかがわせる。口縁部は強いナデにより整形され端部は丸く終わる。8はやや胴長の感じを受ける形態を有し、叩きは右上がりである。頸部はかなりすぼまり、内面に指頭痕を残す。口縁部はヨコナデにより、端部は弱い受け口状を呈する。9は高杯で、脚台据部を欠損する。脚柱部は中実である。杯部は曲折して外反する口縁部を有する。曲折は強く立ちあがるものではなく、斜め上方に外反しながらのびるものである。10は直口する鉢である。底部に1孔を穿つ。外面に接合痕を顕著に残す。



第42図 SH-7 出土遺物実測図

大半はナデ仕上げである。11は台付の短頸直口壺である。精製された胎土を用い、外面は赤いスリップを施されている。脚台上部は中実で、裾部は八の字状にひらくが少し内湾する。これらの土器群は甕、高杯の特徴からV様式後半に比定されよう。

SH-7 (第42図 第43図) 調査区の西壁中央から南側にかけて検出した円形の住居址である。西側1/3が未調査地に入る。直径約5.3mのほぼ正円形で、中央に径0.7m、深さ0.65mの炉と推定される穴がある。周囲には地山と同一の黄褐色粘土を約5~10cm盛り上げている。内部上層は炭と焼土層がみられる。周溝は幅10cm、深さ5cmである。

出土遺物はあまり多くない。第42図1は下方に拡張する壺の口縁部である。端面に6条の凹線文をめぐらし、その上に4帯1組の棒状浮文を縦に貼りつける。棒状浮文には8条の刻み目

が施される。棒状

浮文の配され方は

破片のため不明で

ある。2は口頸部

が大きくひらき、

口縁部上端を上方

にやや拡張する形

態の壺である。頸

部に1条の櫛描直

線文をめぐらす

が、上部はヨコナ

デにより消されて

いる。頸部から口

縁部に大きく外反

する部分に内側か

ら外側に穿った2

孔が認められる。

3は大形の器台の

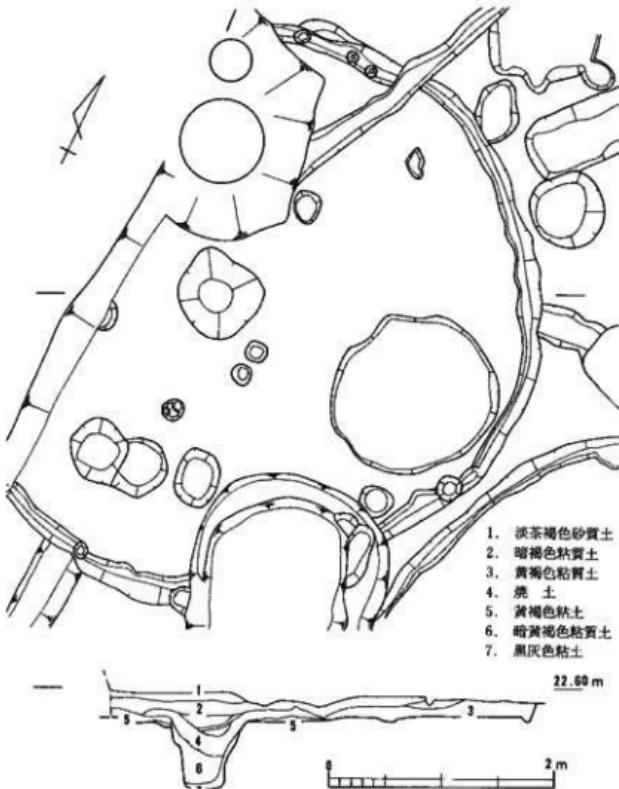
上部であろう。現

存で8条の凹線文

が確認される。4

は甕の上部と底部

である。底部外面



第43図 SH-7 平面図・断面図

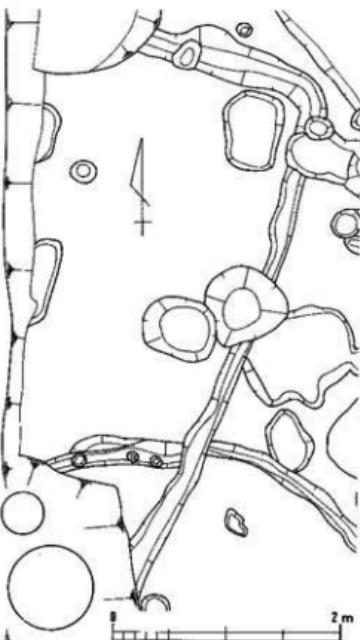
は縦方向のケズリ、内面はハケ調整である。5は高杯の杯部であろう。杯上部外面に1条の篦捺線文を施す。6は高杯の脚柱部である。上下に2帯の篦捺直線文が認められる。これらの土器はIV様式のものである。

SH-8 (第44図、第45図、第46図) 調査区の西壁中央から北側にかけて検出した方形の住居址である。大半は西側の未調査地に入るため規模は明確にしがたいが、ほぼ一辺5.5m内外なるものと推定される。床面より遊離した状態で多量の土器が出土している。

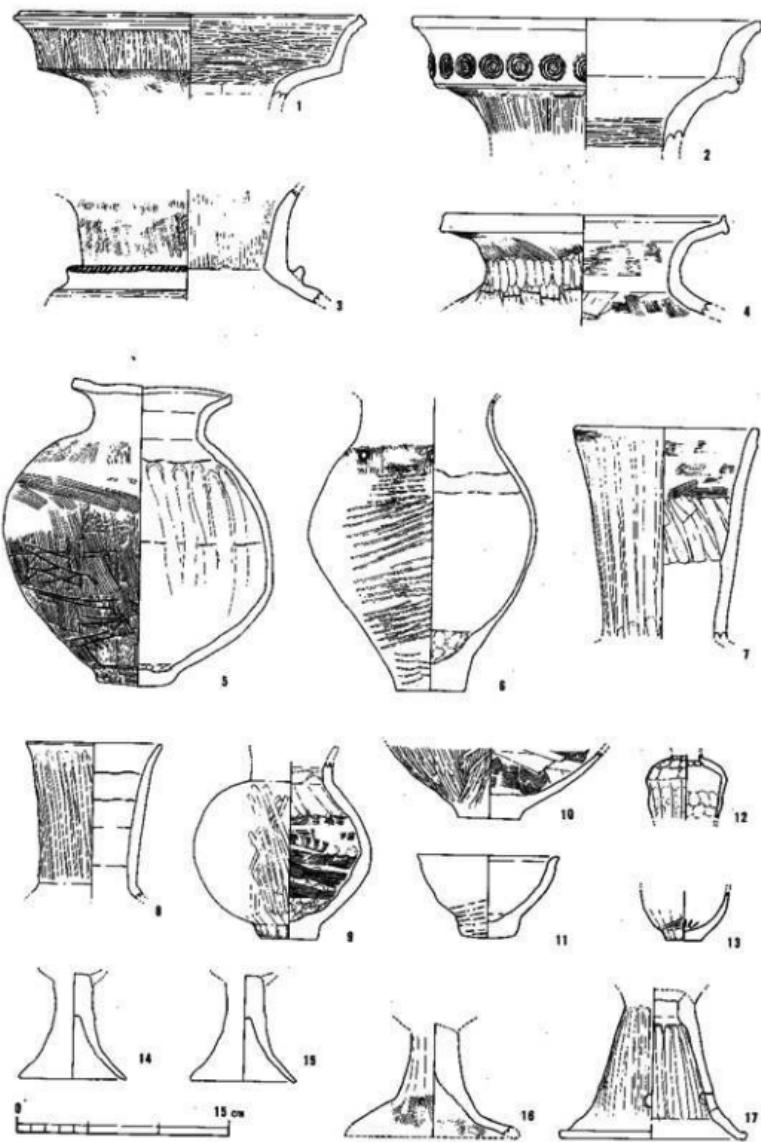
出土遺物は出土状態から住居廃絶後に一括投棄された可能性が高いものであり、各器種が含まれている。第45図1~3は二重口縁壺の口頭部である。口縁部の立ちあがりは強いものである。2は口縁部外面下端に径1.7~2cmの渦巻文を施した円形浮文を5mmの間隔で貼りついている。3は胸部と頸部との間に突帶を用い、その上端には刻み目を施す。1と3は河内の胎土である。4と5は

大きくひらく口頭部を有した壺で、4は口縁端部を上下に少し拡張する。6は短頸壺の体部である。外面は右上がりの叩きを施したのち、上部はハケにより消す。肩部には竹管文が2ヶ所みられる。7と8は長頸壺の口頭部である。7は口縁端部を強くヨコナデされている。8は小形のもので、河内の胎土である。9は口縁部を欠損するが、小形の短頸壺とみられる。11は外面に叩き目を有した鉢である。12・13はミニチュアの粗製土器である。14~17は高杯の脚部である。14~16は脚柱部が中実に近いもので、17は中空のものである。5方向に円孔を穿つ。第46図の1~6は壺である。外面はすべて右上がりの叩きが施されている。口縁端部は丸く終わるもの(1・2)と面をもって終わるものがある。5・6の内面は縦方向の粗いケズリである。7~9は有孔鉢になるものとみられる。これらの土器群はV様式中頃を中心とした時期のものであろう。

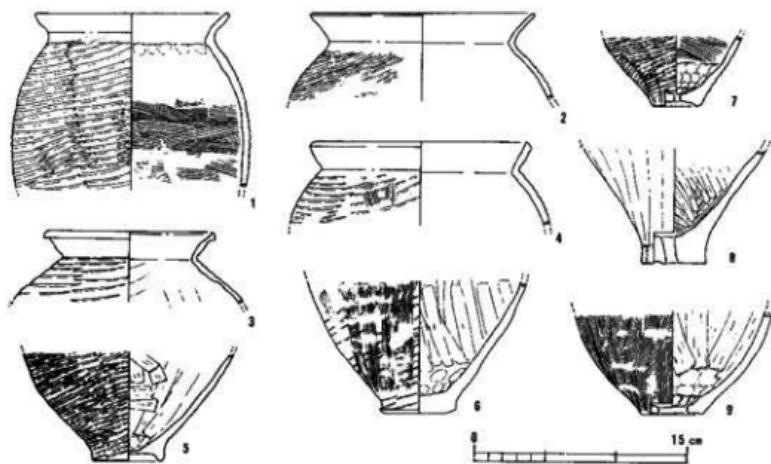
SH-9 (第47図) 調査区の南壁中央から西側にかけて検出した円形の住居址である。約半分が南側の未調査地に入る。SH-3やSH-6に削除され残存状態は良好でなかった。直径は推定で約7m強で幅約10cmの周溝をめぐらしている。



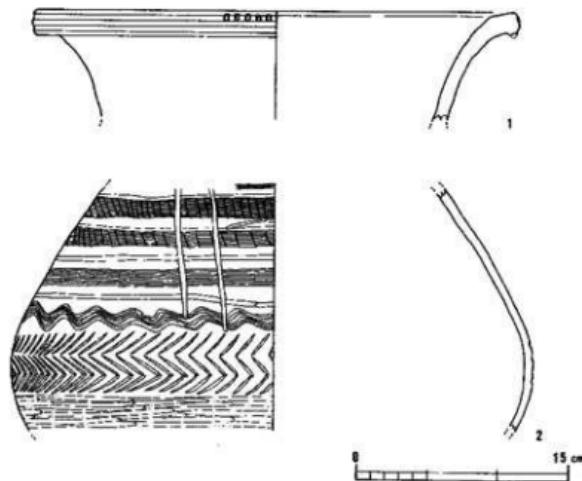
第44図 SH-8 平面図



第45図 SH-8 出土遺物実測図(1)



第46図 SH-8出土遺物実測図(2)



第47図 SH-9出土遺物実測図

出土遺物はあまり多くない。今回は2点を図示した。1は大形の広口壺で口縁部は水平気味に外反する。端部を下方に少し拡張し、端面に2条の凹線文をめぐらす。上部の凹線の中に円形浮文を4つ貼りつける。2は壺の胴部である。上部には3条のくずれた簾状文をめぐらし、その下方は直線文、さらに下に波状文を配し、胴部最大径の部位には籠状工具により、2段の逆方向の稜杉文を施す。これらの土器はIV様式のものとみられる。

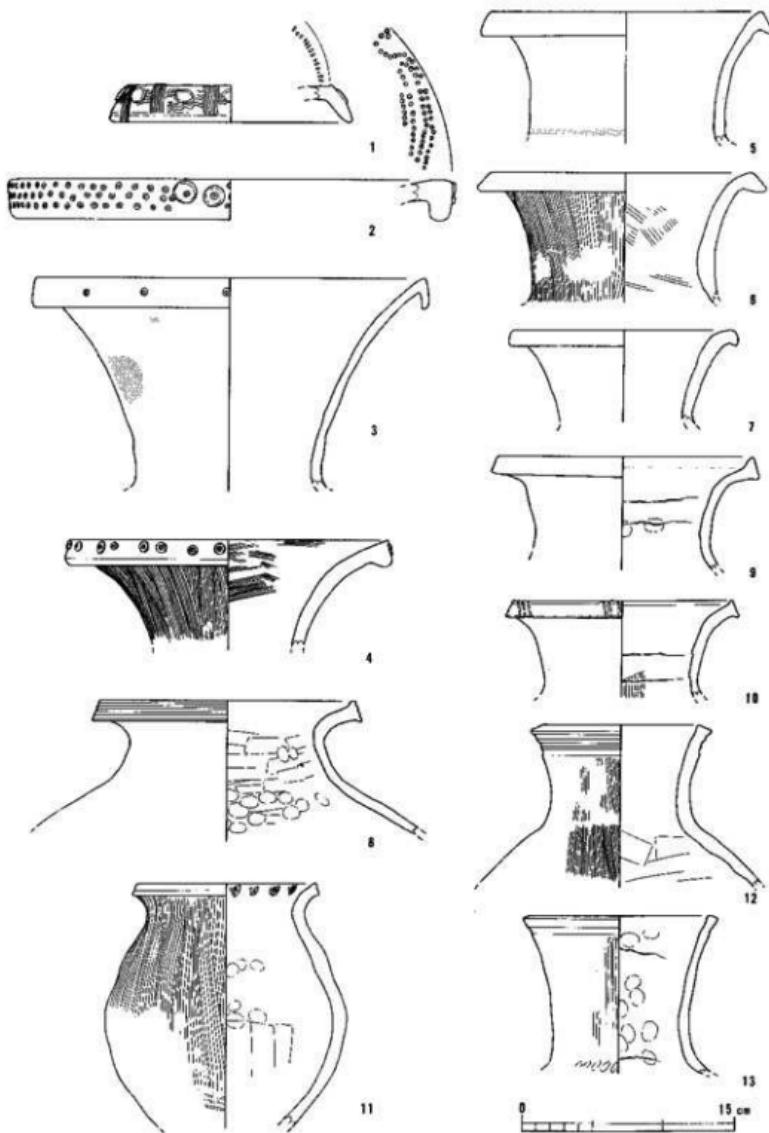
S H - 10 (第48図 第49図～第53図) 調査区の西壁南側において検出した円形の住居址であるが、約半分が東側の未調査地に入る。直径4.1m、周囲に幅10～20cmの周溝を巡らし内部に杭状の小さい穴がみられる。ほぼ中央には径0.5m、深さ0.2mの炉と推定される穴があり、内部には炭片が混入する。また西側よりには90×55cm、深さ約5cmの中全体に焼土があり、炉とも推定されるがさだかではない。床面には支柱穴と考えられるものが1個しかない。床面周囲には幅約1mの範囲に、厚さ5～10cmのスカ入り粘土が焼けた状態で検出され、その下部で炭化材とみられるものが検出されたが、それは全体の極く一部で、また一部材の残片のみであった。このような事から立ち壁を有する住居が火災を受けて消滅したことを推定させるものの部材の出土や、支柱穴が少ないとなどから家屋構造に興味を覚える。しかし手がかりはほとんどない。

埋土の状態を観察すると焼失した後、多数の土器が一括投棄され、その上部には地山の黄褐色粘土が埋められている。このことは、S H - 1 住居址がこの上部に及んでいることからその段階で整地されたものと推定される。

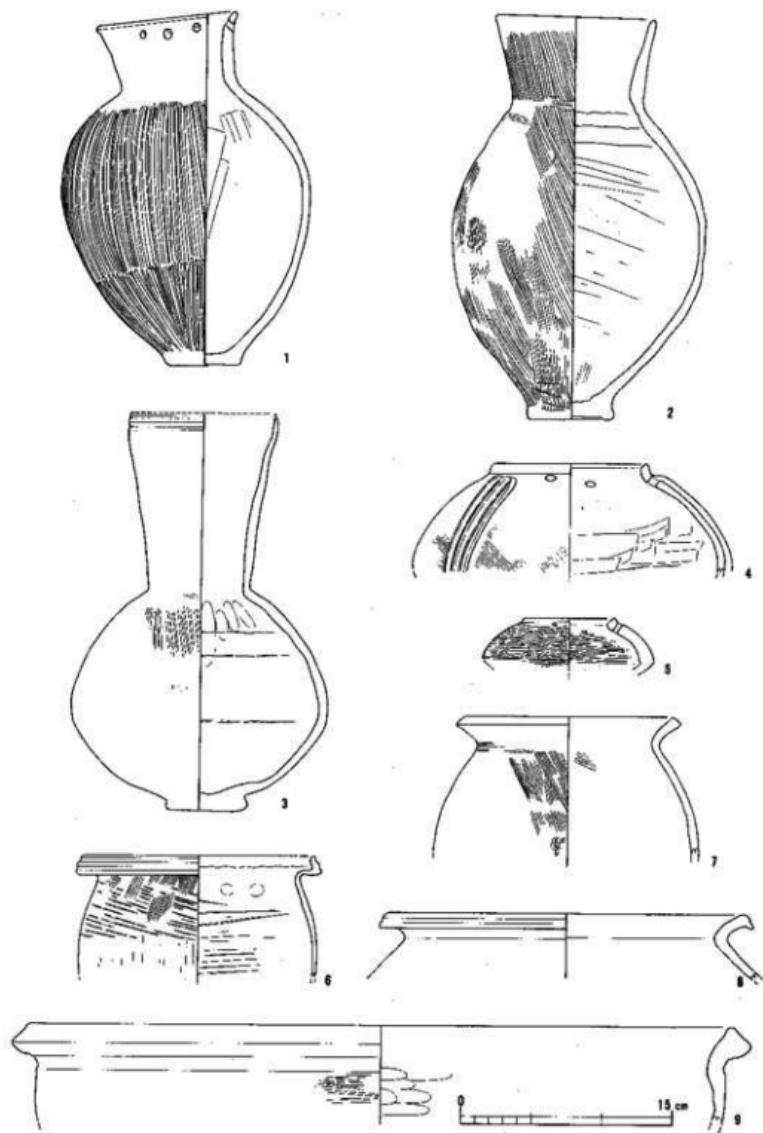
出土遺物は多く、各種に及んでいる。壺は第49図1～13、第50図1～5まである。1～7は口縁端部を下方に拡張するものであるが、その中でもバリエーションがある。1～4は有文のものであるが、2は内面にも竹管



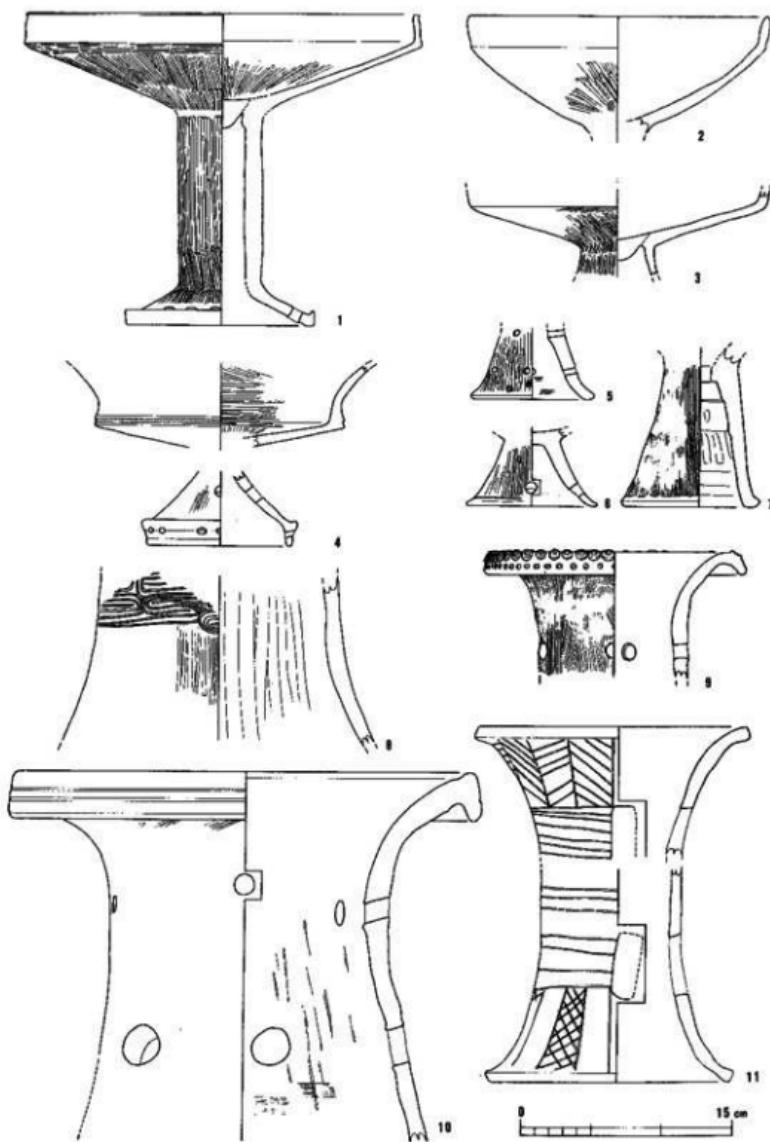
第48図 S H - 10 平面図・断面図



第49図 SH-10出土遺物実測図(1)



第50図 SH-10出土遺物実測図(2)

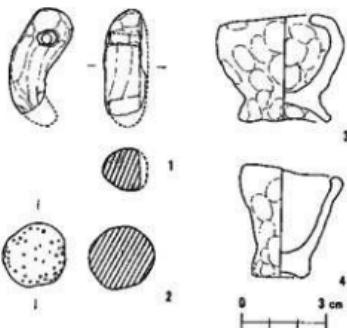


第51図 SH-10出土遺物実測図(3)

文を施文する。形態から器台の上部かもしれない。3と5は河内の胎土であり、5は頸部に赤色顔料を塗布する。8～10は口縁端部を幾分拡張するもので、8は凹線文を、10は縦に3条の範描沈線を施す。11は『土器集成』では壺Dに分類されるものである。胴部外面は縦方向の粗いハケ調整であるが、下方には右下がりの叩き目が観取される。口縁部内面に扇形文を施す。12・13と第50図1・2は短頸壺である。12と13は口縁部下端に3条、および1条の凹線をめぐらす。1は口縁部に3孔一組とみられる孔を穿っている。3は口縁部が少し細いものの長頸壺とみられる。胴部最大径は下方にある。口縁端部に2条の擬凹線をめぐらす。河内の胎土である。4と5は台付無頸壺で、4は縦方向に3条の棒状浮文を施し、口縁部下端に一对の円孔を穿つ。河内の胎土である。5は精製された小型のもので、胴部が算盤状に屈曲し、口縁部下端には同じように一对の円孔がある。壺は3種類あげた(6～8)。6は口縁端部を上方に拡張し、受け口にしたもので端面に凹線を施す。胴部上外面には右下がりの叩き目が認められ、下方は縦方向のケズリである。9は大型の鉢の上部とみられる。高杯は種類のちがう4点をあげた(第51図1～4)。1は精製された胎土を用い調整もていねいである。杯部は直立する口縁部を有し、脚台は中空の柱状部から大きく屈曲する小さい裾部を有する。裾には3孔一組の円孔を3方向に穿つ。2は深い杯部に直立気味の口縁部を有し、端部は丸く終わる。4はこの時期では幾分特異な形態の高杯で、精製された黄白色の胎土を用いる。杯部は内傾気味に直立して大きくひらく長い口縁部を有する。屈折した外面には1条の擬凹線を配し、その中は赤色顔料を塗布している。脚部は端面と裾部に円孔を多く穿っている。5～7は脚台である。円孔を有する低脚のものと無孔の通有の大きさのものがあり、それぞれ上方にのる器種がちがうものとみられる。8～11は器台である。それぞれ形態がちがい、文様も特異である。10は特に大型の器台で口縁部に2条の擬凹線をめぐらす。9は口縁部端面を竹管文を伴う円形浮文とその下段の竹管文によって異常なまでに飾りたてている。8は外面にくずれた縦型の流水文を配するものである。その施文は鋭利なもので深く1条ずつ刻まれて



第52図 流水文拓影図(1:2)



第53図 SH-10 出土遺物実測図(4)

いる。円孔の箇所もみうけられる破片があることより器台に入れた。11も8同様鋭利な工具で1条ずつ施されたものである。上部と下部は接合不可能ため推定復元したことをことわっておく。形態は鼓形を呈し、中央部分には長方形の透し穴を有する。外面の文様は上部を綾杉文風に、下部は格子文を配し、中央部分は3帯の沈線文をめぐらす。

第53図の1は勾玉形土製模造品である。穿孔は両面で、現存長は3.7cmである。2は球状の土製品で表面に無数の刺突が認められる。直径は約2.2cmである。3と4はミニチュアの粗製品である。

以上の土器群はIV様式新段階とV様式古段階の特徴が混在しているものとみることができよう。

SK-2 (第54図 第56図1~3) A-2
調査区の中央東側において検出した不正形な円形を呈する土坑である。規模は長径2m、短径1.8m、深部0.2mを測る。埋土は中央部分が淡褐色粘質土であるがいくぶん褐色が強い。周囲は中央より淡くなり灰褐色砂質土である。中央部分埋土より多くの土器が出土している。

出土遺物は3点をあげた。1は口縁部がゆく外反し、形態から鉢であろうと思われる。2は中空の高杯脚部である。3は叩き目を有する甕の底部である。V様式の中葉のものであろう。

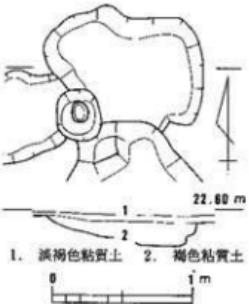
SK-3 (第55図 第56図4・5) A-1~A-2
調査区にかけて検出した不正形な土坑である。SK-1によって切られているが、規模は長径1.1m、短径0.8m、最深部0.15mを測る。埋土は一様に淡褐色粘質土が溜り、下部上部とも土器が出土している。

出土遺物は甕2点をあげた。4は大形甕の底部とみられる。外面には縦方向の窓ヶ替りが認められる。5は大きく水平方向にひらく口頭部を有し、端部は上方にやや張り出す。これらはIV様式のものである。

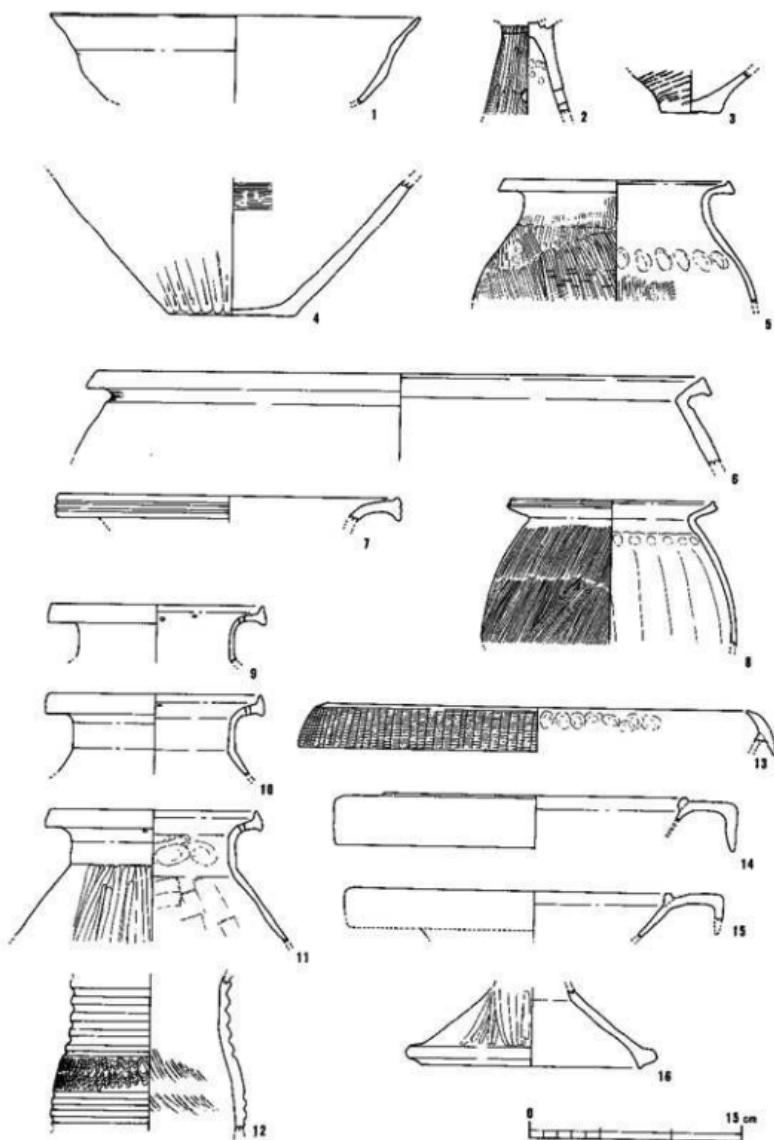
SK-5 (第57図 第56図6~8) B-2
地点で検出した船底状の土坑であり、ほぼ真北に長軸をとる。規模は長径3m、短径0.9m、深さ0.17mを測り、底はほぼ平坦である。



第54図 SK-2 平面図・断面図



第55図 SK-3 平面図・断面図



第 56 回 土坑出土遺物実測図 (SK-2 1~3、SK-3 4・5、SK-5 6~8、SK-9 9~16)

埋土はほぼ同一の淡褐色粘質土であるが、北隅下部においてはそれよりも褐色の強い埋土がみられる。土器は淡褐色粘質土中より出土している。

出土遺物は壺と甕2点をあげた。6は大形甕の上部である。頭部は強いヨコナデによりくぼむ。

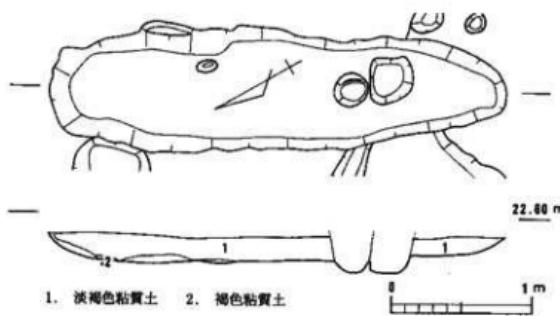
8も甕の上半部分である。口縁部端面には1条の凹線をめぐらす。7は甕の口縁部である。端面には2条の凹線文をめぐらす。これらはIV様式の土器である。

SK-7（第58図 第59図）B-1地区において検出した土坑である。形状は南側が古墳時代の柱穴に切られているため、形は橢円形を呈しているが、本来は円形に近いものであったであろう。規模は長径0.73m、短径（推定）0.6m、深さ0.4mである。埋土は上下2層に分層され、下層は褐色粘質土をベースに地山の黄褐色粘土がブロック状に少量混入し、固くしまっている。上層は一様に褐色粘質土であるが、壺形土器をほぼ水平に寝かせて固定してある。おそらく壺棺として使用されたものであろう。

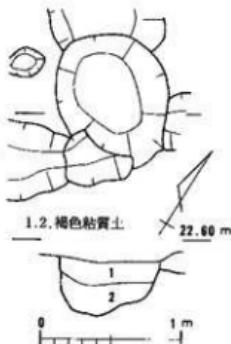
出土遺物は第59図にあげた1点だけである。河内の胎土である。外反する口頭部を有し、口縁部は下方に拡張し端面をつくるが無文である。胸部は肩がやや張り、最大径は中位に有する無花果形の形態である。この土器はV様式の古段階のものであろう。

SK-9（第56図9～15）B-2杭の西側において検出した不正形な土坑であるが、SH-5、SK-5、SK-10に切られている。したがって規模も明確にしがたいが、径は1.4～1.5mの間で深さは南側が0.24mと深く、北側は0.15mほどである。埋土はほぼ一様に淡褐色粘質土であるが、北側の底で炭片が混入していた。この層中から多くの土器が出土している。

出土遺物は8点を図示した。9～11は甕であるが9・10・11は同様の口縁部を有し、それに小孔が認められる。13は上下に拡張する口縁部を有し、端面には簾状文を施す。14・15は高杯の杯部である。同一形態を有し、口縁部を下方に垂下させる。16はその脚台であろうとみられる。12は上下に凹線文をめぐらし、その内側に波状文を施すものである。甕と推定される



第57図 SK-5 平面図・断面図



第58図 SK-7 平面図・断面図

が、現在のところ器種はさだかにできない。

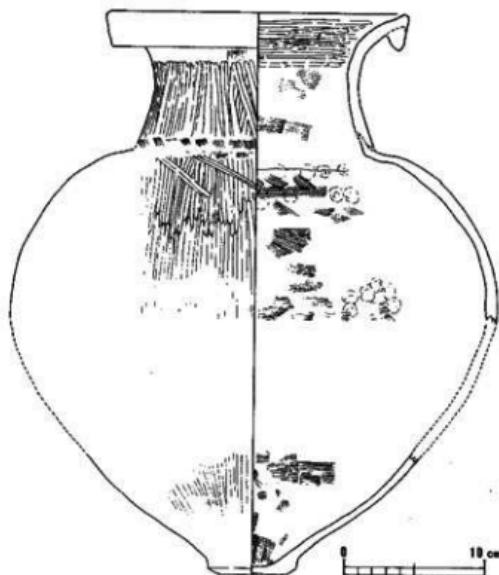
包含層出土遺物

須恵器（第61図） 出土遺物
は各器種に及んでいるが、その中でも蓋杯類が圧倒的に多い。
整理作業が完了していないので明確にはしがたいが完形品は少なく、破碎されたものがほとんどようである。

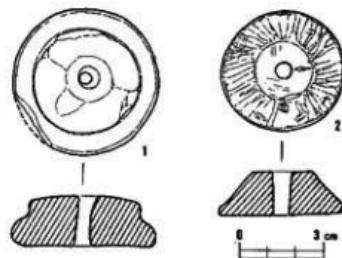
蓋杯は口径の大きい一群と口径の小さい一群に分けられる。
壁においても口縁端部が外反し丸く終わるものと、端部外面を突帯状に広くするものがある。また胸部中位に把手をもつものがみられる。その他図化しえなかつたが器台の破片等もみ

うけられる。これらの出土遺物は蓋杯で代表されるように、明らかに2時期は認められる。口径の小さい一群は桜井谷窯跡群編年のI型式3段階に比定される¹³⁾。今回の出土遺物のうち、この段階より遡る須恵器はみあたらない。もう一群の口径の大きな蓋杯はII型式1段階に比定される。これ以外の遺物の中に、これ以後のものが若干存在する可能性は残されているが、大きくはこれら2時期の遺物が混在した須恵器群である。

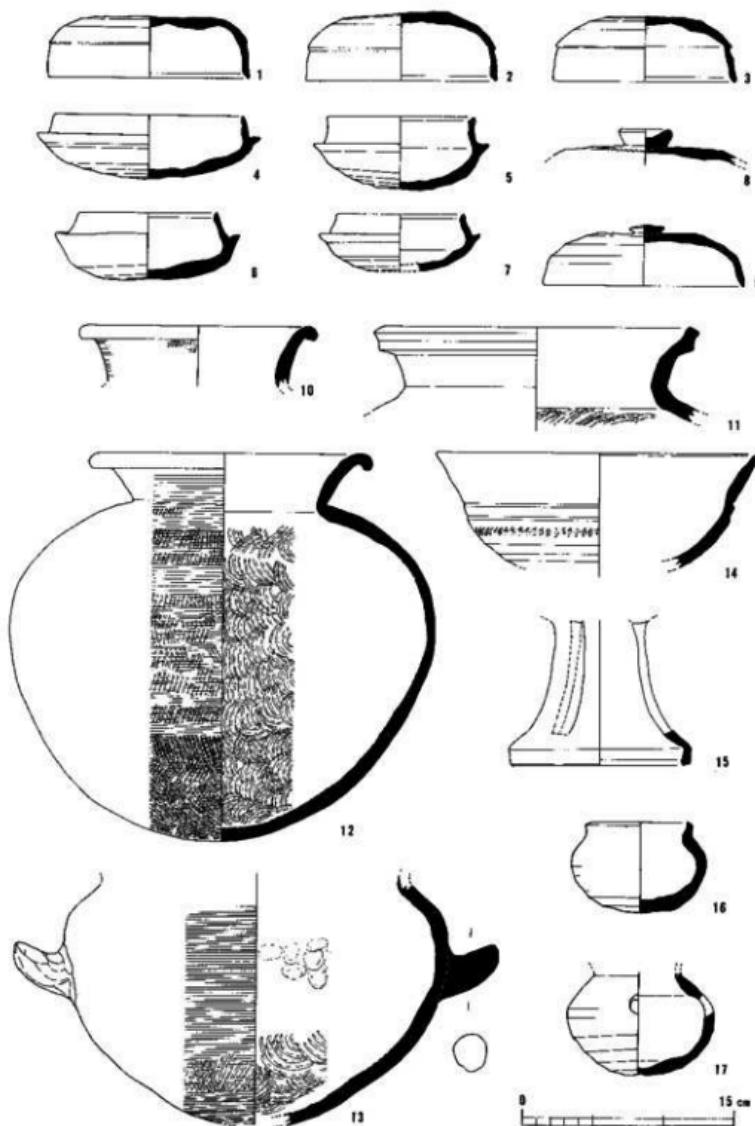
紡錘車（第60図） 2点出土している。1はA-3地区、包含層を削除し、検出したSH-3住居址の埋土に食い込むように出土したものである。形態は有段の円形で、直径5.1cm、高さ1.8cmを測る。須恵器の土製品である。2は通有の滑石製のもので円錐台形を呈する。直径4.4cm、高さ1.6cmを測る。



第59図 SK-7 出土遺物実測図



第60図 紡錘車 実測図

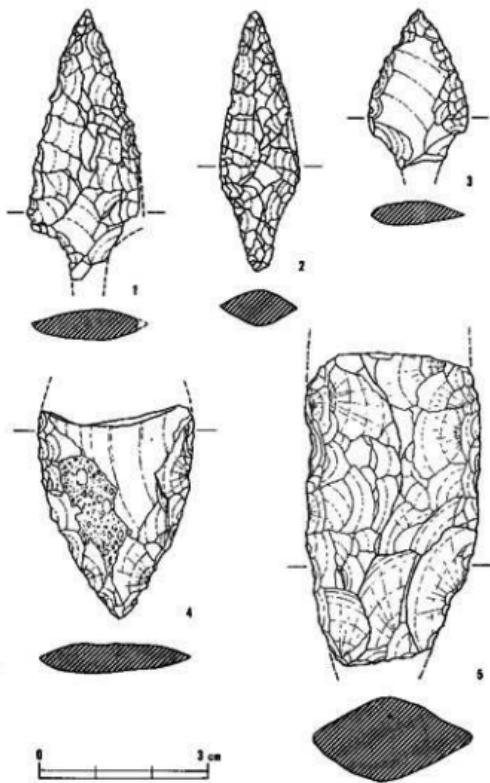


第61図 須恵器実測図

石鎌 (第62図1~4) 1は有茎式の打製石鎌である。側縁の一部と先端部および基部端を欠失する。現存長47mm、幅20mm、厚さ5.1mm、重量4.1gを計る。両面とも粗い剥離を施したあと、側縁に対して細かい剥離を重ね、一部は曲状に仕上げる。大剥離面は残さない。側縁は直線的で、基部への移行点は明瞭である。断面形は扁平なレンズ形で、明確な稜を持たない。石材は、肉眼観察によればサヌカイトである。

2は有茎式の打製石鎌である。側縁の一部を欠失する。全長47mm、幅14mm、厚さ6.0mm、重量3.1gを計る。片面にはほぼ中軸線に沿って細長く原面を残すが、調整剥離は一般に細かく、整美な仕上がりである。側縁は直線的だが、基部への移行点は緩やかである。断面形は菱形に近いレンズ形で、比較的明瞭な稜を持つ厚手の製品である。石材は、肉眼観察によればサヌカイトである。

4は上半部を欠損する尖基式の打製石鎌と思われる。現存長38mm、幅28mm、厚さ7.5mm、重量6.9gを計る。両面に原面または大剥離面を大きく残して側縁のみに階段状剥離を主体とする粗い調整剥離を施し、断面形は扁平な六角形を呈する。おそらく木葉形の平面形に復元されると思われるが、こうした形態の大型品は非常に類例が少ない。東大阪市山賀遺跡9号墓木棺内から検出された例に類似するが、山賀例は上半部側縁に細かい鋸歯状剥離を施した特異な製品である。石材は、肉眼観察によればサヌカイトであるが、二上山産のものほど緻密でなく、色調も青灰色がかっており、香川県など西方地域産である可能性が高い。形状・石材とともに注意を要する資料である。



第62図 石鎌、石剣実測図

3は有茎式の打製石鏃である。茎部端を欠失する。現存長28mm、幅18mm、厚さ4.2mm、片面は大きく大剝離面を残し、側縁のみに調整剝離を施すが、もう一方の面は調整剝離が全面に及ぶ。側縁はわずかに外弯し、茎部への移行点は比較的明瞭である。断面は扁平で薄手の製品である。石材は肉眼観察によればサヌカイトである。

5は打製石剣の一部である。現存長56mm、幅31mm、厚さ14.7mm、重量28.5gを計る。刃縁の一部に刃つぶし状の擦痕がみられ、わずかな端面を形成することから、基部に近い部分と考

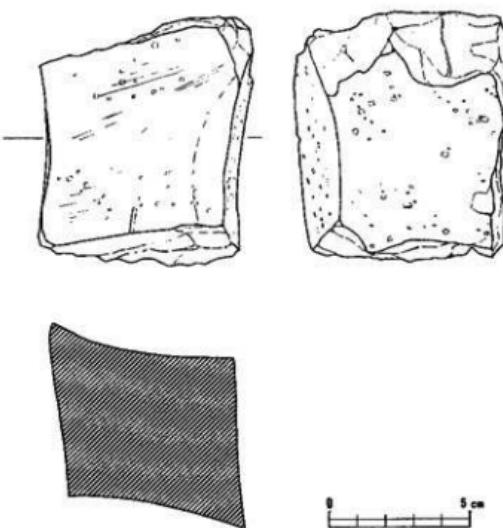
えられる。両面とも粗い剝離を全面に及ぼし、とくに階段状剝離が目立つ。刃縁には細かい調整剝離を部分的に重ねる。断面形は菱形で稜は比較的明瞭である。石材は肉眼観察によればサヌカイトである。

砥石（第63図） 一辺7cm前後の立方体状を呈し、重量680gを計る。6面のうち対面する2面を原面のままで残し、あとの4面を砥面として使用している。砥面は中央部が凹み、きわめて平滑に研磨されているが、擦痕は顕著でない。色調は淡黄色で木目状の脈が入る。石材は石英粗面岩である。

3.まとめ

今回の調査地は狭い範囲にもかかわらず、各時期の遺構が密集して検出された。特に柱穴群は多数に及び、ほとんどが古墳時代後半以降のものと推定される。しかし時間的な制約もあり、整理が十分に行われていないので今回は割愛した。したがって報告したものの中で明らかになった住居群と出土遺物について若干述べることにする。

住居群 11軒の住居址を検出したが、残存状況はかならずしも良好ではなかった。11軒のうち弥生時代のものは8軒、古墳時代のものは3軒である。その変遷は、SH-9→SH-7→SH-6→SH-10→SH-1・SH-8・SH-11→SH-3→SH-5→SH-2→SH-



第63図 砥石実測図

4である。SH-3までは弥生時代、SH-5以降は古墳時代のものである。しかし、この間にはかなりの時間的な断絶があり、古墳時代前半は空白である。弥生時代の住居址においてもSH-10からSH-8に速やかに移行するかというと必ずしもそうではない。このことは土器論がからむことであり、この地域の中期後半から後期の編年案が提示できない現状では即答できない。SH-8はV様式の中壙と推定したが、その中でも後半に近い様相を持っている。したがって現在の研究段階でみるとV様式の前半期の型式差が存在するのである。

出土遺物 包含層および、各住居址から遺物が出土しているが、ここでは多量の土器を一括投棄し、またその土器群が弥生時代中期から後期の土器研究に良好な資料を提供するとみられるSH-10出土遺物についてのみ触ることにする。

これらの土器群はIV様式新段階の西ノ辻N式の様相を中心にした中に、V様式古段階の西ノ辻I式の様相のものが入り込んでいる状態とみることができよう。このような状況は近年、畿内を中心に周辺でも資料の増加がみられることから、この西摂東部地域においても同じような歩みをしていた事がうかがえる。またそれらについての積極的な論考も目につく²⁾。西ノ辻N式の様相は壺や器台を中心として、口縁部を加飾する傾向が強くうかがえるが、その中でも器台2例の外側に施された文様は特徴的である。特に第51図8はこの時期まで流水文の影響が残存する事例として、良い資料であろう。

西ノ辻I式の様相は広口壺の口縁部を下方に拡張する形態や、長頸壺、短頸壺に認められる。それらの中でも広口壺（第49図3・5）や長頸壺（第50図3）などは在地の土器ではなく、明らかに搬入された河内の土器であることは暗示的である。そこであらためて西ノ辻I式が問題になってくる。近年の調査例の増加によっても西ノ辻I式の単純様相はこの地域でも見い出しえない。個々の器種の中にはそれらしきものがみられるがせいぜい遡っても西ノ辻E式段階までである。ということは、汎畿内のV様式最古の段階の様相として捉えることができるのかどうか。また河内の一地域の一様相として捉えて、各地がその影響を強く受けながら、通有のV様式が開花していくのであろうか³⁾。この地域の現状からみると、はなはだ感覚的であるが、後者の状況が原状に即しているとみられる。いずれにせよ今後の課題としておく。

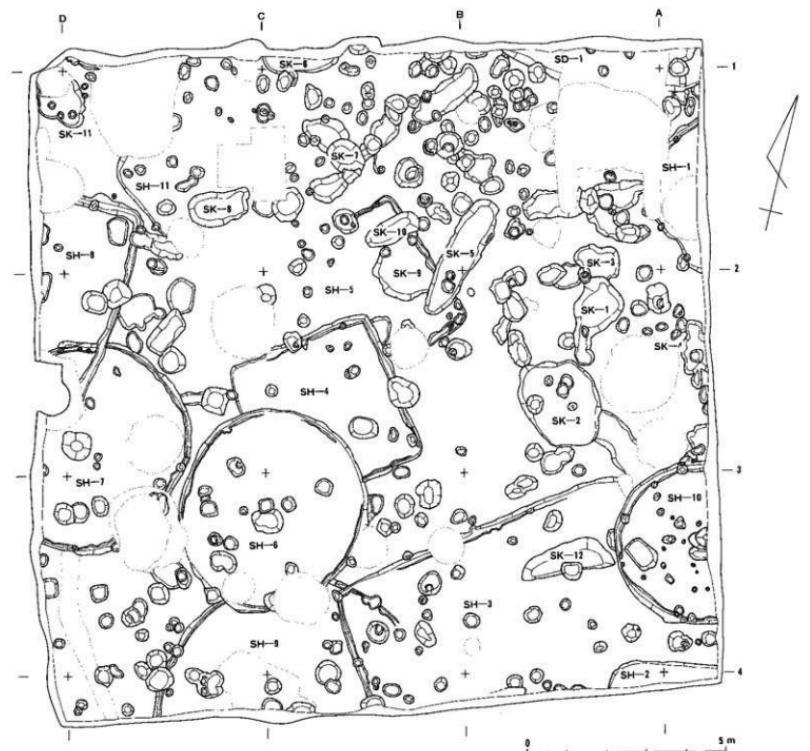
註1 木下亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」（『桜井谷窯跡群2-17窯跡』小路窯跡遺跡調査団 1982年12月）

註2 森岡秀人「西ノ辻N式併行土器群の動態－畿内第IV様式の細分作業と関連して－」（『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982年）

同「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」（『高地性集落と倭國大乱』小野忠雄博士退官記念論集 1984年）
寺沢薰「<研究批判>大和弥生社会の評価をめぐって—石野氏の批判に対して—」（『古代学研究』95 1981年）

註3 このことは都出比呂志氏が下記の論考でいみじくも指摘された「地域的小様式」の問題となろう。また、この地域（西摂東部）の「時間的小様式」による編年の確立を痛感するが、この「時間的小様式」の確立により、「地域的小様式」も一段と明確になろう。したがって「地域的小様式」を時間的概念の「様式」と区別するため、「地域的小様相」として理解しておく。

都出比呂志「弥生土器における地域色の性格」『信濃』第35巻第4号 1983年4月



第64図 造構全体図

4. 赤色顔料物質の化学分析

豊中市新免遺跡第22次調査地点第10号竪穴住居址出土の壺に塗布された赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 井村由美

標記の赤色顔料物質について、筆者らの常法¹⁾に従い、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行なった結果、赤色顔料物質の成分を確認したので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

標記の遺物の頸部に一条塗布されている中より鋼針をもって赤色顔料のみを注意深く0.1mgを剝しとり、分析用試料とする。

実験の部

試料検液の作製

上記採取試料をガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸1滴を加え、加熱し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適当少量の蒸留水を加えて遠心分離器にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No51B(2cm×40cm)を使用し、ブタノール-硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と対照の鉄イオン(Fe^{3+})と水銀イオン(Hg^{2+})の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として、0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧し、それらの間に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置(Rf値で表現する)と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

(1)ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：(Hg^{2+} は紫色、 Fe^{3+} は紫褐色のスポットとして検出される。)

表1 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

	Rf値（色調）
試料検液	0.12（紫褐色）
Fe ³⁺ 標準液	0.15（〃）
Hg ²⁺ 標準液	0.90（紫色）

(2) ジチゾンによる検出：(Hg²⁺は橙色スポットとして検出され、Fe³⁺は反応陰性のため呈色せず。)

表2 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

	Rf値（色調）
試料検液	呈色スポット発現せず
Fe ³⁺ 標準液	〃
Hg ²⁺ 標準液	0.88（橙色）

判定

以上の結果のとおり、新免遺跡第22次調査地点第10号竪穴住居址内出土の弥生V様式廢頭部に一条塗布の赤色顔料物質からは、Fe³⁺のみが検出され、Hg²⁺は検出されなかった。

したがって、赤色顔料物質はベンガラ (Fe_2O_3) であったと判定する。

(1988年3月分析)

註1 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『日本考古学論集1 考古学の基本的問題』

吉川弘文館 (1986)

安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」

『櫛原考古学研究論集 第七』 吉川弘文館 (1984)

椎堂の前遺跡第2次調査

1. 調査の概要

椎堂の前遺跡は從来から中世の遺跡としてその存在が知られていたもので、今回の調査地点は利倉西1丁目10番地にあたる。調査は民間の共同住宅建築に伴なうもので、昭和62年10月29日より12月21日にかけて建築予定地内3ヶ所（南北両トレントおよび中央地区）で実施した。遺跡の層序は、近年の盛土および耕土（1層）、床土（2層）の下に中世の遺物包含層である黒灰色粘質土（3層）、古墳・奈良時代の遺物包含層である暗灰色粘質土（4層）が続き、地山（5層）の黄褐色粘質土に至る。遺物の圧倒的多数は中世のもので、4層上面で当時の遺構を確認した。ただ、3層中あるいは3層上面から切込む中世遺構も多い。

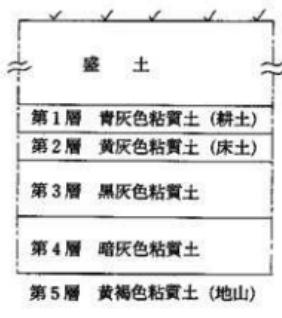
2. 遺構と遺物

S E - 1 (第67図 図版) 中央地区の4層上面で検出した井戸で、直径80cm、深さ60cmを測る。最下部に曲物を設置した後、その周囲に須恵器片と礫を巡らせている。また、底面近くからは木材や礫とともに一括廃棄された状態で土器が出土している。1は口径13.0cm、高さ4.2cmを測る杯で、胎土は瓦質に近く、体部外面に炭素の吸着が認められる。2は復元口径20.0cm、高さ4.8cmを測る須恵器の杯で、底面には墨で曲線が描かれている。1・2とも断面台形のしっかりした高台が認められる。3は復元口径17.2cm、高さ2.4cmを測る土器皿の皿で、外面に2段の横ナデが認められる。端部は短く外反し、内側に1条の沈線が認められる。底部外面に「十二」と判読可能な墨書きが認められる。これらの土器は奈良時代末～平安時代初頭のものと考えられる。

S K - 1 中央地区の南壁に沿う形で検出した土坑で、SK-2にその北西部を切られている。第68図 4・12・21の土器が出土している。



第65図 調査地点位置図(1:8,000)



0 50cm

第66図 基本層序

SK-2 中央地区で検出したいびつな方形を呈する土坑で、東西7.4m、南北2.1m以上、深さ30cmを測る。埋土は黄灰色土と黒色粘質土が交互に堆積していた。埋土より瓦器(1~3)、土師皿(5~8)、白磁碗(17)、土師質の土釜(22~24)が出土している。

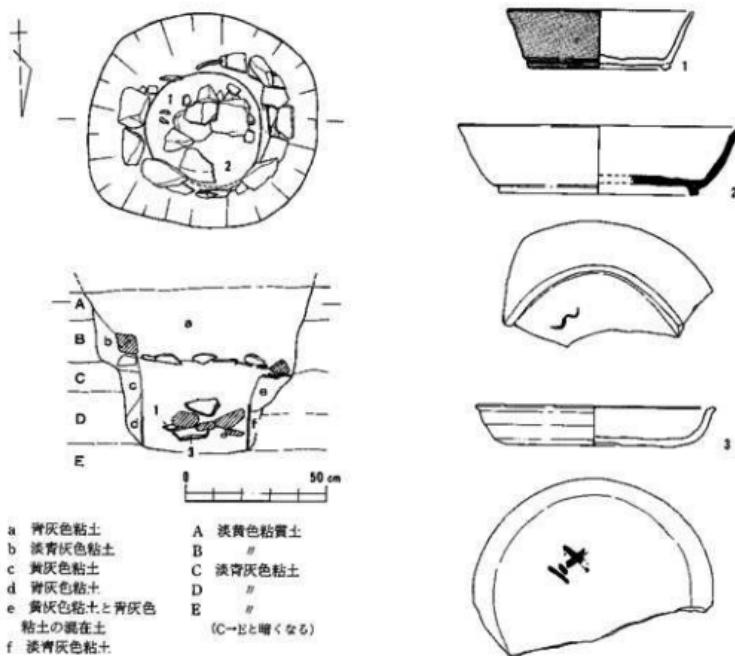
SP-11 北トレーナーの4層上面で検出した直径35cm、深さ20cmを測るピットである。埋土より土師皿(9~13)、瓦器小皿(18)、土師質の土釜(23)等が出土した。

SP-42 北トレーナーの北壁に接する形で検出したピットで、直径40cm、深さ30cmを測り、内部に花崗岩質の石が据えられ、その周囲より瓦器小皿(10)、須恵質の壺(20)が出土した。

なお、11は土師皿、14は縄軸陶器、15は白磁、16は青磁、19は青白磁で、3層から出土した。以上の遺物は瓦器は和泉型で、尾上編年のIII-1期¹⁾、土釜は菅原編年の浜津E型²⁾に属すると考えられ、概ね13世紀前半頃と考えて大過ないであろう。

注1 尾上実「南河内の瓦器碗」(藤沢一夫先生古稀記念論集『古文化論叢』1983)

2 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』1982)



第67図 SK-2 平面図・断面図および出土遺物



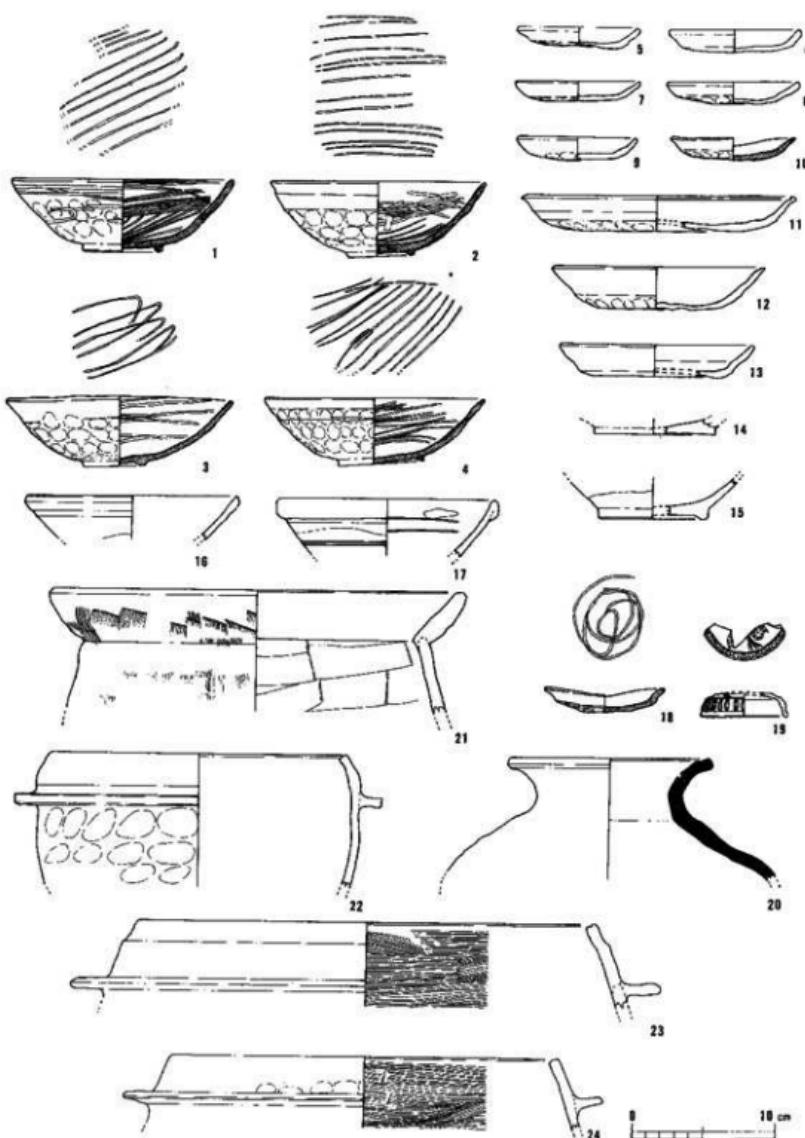
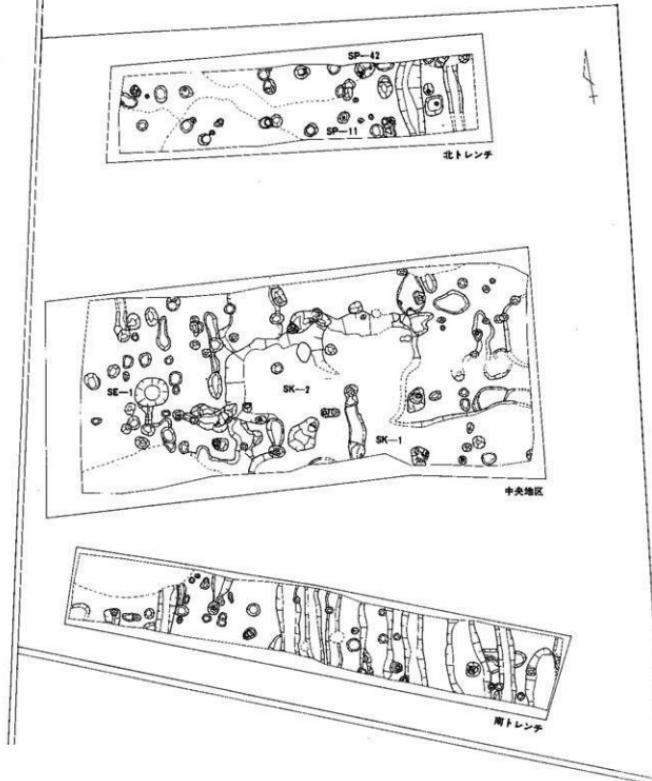


図 68 図 出土遺物実測図



第69図 4層上面造構全体図

0 4m

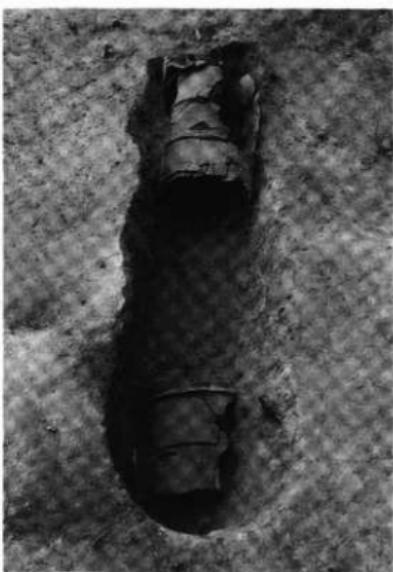
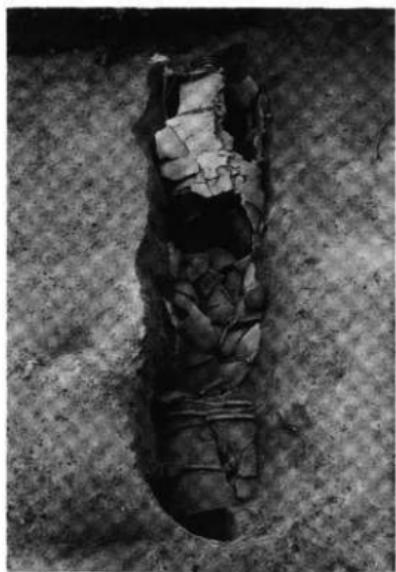
図 版



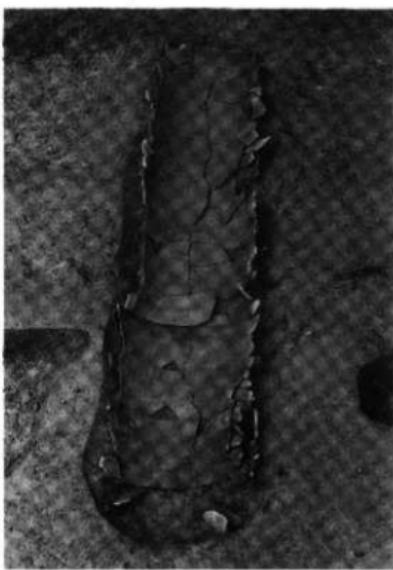
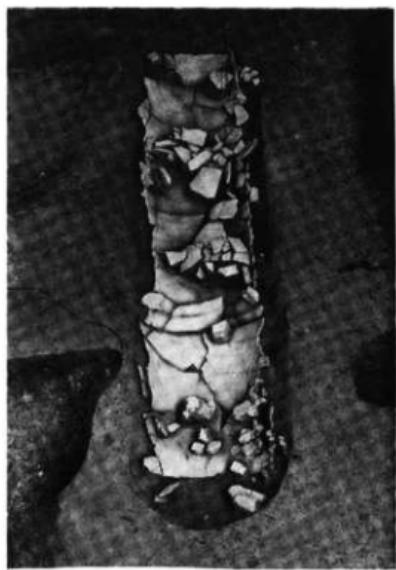
(1)調査区全景（北東から）



(2)調査区全景（東から）



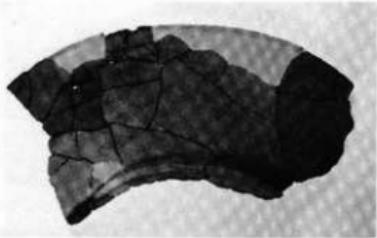
(1) SX-01 検出状況 (南から)



(2) SX-02 検出状況 (北から)



(1) SX-02 検出状況 (西から)



(2) SX-01 出土遺物



(1) S X-01 出土遺物



(2) S X-02 出土遺物

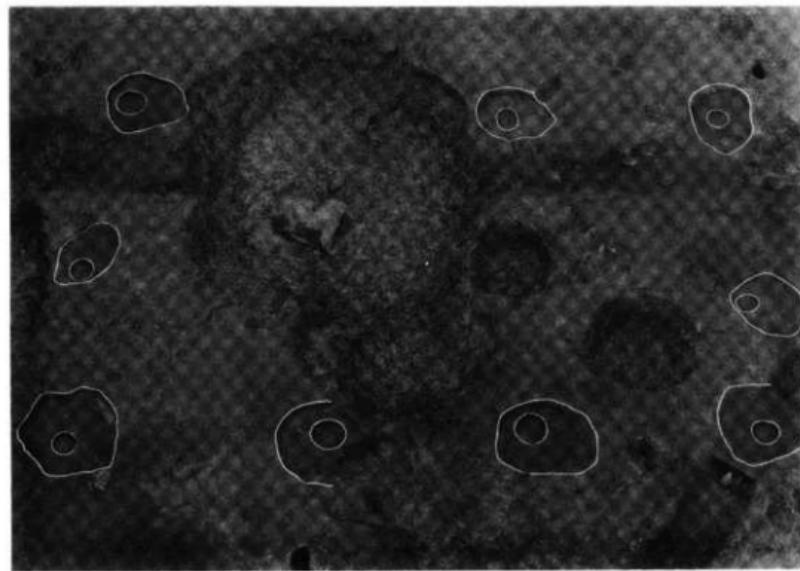
図版 5 新免遺跡第19次調査地点



調査区全量（北から）



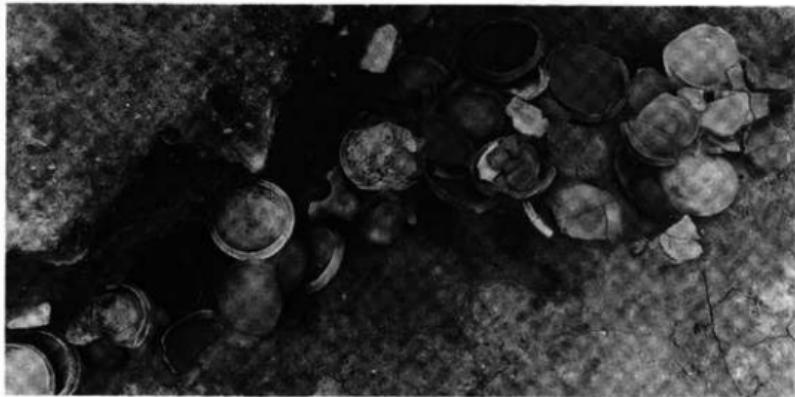
(1) SH-1・2 検出状況 (北から)



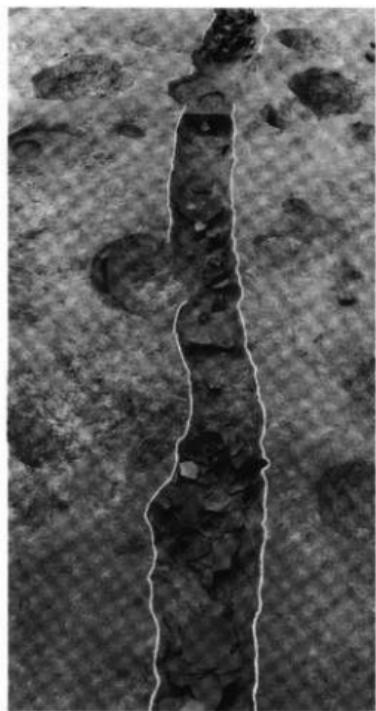
(2) SB-1 検出状況 (南から)



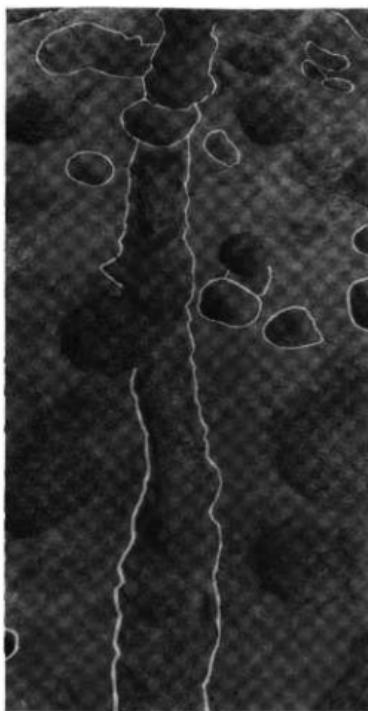
(1) S D - 1 全景



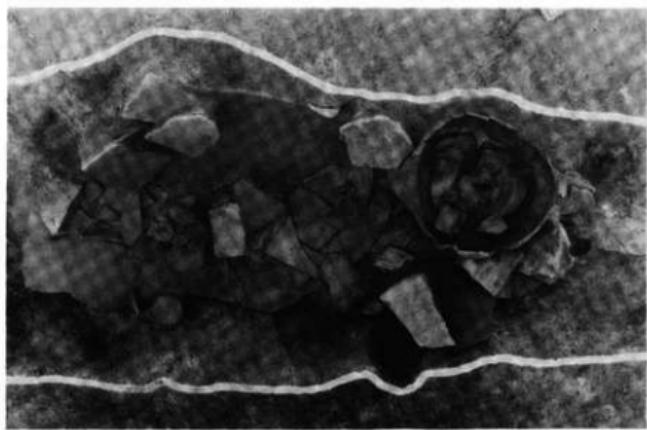
(2) S D - 1 遺物出土狀態



(1) SD-2 遺物出土狀態



(2) SD-2 遺物完掘後狀態



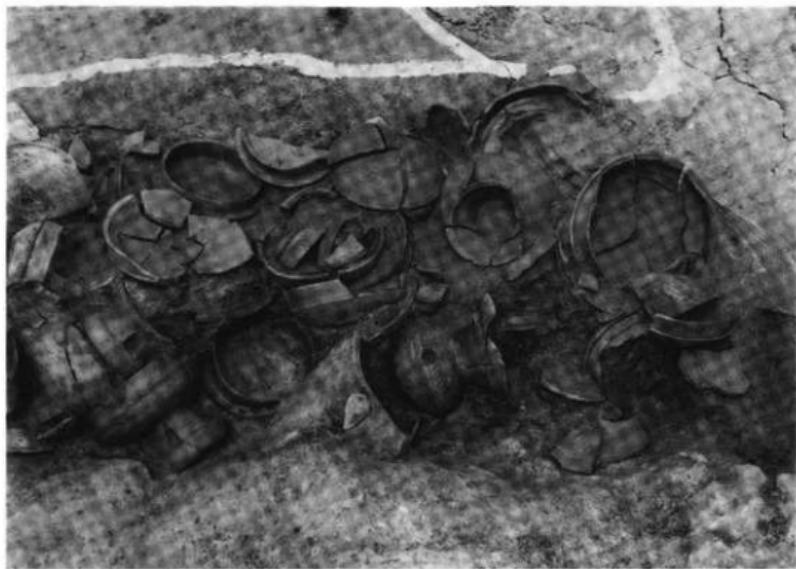
(3) SD-2 遺物出土狀態



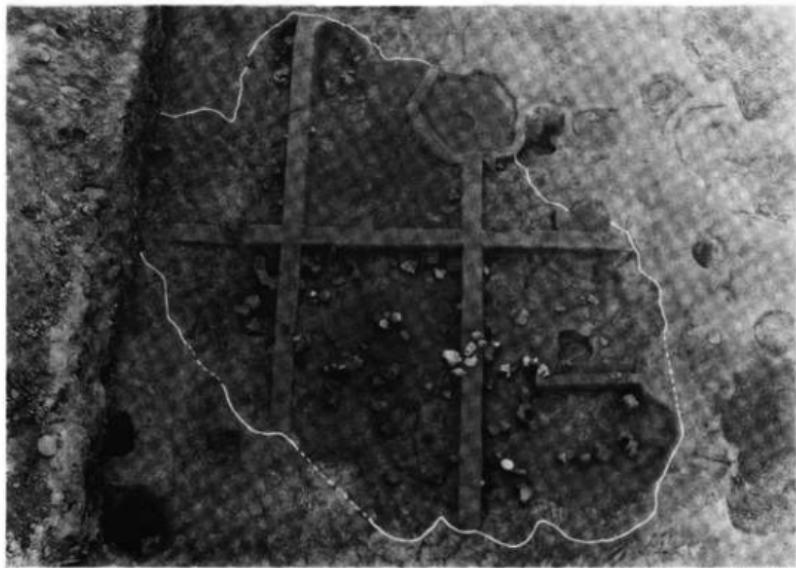
(1) SD-4、SK-1・2 檢出狀況



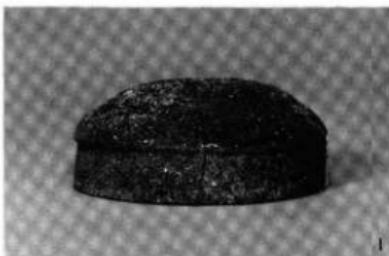
(2) SD-4 遺物出土狀態



(1) SD-4 遺物出土状態



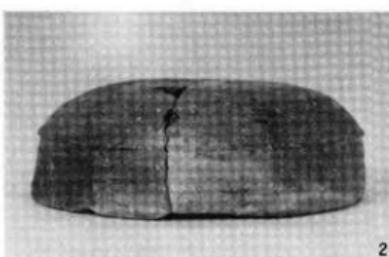
(2) SK-5 検出状況



1



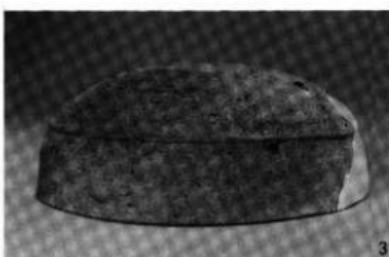
5



2



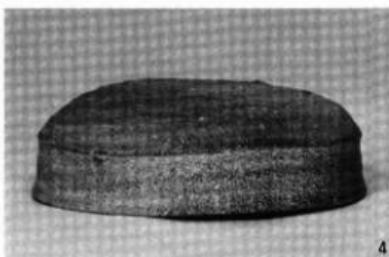
6



3



7



4



8

出土遺物 (5: SD-1、1・2・6: SD-4 8: SK-3 3・7: SK-5 4: SP-160)



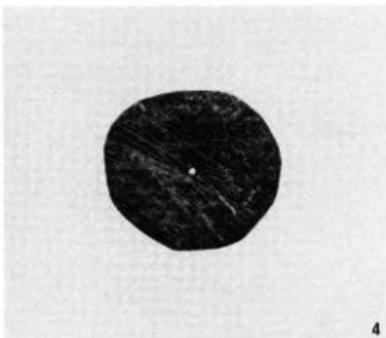
1



2



3

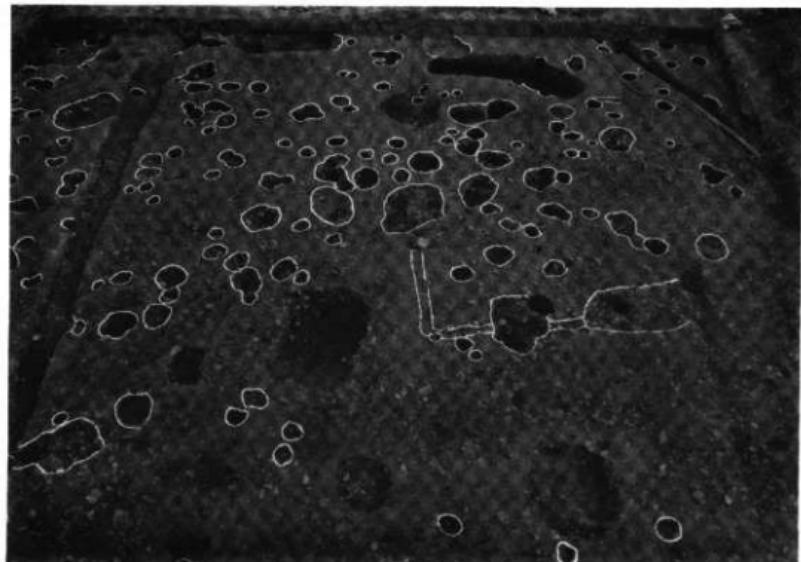


4

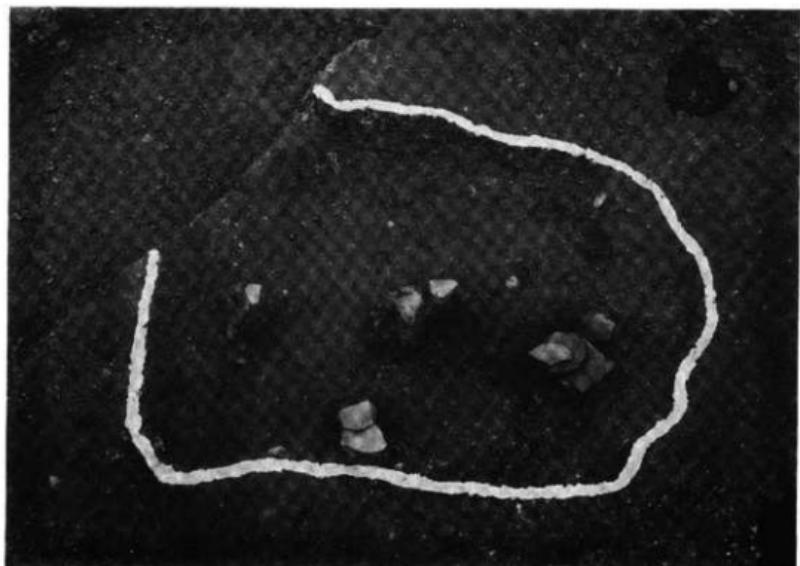


5

出土遺物 (1~3: SD-4 4: SK-5 5: 包含層)



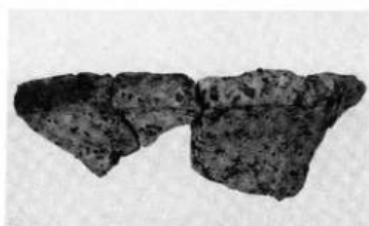
(1)調査区全景（南から）



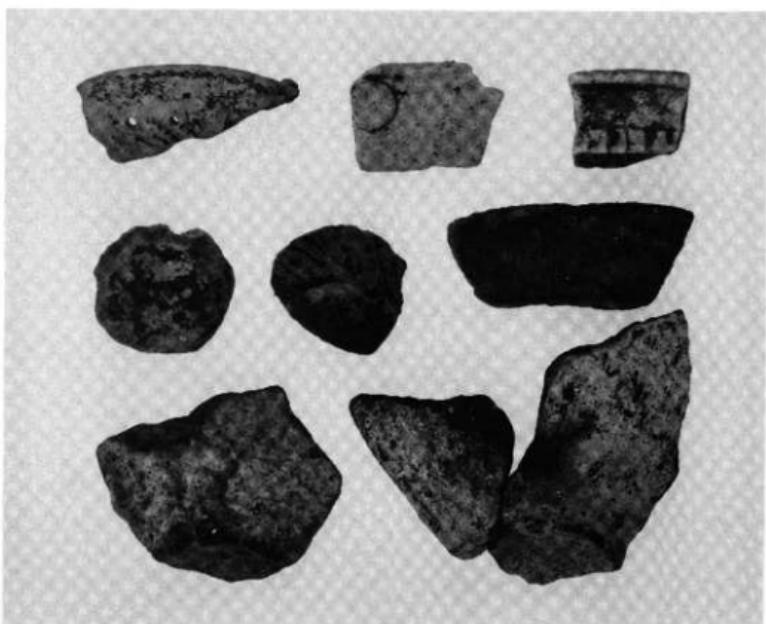
(2)SK-3遺物出土状態（北から）



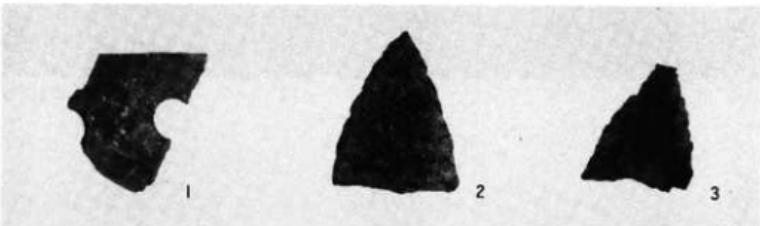
(1)SK-1出土遺物



(2)SK-3出土遺物



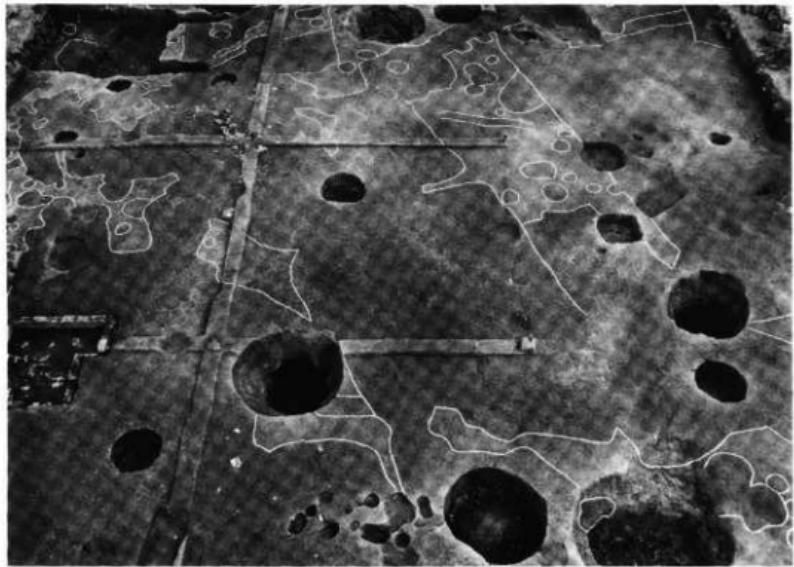
(3)ピット群出土遺物



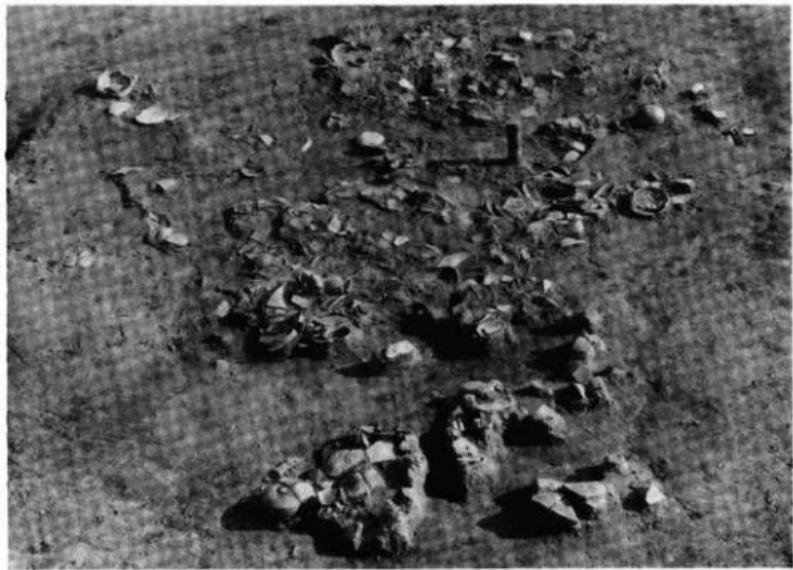
(4)石器類 (1:SP-193 2:SK-12 3:SP-103)



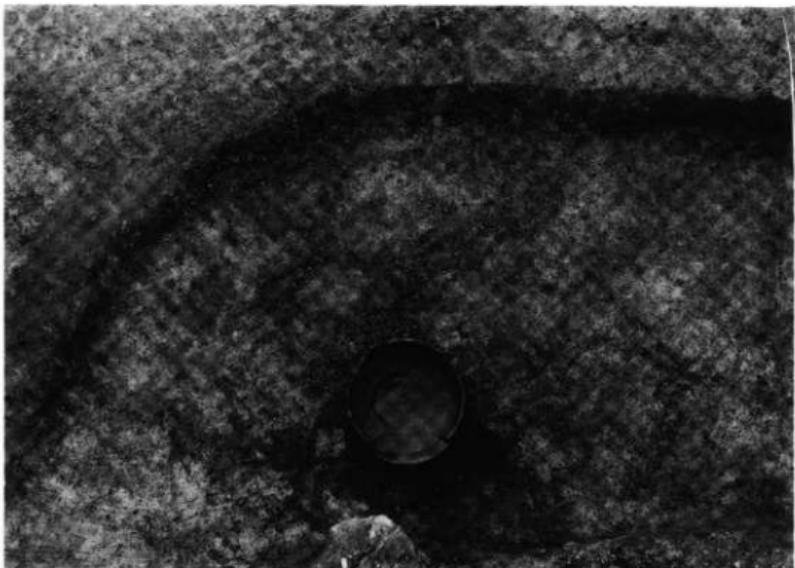
調査区全景



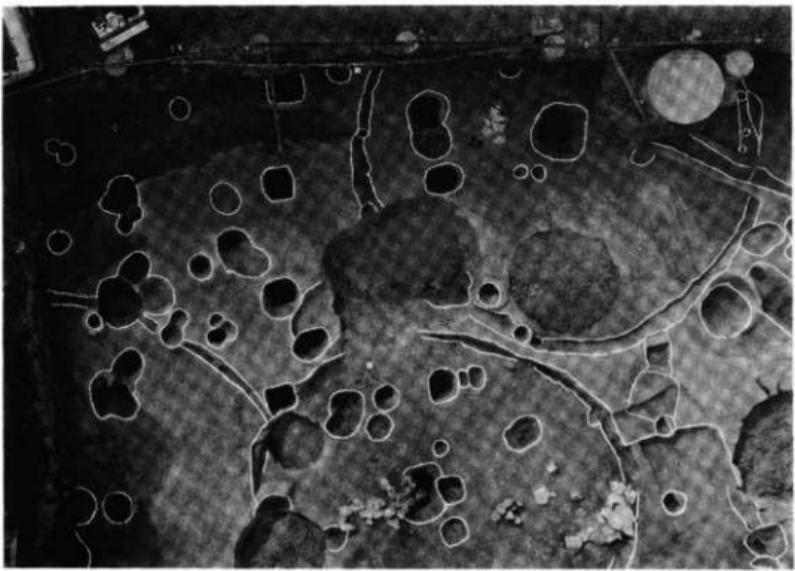
(1)遺構確認状況（西から）



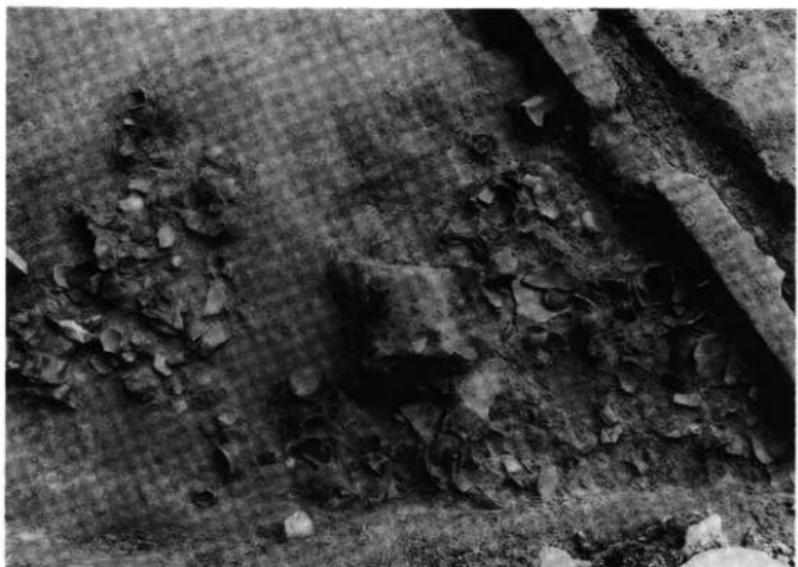
(2)須恵器出土状態（南から）



(1) SH-2 遺物出土状態



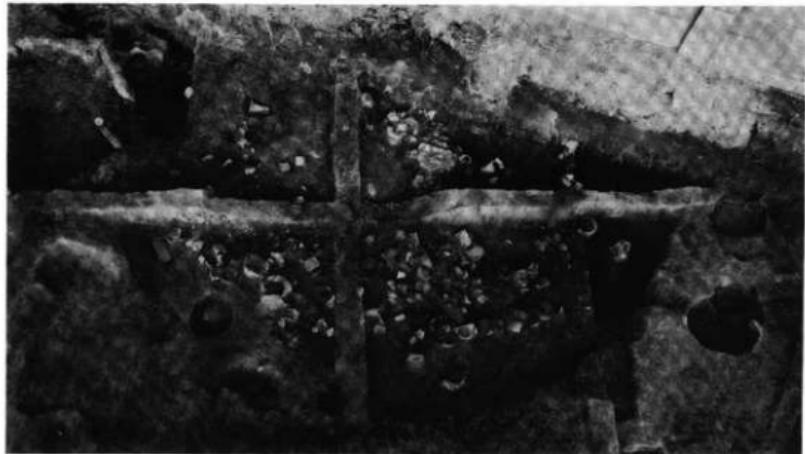
(2) SH-6・7 検出状況



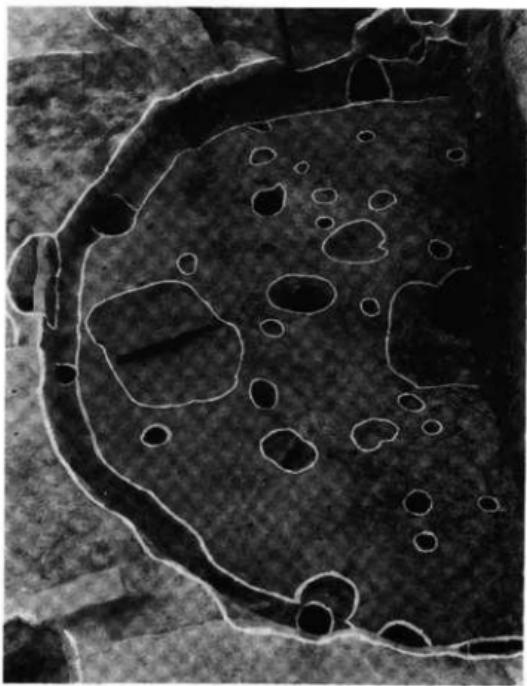
(1) SH-8 遺物出土状態（西から）



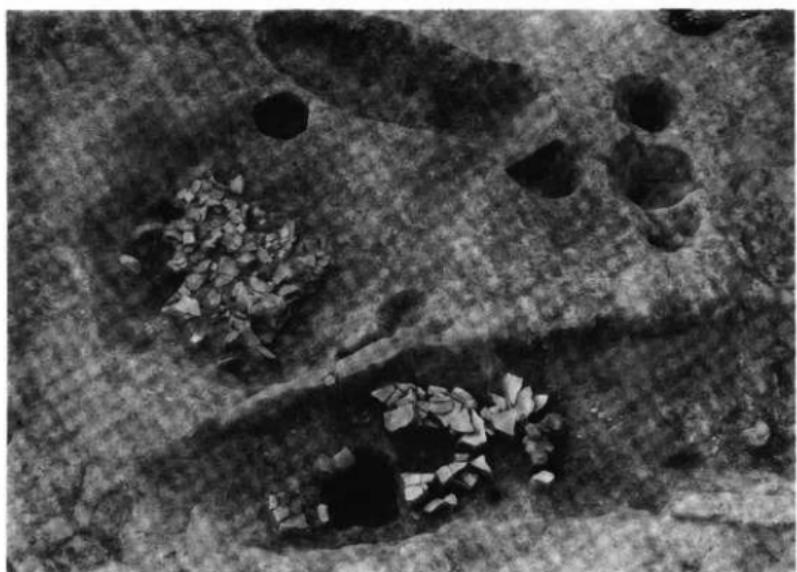
(2) SH-8 遺物出土状態（南から）



(1) SH-10 遺物出土状態（西から）



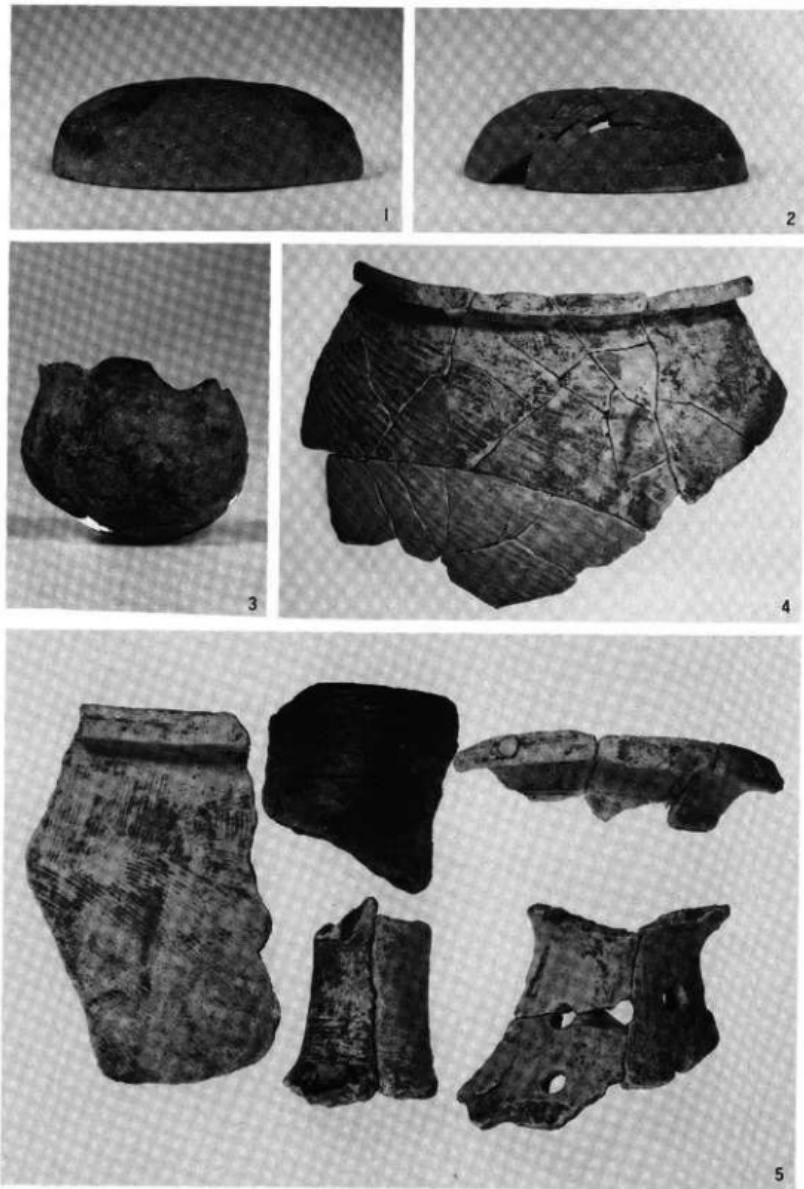
(2) SH-10 検出状況（南から）



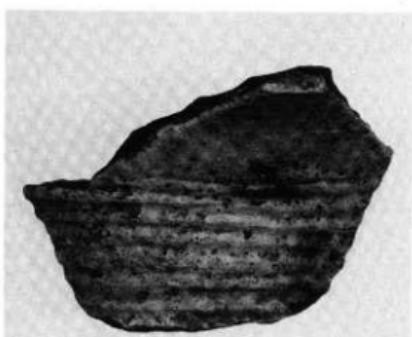
(1) SK-5・9 遺物出土状態 (南から)



(2) SK-7 遺物出土状態 (北から)



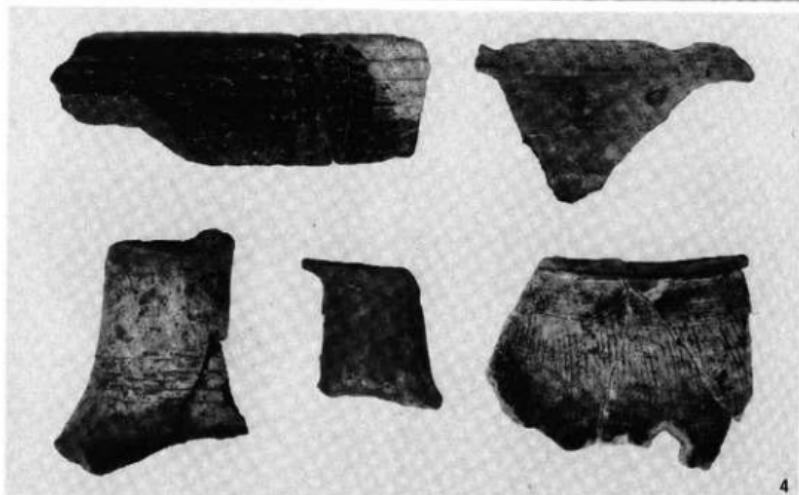
出土遺物 (1: SH-2、2・3: SH-4、4・5: SH-6下層)



2

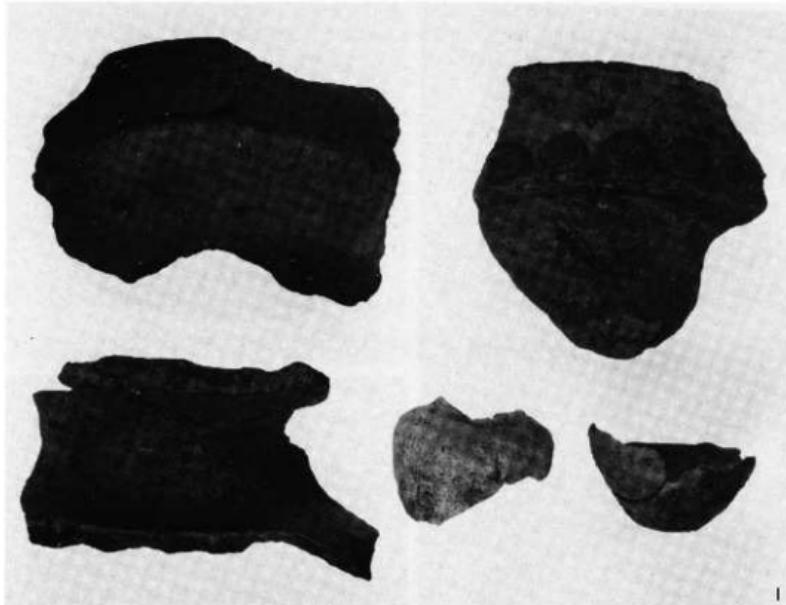


3



4

出土遺物 (1: SH-6 上層、2~4: SH-7)



出土遺物 (SH-8)



1



2



3



4

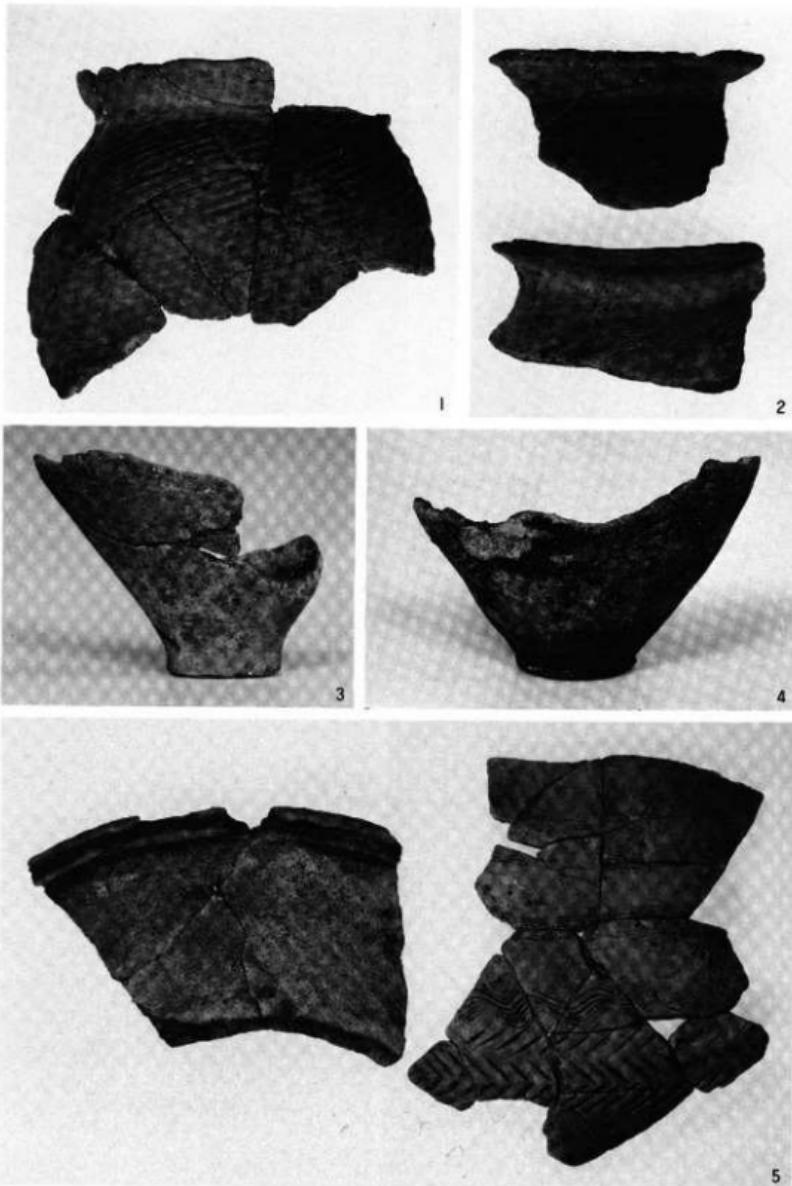


5

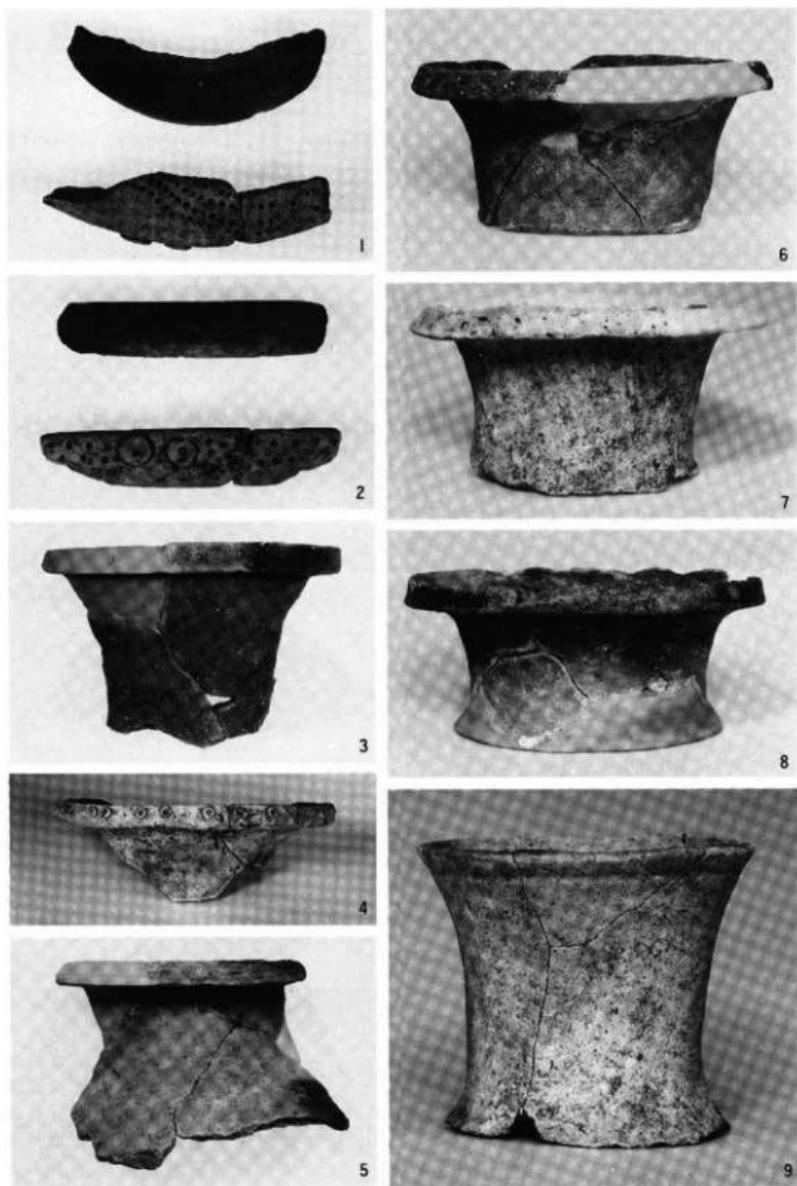


6

出土遺物 (SH-8)



出土遺物 (1~4: SH-8 5: SH-9)



出土遺物 (SH-10)



2



3



4



5



6

出土遺物 (S H - 10)